
順天堂大学
スポーツ健康科学部70周年・
大学院スポーツ健康科学研究科50周年
記念誌

さくらキャンパスの歩み



順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・
大学院スポーツ健康科学研究科50周年記念誌

くさくらキャンパスの歩みく

さくらキャンパス全景



スポーツ健康科学部70周年・ スポーツ健康科学研究科50周年に寄せて

学校法人順天堂 理事長

小川 秀興 OGAWA Hideoki



順天堂は、江戸後期の天保9（1838）年、今から184年前に学祖・佐藤泰然が江戸・薬研堀に設立したオランダ医学塾・和田塾に端を発し、いまに繋がる日本最古の西洋医学塾として発展を続けてきました。その順天堂の発展の中でスポーツ健康科学部（体育学部）も歴代の堂主（理事長）や学部長の指揮のもと大きく発展を続けてきました。

第四代堂主（理事長）である佐藤達次郎は、順天堂醫事研究会を母体に医学専門学校を開設し、順天堂医科大学へと発展させるとともに、昭和26（1951）年、東俊郎を初代学部長として体育学部（現在のスポーツ健康科学部）を併設して順天堂大学としました。その際、学長であった有山登は体育学部設置趣旨で「社会的責務から医師だけでなく、医学的知識をそなえた体育指導者を育成して、社会的に健康づくりに参加する必要がある」と記し、さらに順天堂の特色について「その名も健康教育学という学科が、わが体育学部の主流をなし、医学的教養の深い体育指導者を育成する点において、実技を重んずる他の体育学校と異なる性格がおのずから醸し出されるものと期待している」と述べています。

更に第五代堂主（理事長）の有山登は、昭和46（1971）年、大学院体育学研究科・修士課程（現スポーツ健康科学研究科・博士前期課程）を開設しました。第六代堂主（理事長）の東健彦は、昭和61（1986）年、厳しい運営事情の中、順天堂創立150周年記念事業として、体育学部新キャンパス移転を計画し、第七代堂主（理事長）の懸田克躬が、昭和63（1988）年、体育学部を習志野キャンパスからさくらキャンパス（現在の印西市）へ移転させました。第八代堂主（理事長）・石井昌三は、平成5（1993）年、体育学部の名称を改めスポーツ健康科学部へと改組しました。

そして小職が理事長（第九代堂主）に就任して以降では、平成12（2000）年、スポーツ健康科学研究科・博士課程を開設しました。更に平成17（2005）年、スポーツ健康医学研究所の開設、平成19（2007）年、スポーツロジセンターの開設、平成23（2011）年には第28回日本医学会総会にてスポーツロジと称する学際領域の設置を国際的にも提唱し、第1回国際スポーツロジ学会学術集會を開催、平成26（2014）年、女性スポーツ研究センターを開設しました。更に、学部の入学定員では、平成17（2005）年に280名から330名、平成29（2017）年に330名から410名、令和3（2021）年に410名から600名への増員とともに、従来の3学科制を発展的に解消し、1学科6コース制を導入しました。また、大学院の入学定員も博士前期課程は平成18（2006）年に21名から61名、博士後期課程は平成22（2010）年に4名から10名に増員をしました。

これによりスポーツ健康科学部及びスポーツ健康科学研究科は、健康総合大学・大学院大学である順天堂大学の一翼として国内の体育・スポーツ系大学の中でも屈指の規模と研究力を誇る学部・研究科へと発展を遂げ、国際的にもその知名度を高めてきました（2017年科学誌Natureの特集「SPOTLIGHT ON SPORTS SCIENCE」に掲載されました）。

体育学部（スポーツ健康科学部）が開設された昭和26（1951）年は、第二次世界大戦で日本は敗れ、東京は焼け野原となり、あらゆる価値観が大きく変わるとともに教育方法も大きく変わった時代でした。これは教育大改革と呼ばれるもので、その一つとして、文部省（現 文部科学省）の体育局再興がありました。体育局は、昭和16（1941）年に文部省内に設置されていましたが、戦況の悪化に伴い学徒動員局となり、終戦後再び体育局として復活した経緯があります。そして当時順天堂医院の院長だった東俊郎が復活した体育局の初代局長に任命されました。東俊郎は、内科医であり、かつ、第10回ロサンゼルスオリンピック（昭和7（1932）年）にボート競技の選手として、そして、第11回ベ

ルリンオリンピック（昭和11（1936）年）には監督として出場した経験を持つスポーツ医学の第一人者でありました。東俊郎は体育局長として、体育・スポーツを通じて、全国の若者に元気を与え、後の国民体育大会（国体）の礎を築くことに尽力しました。そして、体育局長の任を果たした後、順天堂に戻り、第四代堂主（理事長）である佐藤達次郎のもとで体育学部の開設に尽力しました。

なお、体育局は平成13（2001）年にスポーツ・青少年局に改称され、さらに現在ではスポーツ庁として組織が再編されています。東俊郎以降、体育・スポーツ行政のトップは常に文部（科）省内部の役人が就任していましたが、平成27（2015）年に民間人から、順天堂の卒業生である鈴木大地（現教授）がスポーツ庁初代長官として抜擢されました。外部から登用された東俊郎、鈴木大地の両名とも順天堂にゆかりのある人物であることは、大変誇らしいことです。

このような歴史と日本の体育発展に貢献しているスポーツ健康科学部は、令和3（2021）年の入学定員600名体制を迎えるにあたり、新講義棟（3号館）と新女子寮（西寮B棟）の増築整備を行いました。特に、新講義棟（3号館）はさくらキャンパスで最も高い建物となり、その最上階からの景色は素晴らしいものになりました。また、予てから要望の強かった①温水プールを含めた新体育館の建築についても令和5（2023）年10月の完成を目標に計画を進捗させています。

習志野キャンパスからさくらキャンパスへの移転から30年以上が経過し、スポーツ健康科学部の施設設備は当時と比較して大きく変容しました。平成27（2015）年に国際規準にも対応した②陸上競技場の整備は勿論、サッカー場・ラグビー場も人工芝に張り替えられました。また、平成29（2017）年には国際体操連盟の認定を有する器具が配置され、最新の空調・映像システムが完備された③新体操競技場（OGAWA GYMNASICS ARENA）が竣工し、昨年東京オリンピックでの本学関係者の大活躍に繋がりました。その他、④屋内競技であるバレーボール・バスケットボール・スカッシュなど各競技の活動施設も再整備されるなど、数々の設備投資を実施してきました。全ての完成年度である令和6（2024）年には2,400名以上の学部生、そして200名以上の大学院生が集うキャンパスとなりますが、学部開設70周年・大学院開設50周年の歴史と伝統を有するスポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科に相応しい施設・設備が整うこととなりました。

令和3（2021）年は、新型コロナウイルス感染症の影響により1年延期となった東京オリンピック・パラリンピック競技大会が通常とは大きく異なる体制で開催されました。本学附属病院群や各学部から総勢253名の教職員を医療スタッフとしてオリンピックスタジアムや選手村に派遣をしました。この実績は他国公私立大学を大きく上回る派遣数であり、健康総合大学・大学院大学である本学の使命を果たしたと考えています。

東京オリンピックに出場した9人の本学学生及び卒業生・修了生はそれぞれが持てる力を存分に発揮しました。それぞれの選手の努力も重要ではありますが、良い人材を発掘し、そして更に成長をさせたことは、育成の順天堂としての誇るべき成果であり、スポーツ健康科学部の各運動部の指導体制の成果であり、これを高く評価したいと思います。そしてパラリンピックに出場した4名の選手も全員が入賞（8位以内）を勝ち取り、素晴らしい結果を残してくれました。3年後に開催されるパリオリンピック・パラリンピックでは、本学関係者の出場・倍増を期して更なる活躍を期待したいと思います。特に、健康総合大学・大学院大学である本学の姿勢として、パラリンピック出場を目指す選手は学生や社会人を問わず積極的に支援を進めたいと考えています。スポーツ健康科学部が中心となり、全学を挙げてその役割を果たして参りたいと思います。

本学は「不断前進」の理念のもとに学是「仁」を大切にしながら、出身校、国籍、性別の差別を行わない「三無主義」を学風として掲げ、「健康総合大学・大学院大学」として教育・研究・医療そしてリベラル・アーツを通じて国際レベルでの社会貢献と人材育成を進めて参ります。特に、学部開設70周年・大学院開設50周年を迎えたスポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科においても学是「仁」、理念「不断前進」、そして学風「三無主義」を高らかに掲げ、更なる発展と世界の順天堂を目指して参ります。



スポーツ健康科学部70周年・ スポーツ健康科学研究科50周年に寄せて

学長

新井 一 ARAI Hajime

2021年4月に、本学スポーツ健康科学部とスポーツ健康科学研究科はそれぞれ開設70周年と50周年を迎えました。まずは、これまで同学部・研究科の発展に尽力されてきた多くの先達と、今を支える教職員の皆様に心より感謝と敬意を表します。医学部単科の順天堂医科大学に体育学部が開設され、順天堂医科大学が順天堂大学に改組となったのが1951年、そして1971年には私学初の大学院体育学研究科（修士課程）が開設されました。その後、順天堂創立150周年にあたる1988年に、学部・研究科は習志野キャンパスからさくらキャンパスに移設となります。1991年には体育学部に女子学生が入学、1993年には体育学部はスポーツ健康科学部に改組、2000年には体育学研究科からスポーツ健康科学研究科に改組(1997年)となりそこに博士後期課程（博士課程）が開設され、現在の学部・大学院の姿になります。体育学部は一期生を1952年に迎え入れますが、佐藤達次郎理事長、有山 登学長、東 俊郎学部長のもと挙行された入学式に参列した新入生の数は12名であり、定員600名の現在のスポーツ健康科学部をみるとまさに隔世の感があります。学部開設から70年、そして研究科開設から50年の年月を経て、本学は全国のスポーツ科学系大学のなかで確固たる地位を築き上げました。

さて、新型コロナウイルス感染症の甚大なる影響を受けた2021年でしたが、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会が7月から9月にかけて開催されたました。本学からはオリンピックに9名（3名の学部学生・大学院生を含む）、パラリンピックに4名（2名の学部学生・大学院生を含む）の選手が出場、さらに数多くの教職員が監督やコーチなどのスタッフとして大会に参画しました。出場選手の全てが私達に感動を与えてくれましたが、そのなかでも体操の橋本大輝選手（スポーツ健康科学部2年）、萱和磨選手（スポーツ健康科学研究科博士後期課程1年）、谷川航選手（本学OB）、そして陸上の三浦龍司選手（スポーツ健康科学部2年）の活躍は特筆すべきものでした。本学は1964年の東京大会以来、さまざまな種目で数多くの選手・監督・コーチをオリンピック・パラリンピックに送り出してきました。1988年ソウル大会では、当時学部4年生だった鈴木大地選手（前スポーツ庁長官、現本学教授）が競泳男子100m背泳ぎで金メダルを獲得しました。これまでにオリンピック・パラリンピックに出場した本学在学学生・卒業生・教職員は99名に上り、また獲得したメダル数は21個（金8個、銀9個、銅4個）に達します。学部創設から70年、本学は我が国のオリンピック・パラリンピックの歴史に確かな足跡を残し、その実績は現在進行形で益々大きなものになっています。

1951年に体育学部が開設され医科大学から大学になった本学ですが、そこには大きな必然性があり自らを健康総合大学・大学院とする原点があるといえます。人生100年時代が叫ばれる昨今ですが、実際のところ我が国の平均寿命は約84歳、健康寿命の平均は約74歳です。すなわち両者には10年の差異があり、その差異を埋めつつ平均寿命の更なる延伸を図ることが、私達に突きつけられた課題になります。そして、その課題を克服するためにスポーツの果たす役割は間違いなく大きなものであり、医学と連動しつつ科学するマインドをもって人々の健康の増進・維持に寄与すべく、歩みを進めなくてはなりません。スポーツ健康科学部・研究科のさらなる発展を祈念して、学部開設70周年・研究科開設50周年の祝辞といたします。



スポーツ健康科学部70周年・ スポーツ健康科学研究科50周年に寄せて

学長特別補佐

木南 英紀 KOMINAMI Eiki

順天堂大学スポーツ健康科学部開設70周年・スポーツ健康科学研究科開設50周年記念、誠にありがとうございます。昭和26年に新制・順天堂大学が発足し、体育学部（現・スポーツ健康科学部）が併設されました。翌年の昭和27年に第1回入学式が行われ、12名の学生が入学し、学部がスタートしております。現在600名の新入生を受け入れる学部からみると、本当に隔世の感がいたします。

大学院体育学研究科（修士課程）の開設は、20年後の昭和46年と、私学では初の研究科開設でした。1988年に習志野キャンパスから現在のさくらキャンパス誕生に移っておりますが、この年に私は順天堂大学医学部教授として赴任し、学生部長就任を皮切りに長くスポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科に関わりを持つこととなります。

平成3年には、体育学部に初の女子学生が入学し、平成5年に体育学部からスポーツ健康科学部へ改組致します。学部は3学科制で、当時としては新鮮で、大きな可能性のあるスポーツマネジメント学科も誕生します。これ以後他学に開設される体育系学部のほとんどがスポーツ健康科学部である現状からみると、世界の動向、時代を読んだ素晴らしい改組であったと思われます。

平成12年に学長に就任された小川秀興先生は、私立大学初のスポーツ系大学院修士課程が昭和46年に発足して30年近くになるのに未だ博士課程が設置されていないことを非常に遺憾に思われ、直ちに行動に移り、この年に博士後期課程の開設に導きます。平成15年に日本初の博士（スポーツ健康科学）が誕生となる学位授与式に、学位記授与者を挟んで石井理事長、小川学長の脇に青木スポーツ健康科学研究科長と私（医学研究科長）が並んだ写真が残っております。その後、大学院は国内外から学部卒業生、留学生、社会人を受入れ、本学のみならず他学の教員・研究者を、また国際的に活躍している専門家を多数輩出していきます。

平成17年に最初の研究所、スポーツ健康医科学研究所が開設されます。小川秀興理事長・学長のリーダーシップの下、申請された文部科学省ハイテク・リサーチ・センター整備事業が選定されてセンター建物が新設され、研究が開始されます。次いで大学全体としての医学とスポーツを融合した研究、社会実践・実装を目指すものとして、スポーツロジーセンターが平成19年に医学研究科に設置され、平成26年に女性スポーツ研究センターが設置されます。そして令和3年にスポーツ健康医科学推進機構が発足いたしております。大学院を基盤にしてこれらの研究拠点は、学会発表・論文発表の顕著な実績とともに、学内のみならず国内外との研究拠点と連携したプロジェクトの成果も多く出ております。

スポーツ健康科学の教育研究を通じて、グローバルな視野とリーダーシップを備え、社会に貢献する人材を育成し、次の10年には、「世界で注目される学部・研究科」に発展することを祈念いたします。



更なる未来へ！

スポーツ健康科学部長・スポーツ健康科学研究科長

吉村 雅文 YOSHIMURA Masafumi

本年をもって70周年の記念すべき節目を迎えることができましたことに、13600名の体育学部・スポーツ健康科学部の卒業生の皆さんと、また、本年をもって50周年、1388名の博士前期・後期課程の修了生の皆さんと共に心からお祝いしたいと思います。さらに、この度は、学部長・研究科長在任中に記念誌への寄稿の機会を与您いただき、大変光栄であるとともに、衷心より感謝申し上げます。

1951（昭和26）年に順天堂大学体育学部は、国民の衛生や健康増進に資する保健体育教育等に携わる人材を育成するために習志野の地に開設されました。その発展とともに1971（昭和46）年には、大学院体育学研究科も開設されました。その後、様々な社会変化に対応するために、1993（平成5）年に体育学部をスポーツ健康科学部に改組し、現在のさくらキャンパスに移転しました。体育学科をスポーツ科学科に改めるとともに、新たにスポーツマネジメント学科を設置し、スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科、及び健康学科の3学科のそれぞれでスポーツを通じて社会の要求に応えるべき人材を育成してきました。さらに、2021（令和3）年には、3学科制を廃止し、各学科が有していたスポーツへの科学的視角を1つの教育課程に統合し、スポーツと健康というテーマの融合をコアとしながらもスポーツの可能性を多角的にも学ぶことができるようスポーツ健康科学科を設置しました。これからのスポーツ人材には、スポーツがもつ価値を広げ、それを高めることができる能力が一層求められ、入学時から細分化した学科で早い段階から専門教育を実施するよりも、スポーツに対する多角的な視点を十分に涵養し、学生それぞれが活躍を目指す分野に必要な専門性に加えて、様々な分野とスポーツとを融合できる力をも身に付けることができる教育課程が必要となります。その教育課程の特徴は、「一般教養科目」と「専門基礎科目」「専門展開科目」及び「専門科目」に区分され、それぞれの教育が有機的に連動し、基礎から展開、展開から専門に向けて段階的に関連性を持ち、体系的に学修できるように編成しているところです。

私たちは膨大な時間をかけ、大学を取り巻く環境の変化や他の体育・スポーツ系大学を十分に分析、また、学生一人ひとりが自分自身の成長を実感し、しかも順天堂大学を選んで本当に良かったと感じてもらえるよう、さらに、今後スポーツの新たな役割にも応えることのできる人材を輩出するためにはどうすればよいかを練りに練って、スポーツ健康科学部として大きな大きな教育改革に挑戦いたしました。もちろん、実施する中で様々な問題は出てくると思いますが、全教職員が力を合わせ、更なるスポーツ健康科学部の発展のために「ReBorn」という感覚を大切にし取り組んでいきたいと思っております。

高等教育機関の使命は人を育てることにあると思っております。全国各地から優秀な学生を集め、世の中で活躍する多彩な人材を輩出し続けてきた学部70年間と大学院50年間と同様に、これからもすばらしい卒業生を社会に送り出す大学であり続けなければならないと思っております。創立70・50周年にその誓いと決意を新たに、「順天堂大学スポーツ健康科学部・研究科の更なる未来」へ「不断前進」の理念のもとに学是「仁」を大切にしながら、邁進したいと思っております。

結びに、今回の40年ぶりの記念誌発行に関しまして、多大なご尽力を賜りました啓友会、様々な形でご協力いただきました皆様方に、心から御礼と感謝の念を表したいと存じます。本当にありがとうございました。

体育からスポーツ健康科学へ



第10代スポーツ健康科学部長

澤木 啓祐 SAWAKI Keisuke

1988年順天堂創立150周年事業の一環として、スポーツを科学的に探究できる最先端の施設と世界に通用するアスリートの育成に対応できる環境を求め体育学部ならびに医進課程は、36年住み慣れた習志野より「さくらキャンパス」に移転した。

1991年7月更なる飛躍を目指し将来を見据えた教育体制の構築を大学理事会より求められた。教授陣からは反対意見も出されたが、助教授以下の構成による「将来構想準備室」が黒田善雄学部長の発議により、北森義明室長の下、武井正子、伊藤政男、鈴木勝彦、北村薫、島内憲夫、澤木等が指名された。学部名改称、スポーツ科学、健康、マネジメントへの学科改編、カリキュラムの策定等々を国内外の大学を参考に喧々諤々の議論を展開し膨大な文部省申請書類を時間との戦いの中に作成し、将来に思いを馳せて学部の「改組転換」が行われた。1993年「スポーツ健康科学部」が誕生。新学部の斬新さにより受験生が倍増、その後、他大学も追従することとなった。

学部長在任中（2004～2009年）は、理事会の御理解と教職員の連帯と士気の高まりにより、北京体育大学学術交流協定、国際会議開催、啓友会資金補助等による屋内プールの建設、運動施設の充実、運動部強化等々に邁進した。

現在、本学は、世界に誇れる体操競技、日本インカレ29回、箱根11回優勝の陸上競技を頂点とし、多くの運動部の現役、卒業生、教職員の多数が選手、そして強化、サポートスタッフとしてオリンピック・パラリンピックに参加している。

時代の要請や社会の変化に対応し「健康・スポーツの向上」に寄与する実践の学問、研究を温故知新の志を忘ることなく不断前進されることを学部11期生・研究科3期生の一員として願っている。

選ばれ続けるために！



第11代スポーツ健康科学部長

野川 春夫 NOGAWA Haruo

鹿屋体育大学生涯スポーツ学講座主任教授の職を辞し、総合英語の教授として着任。11年後、学部長職を拝命。スポーツ・健康科学系の新学部が首都圏で次々と設置される中、地理的ハンデと老朽化が進む施設を抱える中、「全寮制」と「少人数教育」を他大学との差別化戦略の目玉とし、市場（受験生・就職先）から「選ばれ続ける学部」確立を目指して『ブランド力向上』に注力した5年間を振り返る。

目的と目標の設定：学是『不断前進』の方向性と目標が学部において不明瞭と感じ、ドラッカーの「目標による管理」を学部運営で重視。目的は「選ばれ続ける学部」、目的達成の具体的な目標に「就職力」「教育力」「研究力」「競技力」「国際力」の5分野を設定。また、3～5年間先を見据えた中短期計画を策定し、マクロ環境や市場環境の変化に敏速・柔軟に対応できる内部環境の体制づくりを試みた。

ライン（教員）とスタッフ（職員）の充実：最重視したのが就職力と教育力。「教職の順天堂」の継続と就職率100%を目指し、就職市場から学生・院生を魅力溢れるプロダクトとして訴求されるために、少人数制のきめ細かい教育と学生に寄り添う進路指導を実施。特に、次代を担う優秀なラインの補充。教員を支える事務スタッフの献身的な尽力がロイヤリティの高い卒業生・保護者を創出することを実感。

今後の期待：市場から選ばれ続けるためには、学生生活の満足度の最大化に直接関連する学生寮、教学施設、スポーツ施設、食堂や図書館等の福利厚生施設の拡充とアップグレードが必須。特に、定員増に対応して「少人数教育」体制を保持拡充すべきラインとスタッフの増員が期待される。

世界の健康分野をリードする 学部・大学院への期待!



第12代スポーツ健康科学部長
島内 憲夫 SHIMANOCHI Norio

順天堂大学体育学部健康教育学専攻卒業の唯一の学部長として、一言私の想いを述べたいと思います。1951年に創設された順天堂大学体育学部の初代学部長の東俊郎先生は、体育学専攻と健康教育学専攻を設置しました。1993年に体育学部はスポーツ健康科学部に改組されましたが、その前に故高橋俊哉先生とイギリスのウエールズ医科大学大学院を訪問した時のことをお伝えしておきたい。それは、この大学院が世界で最初にWHOの提唱するヘルスプロモーションを標榜した大学院であったからです。そのきっかけは、1986年にデンマークのコペンハーゲン大学医学部社会医学研究所に留学中に、WHOヨーロッパ地域事務局のイローナ・キックブッシュ博士(WHOヘルスプロモーションの提唱者)が、ウエールズ医科大学大学院のドン・ナットビーム教授(現シドニー大学教授)を私に紹介して下さったからです。ドン・ナットビーム教授は、初対面の私に「Bunton R.&Macdonald G.et al.:HEALTH PROMOTION, Routledge, 1992.」をプレゼントして下さいましたが、その書籍に「医学・健康心理学・健康社会学・健康教育学」がコア・カリキュラムとして位置付けられていたので、感動と驚きを禁じ得なかったことを今でも覚えています。なぜなら、順天堂大学体育学部健康教育学専攻が、すでに「医学・精神保健学・保健社会学・健康教育学」を主科目と位置づけ、世界に先駆けてWHOの提唱するヘルスプロモーションの考えを学生に教授していたからです。この歴史的事実「健康総合大学の一翼を担うスポーツ健康科学部が、世界の健康分野をリードしてきたこと」を全教員が再認識して、自負心と誇りをもって継承・発展させて欲しいと心から願っています。

「順天堂大学スポーツ健康科学部 70周年・大学院スポーツ健康科学 研究科50周年」記念に寄せて



第13代スポーツ健康科学部長
加納 實 KANO Minoru

スポーツ健康科学部70周年・大学院スポーツ健康科学研究科50周年、誠におめでとうございます。習志野からさくらキャンパスへの移転、体育学部からスポーツ健康科学部への改組、そして、今年度から定員600人と母校の益々の発展・隆盛に目を見張るばかりです。

私は体育学部を卒業し、大学院体育学研究科を修了した昭和52年に奉職し、39年間務めさせていただきました。その間、体操競技部と関わり、1997年の全日本インカレ(尼崎)において、20年の歳月をかけて初優勝したこと。また、2004年のアテネオリンピックでは米田・富田・鹿島を擁し、監督として28年ぶりとなる男子体操の団体金メダルを獲得したこと。これらは生涯忘れることのできない出来事でした。

平成26～28年には副学部長を経て、学部長の要職を経験いたしました。本学5番目となる、国際教養学部が開設されたこと。北京世界陸上の事前キャンプ地として強豪アメリカチームがさくらキャンパスで練習したこと。また、330人から410人への定員増の実現に向けた改革を推し進めた時代でした。

2020東京オリンピック・パラリンピックでは、本学関係者13人の選手が大活躍をし、国民に大きな勇気と感動を与えてくれました。「スポーツと健康」を通して、社会に貢献できる人材の育成は本学部の使命であり、特にスポーツ活動の活性化は、本学部にとって欠くことができないものと確信をしております。

今後とも、スポーツ健康科学部の益々の発展を期待しております。

大学院50周年を祝しつつ、 想うこと



第9代スポーツ健康科学研究科長
米田 継武 YONEDA Tsugutake

大学院スポーツ健康科学研究科が不断の半世紀を前進して参りましたこと誠に慶賀のいたりです。昭和46年習志野の地で修士課程21名定員で始まり、さくら移転後平成9年から修士61名、新たに後期博士課程10名定員で高度専門教育の体制が確立しました。思い起こされるのは前任研究科長青木純一郎教授(のち副学長)他教員で携わった後期課程の設置、伴う社会人入学を含めた前期課程の学生定員増の作業のことです。既に体育学部、改称スポーツ健康科学部と修士課程をもって、教育界をはじめ各界に秀でた人材を送り出しましたが、社会の発展はそれまで思う以上に一層優れた指導的人材を求めようになっていました。指導的人材は少なくとも分野的に一人で課題の解決に向かう能力と、より高い説明力を身につけることが肝腎で、そのために大学がより高次の課程を用意し学位を与える。段階のある学位はその能力の目安であり証拠でもあるのです。

今日、スポーツ科学を標榜する大学・大学院が林立の態であり差別化の方向も徒ならぬ状況にもみえます。それを思えば、平成9年の順天堂スポーツ健康科学における大学院の転換は、特に私立大学界に魁となったのであって、あの時を失すは意義の逸すところ大だったかもしれず、果たした業を噛み締めざるを得ません。号令をかけ見守って下さった小川理事長の学長時代からの理念の内であるとは承知していたものの、今日の法人の隆盛を観るにつけて、大学としての戦略の一端であったのだとその慧眼にあらためて畏敬の念を抱き続けております。学部の拡大発展も顕かになった今、大学院への導きを一段と進め、一層の飛躍を念願してやみません。

習志野キャンパスでの思い出と これからへの期待



第10代スポーツ健康科学研究科長
形本 静夫 KATAMOTO Shizuo

この度、学部および大学院開設70周年と50周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。私は、1972年、他大学の大学院に進学された助手の先生の後釜として、当時としては珍しい2年間の期限付きで、習志野キャンパスに赴任いたしました。期限付きには不安もありましたが、当時の運動生理学研究室には、我が国を代表する石河利寛教授と新進気鋭の青木純一郎助教授がおられ、そのもとで学べるのはまたとないチャンスと決断しました。

旧陸軍の騎兵第一旅団の馬小屋の跡を利用した研究室は木造で、建物の横には馬の水飲み場があり、金魚がのどかに泳いでいました。部屋にクーラーはなく、夏はヤブ蚊の集団と戦いながら、教育と研究の準備をする日々が続いたものです。計測機器は手作りの物が多く、測定には入念な準備が必要でした。これらの機器は学部や大学院の教育にも使いましたが、扱いの難しさもあり、実験実習が深夜に及ぶことも多く、当時の学生諸君には大変な苦勞をかけ、申し訳なく思っています。しかし、その分学生との距離は近く、得るものが多かったと思います。施設設備の整備拡充のため、競争的資金獲得の書類づくりに奔走したのもこの頃でした。

このように、習志野キャンパスでの教育・研究環境は決して恵まれたものではなく、苛酷なものであったと言えます。しかし、その中で、教育や研究に対する姿勢のあり方を学べたのは望外なことでした。先日キャンパス訪問時に案内された3号館の施設設備は、実に立派なものでした。あとは時を惜しむ心を持った学習と研究が推進され、世界に飛躍する人材が輩出されることを期待して止みません。

70周年、50周年によせて 「歴史をつむぐ 順天堂スポーツ健康科学」



第11代スポーツ健康科学研究科長
北村 薫 KITAMURA Kaoru

順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・スポーツ健康科学研究科50周年をお慶び申し上げ、メッセージをお届けいたします。

大学のビッグイベントは多くありますが、私個人としては、1993年の体育学部からスポーツ健康科学部への学部改組、それに続く1997年の研究科名称変更、2000年の博士後期課程開設にかかわったことが忘れられません。

研究科長在任時は、2つのことに専念しました。1つは透明性のある昇任基準をつくること、1つは博士の学位を授与しやすくすることです。

昇任は、最終的には学長・理事会に諮られるのですが、その前段階として、研究科内の基準を「見える化」することに注力しました。

博士の学位は、博士後期課程設置申請時、国立大学を参考に審査基準が作成されました。和文の場合、アクセプト論文3本を条件とし、そのうえで、全体をまとめた総説論文を審査対象にするものでした。

私は「承認された学術誌のアクセプト論文1本を博士論文として審査する」と変更しました。先生方の中には、「質が低下する」との意見もありました。ご意見を拝聴し、私の考えをお示しするなかで賛同者が増え、審査基準の変更が実現しました。

学位取得者が増えることで大学・研究機関への就職が有利になったものと認識しています。

スポーツ・健康の科学的研究と実践で順天堂は日本に冠たる歴史を持っています。歴史は更新されることで発展します。今後、順天堂スポーツ健康科学がアップデートを繰り返し、研究成果を世に問い、ますます発展することを期待しております。

時代をリードする存在であり 続けるために



第12代スポーツ健康科学研究科長
第14代スポーツ健康科学部長

内藤 久士 NAITO Hisashi

スポーツ健康科学部70周年および同研究科50周年の節目を、現職教員として迎えることができました。学部長ならびに研究科長在任中は、学部定員増の準備と大学院のさらなる充実に微力ながら取り組みましたが、これまで本学部・研究科を支えてくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。ここでは、本学部・研究科のさらなる発展を期待して、将来への展望を記させていただきます。

まず、立ち向かうべき課題に18歳人口の減少があげられます。学部100周年を迎える30年後には、18歳人口は現在の約116万人から81万人へと約3割、進学率の向上を勘案しても約2割の学生数の減少が予想されます。さらに、学校教育における体育・スポーツの位置付けの激変も懸念材料です。例えば、教科としての保健体育、運動部活動や学生アスリートの強化は、今後も学校制度の中で存続するのでしょうか?これらの事柄への対応は、学生確保という観点から本学部にとっての最重要な課題となるでしょう。一方、スポーツ健康科学の学術としての重要性・必要性は一層認識され、リカレント教育や大学院進学率が高まるために、研究科の拡充にできる限り速やかに取り組まなければならないでしょう。

社会ニーズの変化をより敏感に感じ取り、従来のスポーツ健康科学の概念にとらわれずに幅広い領域で活躍できる人材を育成し、またそれを支える研究力を向上させるために、学部・研究科の組織としての取り組みは極めて重要です。近い将来、体育・スポーツ系大学・大学院の選択と集中、他の学術領域との融合が加速すると思いますが、本学部・研究科は、今後も日本と世界のスポーツ健康科学をリードし続ける存在であると信じております。



年表 1986—2021



キャンパス移転に関する会議の様子



キャンパス建築中の様子



移転当時のさくらキャンパス1号館



完成当時のさくらキャンパスを空から望む

| 西暦（和暦） | さくらキャンパス | スポーツ健康科学部 | スポーツ健康科学研究科 |
|-------------|---|--|---------------------------|
| 1986（昭和61）年 | 順天堂創立150周年記念事業組織委員会設置 体育学部の新キャンパスを千葉県印旛郡印旛村に決定 建設着工 | | |
| 1988（昭和63）年 | さくらキャンパス竣工式（2月28日） 東俊郎胸像建立（8月17日） | | |
| 1989（平成元）年 | | 入学定員を体育学科200名、健康学科80名 に変更 | |
| 1991（平成3）年 | 体育学部父兄会から体育学部さくら会に改称 | 体育学部女子1期生入学（体育学科36名、 健康学科20名） | |
| 1992（平成4）年 | 第2体育館竣工 | | |
| 1993（平成5）年 | 体育学部さくら会から順天堂大学さくら会に改称 | 体育学部をスポーツ健康科学部に 改組・改称し、スポーツ科学科、 スポーツマネジメント学科、健康学科の 3学科を設置 収容定員1120名（入学定員：スポ120名、 マネ80名、健康80名） | |
| 1996（平成8）年 | | 最後の体育学部卒業式（3月） | |
| 1997（平成9）年 | 啓心寮創設50周年記念式典 | 編入学制度導入 | 体育学研究科をスポーツ健康科学研究科 に改称 |
| 1998（平成10）年 | 学部卒業生の保護者の会として桜順会設立（8月） | | |
| 2000（平成12）年 | | | 博士後期課程設置（入学定員4名） |
| 2001（平成13）年 | | 入学定員をスポーツ科学科140名、 スポーツマネジメント学科70名、 健康学科70名に変更 科目等履修生制度創設 | 博士前期課程入試において社会人 入試を導入 |
| 2002（平成14）年 | | スポーツ科学科にコース制（スポー ツ医科学、コーチング科学）を導入 精神保健福祉士養成課程開始 | |
| 2003（平成15）年 | | | 日本初の博士（スポーツ健康科学） が誕生 |



移設前の東俊郎先生の像（事務室横、泰然の庭）



懸田理事長ヘソウル
オリンピック金メダル
受賞の帰国報告をする
鈴木大地選手（「順
天堂だより」第192号
表紙）1988年



女子1期生卒業式 1995年



シドニーオリンピック出場の齊藤良宏、原田睦巳両選手と
小川学長、加納助教授（後列左より時計回りで）2000年



博士学位記（第1号）授与式 2003年



人工芝化されたサッカー場の様子



さくらキャンパス東門 2009年



OGAWA GYMNASTICS ARENA 北側全景



講義棟の3号館

| 西暦（和暦） | さくらキャンパス | スポーツ健康科学部 | スポーツ健康科学研究科 |
|-------------|---|--|--|
| 2004（平成16）年 | 医療看護学部がさくらキャンパスで月曜日の授業を開始 | | |
| 2005（平成17）年 | スポーツ健康医科学研究所の設置 サッカー場人工芝化 第1回順天堂大学スポーツ健康科学部国際シンポジウム開催 | スポーツ科学科の入学定員を190名に変更 AO入試の導入 | |
| 2006（平成18）年 | スポーツ健康医科学研究所竣工 | | 博士前期課程の入学定員を61名に変更 |
| 2008（平成20）年 | 北京体育大学と国際交流協定を締結 | 正課教育内でのキャリア教育開始 養護教諭免許課程開始 玉川大学特別協定プログラム（小学校教諭2種免許課程）開始 | |
| 2010（平成22）年 | | センター試験を利用した入試の導入 一般入試における実技試験の廃止 | 博士後期課程の入学定員を10名に変更 |
| 2011（平成23）年 | | | 博士前期課程において早期履修制度（学部4年生対象）を導入 |
| 2012（平成24）年 | | | 博士前期課程において専攻領域を専攻系に変更 博士前期・後期課程において早期修了制度導入 |
| 2013（平成25）年 | 順天堂創立175周年 啓友会館竣工 | | 博士前期課程において専攻系を廃止 |
| 2014（平成26）年 | 女性スポーツ研究センター設立（8月1日） | CAP制導入 | |
| 2015（平成27）年 | 国際教養学部一般体育科目授業開始 陸上競技場改修（ウレタン舗装） | 推薦入試における実技試験の廃止 | |
| 2016（平成28）年 | 図書館分館からさくらキャンパス学術メディアセンターに改称 | | |
| 2017（平成29）年 | OGAWA GYMNASTICS ARENA（新体操競技場）竣工 女子寮（啓心寮 西寮A）竣工 健康管理室から安全衛生管理室に改称 | 収容定員を1640名に変更（入学定員：スポ250名、マネ80名、健康80名） | |
| 2018（平成30）年 | クロスカントリーコース整備 スポーツクリニック開設 | | |
| 2019（令和元）年 | 保健医療学部一般体育科目授業開始 スポーツクリニック（婦人科相談）開始 | | |
| 2020（令和2）年 | Web会議システムを用いた遠隔授業を導入 | 同窓会（啓友会）創立60周年 | |
| 2021（令和3）年 | スポーツ健康医科学推進機構を設置（4月） 女子寮（啓心寮 西寮B）・講義棟（3号館）竣工 | 体育学部の開設から70周年 スポーツ健康科学部を改組して3学科制から1学科6コース制 スポーツ健康科学科を設置（収容定員2400名） | 体育学研究科の開設から50周年 |



アテネオリンピック壮行会 2004年



北京オリンピック壮行会 2008年



ロンドンオリンピック壮行会 2012年



リオデジャネイロオリンピック 2016年
Photo: フォートキシモト



東京オリンピック・パラリンピック祝賀・報告会 2021年

目次

| | |
|------------|---|
| さくらキャンパス全景 | 2 |
|------------|---|

挨拶

| | |
|---|----|
| スポーツ健康科学部70周年・スポーツ健康科学研究科50周年に寄せて | |
| 理事長 小川 秀興 | 4 |
| 学長 新井 一 | 6 |
| 学長特別補佐 木南 英紀 | 7 |
| 更なる未来へ！ | |
| 学部長・研究科長 吉村 雅文 | 8 |
| 体育からスポーツ健康科学へ | |
| 澤木 啓祐 | 9 |
| 選ばれ続けるために！ | |
| 野川 春夫 | 9 |
| 世界の健康分野をリードする学部・大学院への期待！ | |
| 島内 憲夫 | 10 |
| 「順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・大学院スポーツ健康科学研究科50周年」記念に寄せて | |
| 加納 實 | 10 |
| 大学院50周年を祝しつつ想うこと | |
| 米田 継武 | 11 |
| 習志野キャンパスでの思い出とこれからへの期待 | |
| 形本 静夫 | 11 |
| 70周年、50周年によせて「歴史をつむぐ順天堂スポーツ健康科学」 | |
| 北村 薫 | 12 |
| 時代をリードする存在であり続けるために | |
| 内藤 久士 | 12 |

年表

| | |
|----|----|
| 年表 | 14 |
|----|----|

さくらキャンパスの歩み

| | |
|--|----|
| 座談会1. 順天堂大学とスポーツ | 22 |
| 座談会2. スポーツ健康科学部・スポーツ健康科学研究科のさらなる発展にむけて | 32 |

第1章 習志野からさくらへ

| | |
|----------------------------------|----|
| 習志野キャンパス 1951（昭和26）年～1988（昭和63）年 | 46 |
| さくらキャンパス 1988（昭和63）年～ | 48 |

第2章 教育課程

| | |
|------------------|----|
| スポーツ健康科学部の教育課程 | 50 |
| スポーツ健康科学研究科の教育課程 | 52 |

第3章 研究活動

| | |
|-----------------|----|
| スポーツ健康医科学研究所 | 54 |
| 研究活動、科学研究費、研究紀要 | 55 |
| 体格体力運動能力累加測定 | 56 |

第4章 実践教育

| | |
|------|----|
| 学外実習 | 58 |
| 語学教育 | 59 |

第5章 学生活動と支援

| | |
|-------------|----|
| 学生部・自治会・順風祭 | 60 |
| 学生寮 | 62 |
| 運動部指導者会 | 65 |

第6章 社会連携と国際交流

| | |
|------|----|
| 社会連携 | 66 |
| 国際交流 | 67 |

第7章 就職支援

| | |
|------|----|
| 就職支援 | 68 |
|------|----|

| | |
|-------------------------------|-----|
| 教職支援 | 70 |
| 進路相談室 | 71 |
| 第8章 広報・学生募集 | |
| 学生募集 | 72 |
| 第9章 附属施設・機関・組織 | |
| スポーツ健康医学推進機構 | 76 |
| 女性スポーツ研究センター | 77 |
| 学術メディアセンター | 78 |
| さくらキャンパス安全衛生管理室 | 80 |
| アスレティックトレーニングルーム | 82 |
| 第10章 同窓会 | |
| 啓友会 | 83 |
| 第11章 保護者会・後援会 | |
| さくら会・桜順会 | 84 |
| 資料編 | |
| スポーツ健康科学部の教育課程の変遷 | 86 |
| 在籍者数・志願者数・入学者数・卒業（修了）者数 | 92 |
| 教職員数 | 102 |
| 名誉教授・教授 | 106 |
| 委員会活動 | 112 |
| 事務組織の変遷 | 114 |
| 企業就職内定先内訳の変遷 | 117 |
| 卒業後の進路状況 | 118 |
| 教員免許取得者数 | 120 |
| 学部・研究科の沿革（年表） | 122 |
| 順天堂大学さくらキャンパス構内図 | 128 |
| 編集後記 | 129 |
| 奥付 | 130 |

左から山崎一彦、原田睦巳、鈴木大地、鯉川なつえ、中村充の各氏



『さくらキャンパスの歩み』刊行記念座談会

1 順天堂大学と スポーツ

●日時：2021年12月7日（火）
●場所：順天堂大学 3号館3階301ホール

鈴木大地

スポーツ健康医科学推進機構構長
公益財団法人日本水泳連盟会長
ソウルオリンピック金メダリスト

中村 充

剣道部部长兼監督
スポーツ推進支援センター運営委員長

鯉川なつえ

陸上競技部女子監督
女性スポーツ研究センター副センター長

原田睦巳

体操競技部部长兼監督
日本体操協会男子強化本部スーパーバイザー

●司会

山崎一彦

陸上競技部監督
日本陸上競技連盟強化委員長

司会（山崎） 本日、スポーツ健康科学部70周年・スポーツ健康科学研究科50周年を記念いたしまして座談会を開催いたします。

本日の司会を務めます山崎です。この座談会では、これからの本学での学生スポーツの発展やスポーツを通じた社会貢献を考えたときに、さくらキャンパスでの30年も振り返りながら、これからも大切にしていけるもの、変えていかなければならないもの、目指すべき方向とビジョンなどについてご意見をいただければと思っております。

まず「トップアスリートの育成について：競技力向上の観点から」、それから「運動部に対しての支援体制、または社会貢献」について、それぞれのお立場からお話をうかがいたいと思います。

トップアスリートの育成について

司会 まずはじめにトップアスリートの育成について：競技力向上の観点から、スポーツ健康科学部副学部長の鈴木大地先生から、ご意見いただければと思います。よ

ろしくお願いいたします。

鈴木 自分が学生のときの運動部ですが、私たちが1年生から4年生まで、箱根駅伝優勝四連覇、全日本大学サッカーも優勝でしたかね、私個人としてはオリンピックにも出させてもらったりして、同じ学年でいろいろな運動部が活躍していた時代でした。

今よりも学生の人数が少なく、1学年140人しかいませんでした。人数は少なかったですが、それぞれの競技で日本を代表するような部活動が多かったですね。

同級生は、「よく学び、よくスポーツをし、よく遊ぶ」そういうバランスのとれた学生がたくさんいたかなという記憶があります。もちろん「学ぶ、スポーツする、遊ぶ」その割合はそれぞれですけども。（一同 笑）

「よく学ぶ」ということでは、今では考えられないと思いますが、夜中過ぎて朝方まで実習とかよくありましたね。ですので、すごい学生生活がタフでした。繰り返しになりますが、同級生や先輩後輩からいろいろな考え方を知って、いろんなことを学んだり、感じたりしながら、競技も突きつめる、それがいい方向にいったのではないかと思います。

個人的には選手としていかに強くなるかとか、速くな

るかとかが最優先で生活を送っていました。表現が適切かどうかわかりませんが、かなりとんがってました。でも当時は、それでなければダメだなという、自分なりにそう思っていました。

久しぶりに大学に戻ってきましたが、根本的には今も昔もそんなに変わらないのではないかと思います。優秀な学生が多く、向学心にあふれています。

司会 (あいづち打ちながら) それでは、今まさに金メダリストを育てている、体操の原田先生に、お聞きします。

鈴木 聞きたいですね。

司会 このあたりは30年後、今ですね、現在もこのように活躍されていて、金メダリストはじめ、メダリストを増産してますけれども、その“肝”みたいなものってなんでしょう。

原田 増産と言われますと嬉しいなにも戸惑いもありますが(笑)。私は体操競技を見続け、その専門家としての見地からすると、表現は良くないのかもしれませんが、まず素材が大事だと思います。世界で活躍し、メダルを獲得できる選手になっていこうという、ダイヤの原石のような素材を持った選手をいかにスカウティングできるかということがとても大事なんです。その観点で考えると、今、順天堂大学をご卒業された方々がOB・OGとして、様々なところで活躍されていて、そういった方々に素晴らしい素質をもった選手を見つけ、ジュニア期での成果よりも未来を見越した強化を行って頂き、その選手を本学への進学をお奨め頂く。我々は大切なその選手たちを磨き、丁寧に仕上げていく。それが我々の役目だろうし、そのことをきちんと行っていくことが、今後、素晴らしいアスリートを育て、世界で活躍し、メダルを獲得していくというところに繋がってくると思うんです。私が、本学に入学したのが25年ぐらい前なんですけれど、その頃の体操競技部は、万年大学選手権で4番だったんです。“4番の順天堂”だったんですよ。その頃は頑張っても日体大や日大には勝てなかったんです。でも、その時の体操競技部の先生方のマインドは、「今はそうなんだけれど、いずれは必ず世界で戦う」というマインドはずっとブレずに指導してくださった。この事は、すぐその場では、成果として出ないかもしれないですけど、長い年月をかけて、オリンピック選手輩出に繋がり、さらに高みを目指して金メダリストが出てくる、そういうような指導理念というか、いわゆる「夢」をきちんと持つことがとても大事だと思うんです。そうすると、今後の30年見据えたときに、今メダルを獲得できているというところの現状から、世界で闘うために必要なのかというマインド、現状維持ではなく、より高みを目指すマインドを常に持ち続けていくということが、指導者にも、もちろん選手にも必要であろうし、そ

ういう雰囲気づくりや指導理念を継承していくことがとても重要になるんじゃないかなと思っています。

司会 特にOBの方の協力体制といますか、一貫指導といたらいいんですか、順天堂の一貫指導みたいところで、よいアスリートが育ち金メダル獲っていますよね。そのあたりの関係性や、どうやってうまく築き上げているのか教えて下さい。

原田 もちろん競技として強くなっていくために、こういう方針でがんばったほうが良いというところで共感していただいているところがとても大きいと思います。たぶんその根幹にあるのが自主性というところで、「競技を愛して、自分が強くなりたから強くなる」というシンパシーを感じるところで全てをやっているというところが、たぶん一番大きな“肝”なんじゃないかな、と思います。

司会 一番の大きな“肝”をお話いただきありがとうございます。

原田 陸上競技部はどうでしょうか？

山崎 司会なのにすみません。振っていただいたのでお話をさせていただくと、陸上はもう創部70年ですから、学部と共に歩んできたということになります。そのなかでやはり今日まで選手たちを育てるということは体操に負けず、やっていると思っています。でも今移り変わって、学生も社会状況も変わってきていますから、やはりこちらからの指導の叩き上げというよりは、話し合っ選手と向き合ったりですとか、苦楽を共にするということがなければいけないと思っています。

今年は特に陸上部も学生がめざましい活躍をしてくれました。東京オリンピックでのメダルは獲れませんでした。陸上界ではほんとうに、「すばらしい、すごいね」と、名指しで「三浦くんすごいね」と、「泉谷くんすごいね」と、日本陸上界の代表となる選手が出てきたということは、やはり大切なことだと思っております。

[三浦龍司 2020年東京オリンピック3000m障害出場。日本人初7位入賞。出場時スポーツ健康科学部2年生]
[泉谷駿介 2020年東京オリンピック110m障害準決勝出場。出場時スポーツ健康科学部4年生]

女性アスリートの育成について

司会 それでは鯉川先生、私の代までは男子校でした。順天堂は男子校だったと、今はあまりみなさん知らないみたいですが、その一期生として、特に女性アスリートの環境ですとか、この30年はどうだったかをお聞かせいただけますか。

鯉川 いまの学生さんは「昔は順天堂に女子学生がいな



かった」ということを知らない人がほとんどです。私たち女子の一期生は54人しかなくて、“少数精鋭”といえば聞こえがいいのですが、スポーツ推薦もなく、純粋に「志が同じ人たちが集った」という時代でした。おそらく、女子選手の強化や競技力向上というマインドではなく、まずは「男女共学からスタートしよう」ということだったのではないのでしょうか。

30年前ですから1990年代、日本のスポーツ界もようやく女子に目を向けだした時代と重なりますので、その流れとリンクしているのではないかと思います。

日本の女性アスリートの活躍がみられるようになってからは、順天堂の女子の定員も増えてこのキャンパスの施設も大きく変わったのですが、先生方もご存知のとおり、私が入学した当初は、女子トイレが無いとか、いろいろ大変なことがありました。(一同 笑)

鯉川 施設が男子専用しか作られていなかったのも、啓心寮の鏡が見えない位置にあったり。そういう状況で、当時は野原先生や武井先生などが、私たちを月に一回お昼に誘ってくださって、お弁当を食べながら、「何を改善してほしいですか」と聞いてくださったんです。それがとてもありがたくて、「鏡を低くして下さい」とか「更衣室作って下さい」とかそういう小さなことからまずお願いしました。そこから少しずつ、「試合に出たい」「合宿に行くにはどうしたらいいか」などをお願いできるようになってきました。ですので、1年時と4年時では施設設備も活動内容も居心地も劇的に変わりました。

オリンピックに関しては、卒業後にオリンピックに出場した、私の1つ下のトライアスロンの細谷はるなさんや、4つ下の陸上の花岡麻帆さんのように、競技力の高

い女子学生が自然に集まるようになってきたんですね。彼女たちは学生時代、集団行動とか自由を規制されることがなく、自分の個性を發揮して過ごせる順天堂の環境がよかったのだと思います。

私自身は、あの、鈴木先生は覚えてないと思うんですけども。

私が怪我をしていたとき。鈴木先生がたまたま陸上研究室にいらっやって。たぶん私が寂しそうにしてたんだと思うんですけど、「どうしたの?」って声をかけていただいて。「足が痛い、膝がぜんぜん治らない」って相談したんです。そうしたら治療院を教えてください、その治療院に行ったのがきっかけで足が治ったんです。当時の順大は、誰でも声をかけあえるようなムードがあったというか、小さい大学だからこそ、みんなとの距離が近い時代だったんじゃないかなと思います。

司会 そうですか。貴重なエピソードをありがとうございます。では今はだいぶ変わってきたのではないかなと思います。でもまだまだだだと思うんですね、女性のアスリートの育成や女性のスポーツの推進とかですね。これからもう少し、今後どうやって順天堂が発展していったらいいのではないかななどのご意見ありますか。

鯉川 そうですね、おそらく、もう一歩一歩ではなくなってきたと思います。私たちの時代は一歩一歩だったんですけれども、今は百万歩くらいのスピードで進んで行かなくちゃいけないと感じています。物事が加速するスピードも速いので、そのスピードに乗り遅れないようにしたいですね。スポーツの強化や競技力の向上の方法論って男女に違いはありません。「ヒト・モノ・カネ・情報」があって、その資源たちを「選択」と「集中」で、しっかりと活用する。男女平等に同じ流れのな

かでやっていく、ということが大事だと思います。

司会 「百万歩」進まなきゃいけないですか。私はちょっと短距離系なので、百万歩も歩けないと思ってしまいました。でもそこは「百万歩」でお願いしたいと思います。

運動部に対する支援体制について

司会 次は2つのテーマで話していただきます。順天堂大学のスポーツに対する支援体制、特に運動部に対する支援体制について、お聞きしたいと思います。

中村先生、今、「スポーツ推進支援センター」というのが立ち上がっていますが、学生の支援についてのこれからのことをお聞きする前に、変遷についてお伺いしたいです。

中村 私が本学に赴任したのは1992年で、体育学部の最後の入学生と一緒にでした。先ほど鈴木先生が「学生がとんがっていた」という話がありましたが、私は来たときに、教員のとんがりさにびっくりしました。

当時は水泳実習やスキー実習が必修でしたから、全学生とともに全てのクラブの先生方もほぼ指導参加していました。実習の夜などは先生方がいろいろな話をしていましたが、最後は、クラブの強化をどうするのか、という話になるんです。それも半分ケンカ腰になったりして、すごいパワーだなと感じていました。

そういった先生方のパワーが学生にも伝わっていました。特に当時は学生が今よりも少人数だったので、非常に強く伝わっていた部分もあったのかなと感じます。

そのあと、学生数が徐々に増え、今年の4月からは

600人になったとともに、学生を取りまく社会的な状況も変化しています。昨年まで存在していた「運動部運営委員会」は正確には学部としての公式組織ではなく、運動部指導の先生方の熱意によって生まれた学生部内に位置する組織でした。しかし大学スポーツの変革を目指してUNIVASという組織が生まれてきて、本学もその中心的存在として情報発信する場面も多くありましたし、多人数の学生をどうサポートしていくか、という課題に向き合う必要がありました。クラブに入らない学生も多々いますから、そういった学生も含めて、スポーツ健康科学部としてスポーツ活動をどうサポートするのか、そして競技力強化も進めるのかという非常に多岐にわたる目的をもった学部内の委員会に、今年度より生まれ変わったというような流れになりました。

司会 変革の時期ですが、これからの順天堂としてのスポーツ支援というのは、どんな構想がありますか。

中村 そこが非常に難しいところです。今現在はスポーツ推進支援センターという名称中にある「支援」という言葉を、どのような意味に説明するべきなのか。さらには、学部が増えていくなかで、全ての学部でアスリートの存在あるいはスポーツ活動が積極的に行われる可能性があり、スポーツ推進支援センターは将来的に全学的な組織としての役割を担うことも予想されます。そういった可能性も考慮していくと、今の時点ではまだ明確な方向性は残念ながら示せていないというか、むしろ先生方にいろいろなお知恵をいただきながら、どのように進めていくかということを検討しなければならないと思っています。

司会 鈴木大地先生、いかがでしょう。スポーツ庁元長官のお立場から。いっぱいありますでしょうか。

鈴木 今感じているのは、うちの大学運動部は、ほぼ全員がスポーツ健康科学部の所属ですよね。ですが他の大学では、いろいろな学部の学生が部内にいますよね。チームとして多様性があるとでも言うのでしょうか。そしてそれぞれがチームとしていい相乗効果を発揮しているのではないかと想像しています。本学でも今後は、スポーツ推薦の学生もみんながみんなスポーツ健康科学部でなくともいいのではないかと考えています。スポーツを突き詰めるというのがありますが、異なる分野の勉強をすることで大きく視野を広げてくれるのではないのでしょうか？

今後は、スポーツ健康科学部の施設にない競技スポーツは、他のキャンパスをベースに取り組んでもいいと思いますし、アウトドア系のスポーツ競技はそもそも大学内施設で取り組むことはできませんし、大学として新たなチャレンジをする時期にきているかなとも考えています。

今回の東京オリンピック大会の実施競技は33競技ありました。順天堂大学の運動部でどれぐらい強化できているのか、今後もそれだけの枠にとどまっていけるのか？パラリンピックスポーツも含め、ウィングを広げていく必要があるのではないかと？

また、学部生の全員がエリートアスリートというわけではありません。その他の学生はどういう活動をしていくのか？を考えていく必要があります。もちろん、学生一人一人が自発的に考えていくべきではありますが、こちらでもある程度はガイドしていくことをしてもよいかと考えています。

具体的な話になりますが、本郷・お茶の水キャンパスの隣に元町ウェルネスパークが数年後に完成します。保育園や幼稚園、インターナショナルプレスクールも同パーク内に入ります。そうした未就学児にスポーツ指導するとか、文京区をはじめとした学校の体育授業や部活動をサポートする立場の学生をたくさんつくっていききたいなどは思っていますね。

各学部がある自治体の高齢者や若年層を含めた近隣住民に対して、ご提供できることがたくさんある気がしています。エリートアスリートだけではなく、スポーツを陰で支えたり、応援したり、そういう学生をたくさん世に送り出すということができると思っていますね。(一同頷く)

司会 スポーツ支援も、社会貢献と密接に関連づけて組み立てていったほうがいい、というお考えですね。スポーツ支援というとトップアスリート中心という感じを受けますが、さらに大きく考えていくということですか。

鈴木 はい。トップアスリートだけでなく、スポーツを支える層にも社会貢献してもらおう仕組みを考えていくということですね。これからの日本の課題は、少子高齢化

の時代に入り、医療費が想像以上のコストになっていて、医学の力だけではすべて解決できないのが実情です。スポーツ健康科学部(体育学部)が創設されたときのミッションである「病気になる体をつくる」ことにも注力すべきです。平均寿命と健康寿命との差を極力少なくする。多くの国民に健康を維持してもらうことで、医療費を低減させ、その削減できた分をスポーツ振興に振り分けてもらう。それでこそサステナブルなスポーツ振興が可能となるのです。それを我々が主導的な立場で率先していけると思うんですよ。そういう人材を世に送りだせることは確かです。

司会 ありがとうございます。鈴木先生はまたスポーツ健康医科学推進機構 JASMSの機構長もなさっておられますね。

鈴木 はい。順天堂大学医学部には、「スポーツ医学をやりたいがために順天堂に入りました！」という医学生が多いのです。一方、スポーツ健康科学部の入試面接では、「スポーツ医学を学べるから本学を志望する」という学生たちが多いじゃないですか。という割には意外に医学部とのコラボレーションがなかったのと、先ほど述べた医療とスポーツがもっと密接に関わっていくべきであり、そのあたりを実践していくということですね。

司会 ありがとうございます。余談ですが70周年なので、また、鈴木大地先生の記念講演とかあるんですか。

鈴木 特に聞いておりません。(一同 大笑)

司会 話が戻りまして、中村先生、そのあたりのところはどのようにでしょうか。今、壮大なところまでいきましたけれども、学部のところで考えられる、スポーツ支援、また推進というところでのお話を。

中村 壮大というのではなく、実際にそういった活動までつなげなければいけないと思いますし、なんといっても順天堂の役割としてスポーツの価値をどのように高めていくか、ということです。まずはトップアスリートの育成は絶対にはずせない「柱」だと思います。それとともに、これまで指導者をたくさん輩出してきており指導者育成という「柱」、それと医科学的な研究を軸とした医学との連携という「柱」ですね。実際に推進支援センターのなかでは、ATR [アスレティックトレーニングルーム] 等々と効果的に連携していく良い方法を検討しています。それと今後はもう1つ大きな「柱」として立てていかなければならないのは、本学部にあるマネジメント分野を生かしながら、地域や企業との結びつきを広げていかなければならないですし、経済に関する柱は立てなければいけないと思っています。

それらは、壮大なことだと言われても、本学がやらなければいけない大きな使命ですし、教育や研究にもぜひ繋げていかなければならないというように思っています。



これからの女性アスリートについて

司会 ありがとうございます。鯉川先生、女性スポーツのことでもう少しお聞かせ下さい。今30年で2600人の卒業生が出ています。社会でも活躍されています。女性がスポーツをするのは、あまり推奨されていない時代から現在に至りますが、女性がスポーツをする価値、重みというのは、これからどんなところに見出していったらいいと思われませんか。

鯉川 スポーツの価値や重みは男子も女子も同じです。私たちは2014年に「女性スポーツ研究センター」を順天堂に設立していただきました。まさに中村先生や鈴木先生がおっしゃった医学とスポーツ連携の中で、「女性」というキーワードは特に重要だからです。

私は学長から、女性スポーツセンターの設立が決定したという結果を伺った日に、「女性アスリート外来」を作ってほしいという願いをしました。きっと、外来の目的や病院の採算が合うのか、などを聞かれると思って、資料を準備して行きましたが、それをお見せするまでもなく、すぐに女性アスリート外来を作っていただいた。女性アスリート外来は、日本初の外来です。「これが順天堂だ。」と思いました。やはり予防医学に関しての考え方が肝要だということと、女性や女性アスリートをサポートしていくべきだという考え方があったからだと思うんです。それをきっかけに、私たちの研究が女性アスリートの健康と競技力向上に大きく貢献しています。現在はアスリートだけでなく、すべての女性を対象とし、さきほどの鈴木先生のようにウイングを広げて研究しています。それは、幼児から高齢者、障害者などです。女性というキーワードのなかでかなり広範囲に、そして深くやれてきているなという実感があります。そういうものを順天堂から発信していくこと、そして学生たちにも触れていただくことが、日本にとっても順天堂にとっても女性のスポーツの発展にも繋がると思います。

司会 ありがとうございます。以前は女性スポーツのサポートは女性がやるみたいな感じだったんですけど、最近学生が、女性スポーツのことに興味を持ったとか、ゼミに入りたいとか声を聞きます。

鯉川 はい、多いです。

司会 けっこう多いですね。

鈴木 男子ですね？

司会・鯉川 はい、男子です。

司会 こういう状況を感じて将来とかの展望はありますか。

鯉川 授業に組み込むことが大事です。私の授業、実は

カリキュラム編成でなくなってしまったんですけども、女性スポーツの内容はスポーツ科学科の必修でした。女性の身体のこと、心のこと、取り巻く環境のことを全部、授業で話しています。10年くらいこの講義をしてきましたが、質問に来たり、必死で聞いているのはだいたい男子なんです。特に月経のことは、女子学生よりも男子学生の方が目を輝かせて聞いてくれます。女性スポーツの内容を知ること、女性アスリートはもちろん、教員を目指す学生にも役立ちますので、順天堂の特徴として必修授業に復活してほしいです。

司会 そうですね。今は女性スポーツは順天堂が考えていくことというのが非常に大事であり、一緒に考えていくことが必要だなと思いました。どうでしょう、原田先生、女性の体操もかなり気になっているんですけども、これから女性の体操でも金メダル獲ったりとかの目標も見据えていますか。

原田 そうですね。やっぱり鯉川先生がおっしゃったみたいに、体操競技とかは体重制限がありますから、ほんとうに女性アスリート外来にはたいへんお世話になっておまして、(鯉川先生を見ながら) なんといいですか、健康がそこにあって競技があるという考え方にもう少し近づかなくてはいけないだろうし、そこがあって競技スポーツを向上させていけるという考え方に持ち込めるのは、順天堂じゃないとできないんじゃないかという気がするんですよ。食事制限して体重が軽いほうが動けるという考え方もはやもう捨て去るべきで、より健康でより競技力が高められる、そういう概念が変わってくれば、体操競技も違うあり方になって、よりよいスポーツに変わっていくんじゃないかなという気がします。

社会貢献について

司会 ありがとうございます。ではまた社会貢献的なところに戻りたいと思いますが、今度は、本学ではパラリンピックに出場するような選手、そして支援などが始まりました。鈴木先生、ここ何年かパラリンピックやアダプトスポーツとか、大学のプログラムにもありますが、今後、スポーツ健康科学部としてはどんな役割がありそうですか。

鈴木 ぼくらの時代、障害者スポーツに取り組んだ記憶にないですけど、私が教員になってから、障害を持つ学生が入学してきました。今はもう受け入れるだけでなく競技、その強化というところまできている。この30年でだいぶ変わりました。

当たり前ですが、基礎疾患も含めていろいろな問題を抱えていると思うので、この大学であれば、医療関係者

も多いですから、なにかあったときも安心安全です。順天堂が障害者スポーツを強化、普及させていくというのは、自然な流れだというふうに思います。寮もありますし、周りのサポートも受けやすい。障害者スポーツの環境が整った有力大学のひとつになりえるだろうと思います。

司会 はい。では、中村先生、「スポーツ推進支援センター」から、今、学生も障害者スポーツ等にも、支援が始まっていますけれども、展望はいかがでしょう。

中村 そうですね、一部の先生方にご協力をいただいて、スポーツ庁からの支援も受けながら、地域の中でパラリンピックのスポーツを知っていただくイベントとかを行っていますし、そこには学生の有志も強力なサポートをしてくれています。今後はさらに推進支援センターがうまくコーディネートする役割を果たせていければ、さらに大きな広がりを見せられるというようには感じています。

司会 そうしますと、社会との繋がりというのもの、結構できそうですか。

中村 そうですね、残念ながらこのコロナ禍の影響でなかなか進まない部分もあるのですが、いくつかのものは企画、展開されていて、できる範囲のなかで遂行はされています。もっと多くの人々に伝えること、いわゆるコマース化するという周知が大事だと思います。先生方へもそうですし、学生に対しても、あるいは地域の人たちに、参加してもらおうというようなことはとても必要なことだと思います。

鈴木 これは特別支援学校の教員のみなさんも卒業生が多いですから、そのあたりの連携もできますね。(中村先生に視線を向けて)、オリパラ代表選手の増員計画も必要

ですし実現に向けていきたいですね。

中村 実際にそういった選手が順天堂から出ていますから、そういった選手にも手伝ってもらってですね。

司会 そうですね、指導者も日本代表監督も出てますね。

鈴木 そうです、そうです。若きアスリートと指導者を兼ね備える、そういう時にきています。

2020東京オリンピックを振り返って

司会 話題を変えさせていただきます。原田先生、2020東京オリンピック、大活躍でしたね。そのあたりの裏話をうかがえますか。かなりジャンプしちゃいますけれども。

原田 裏話、ですか。いろんなことがありましたからなにお話ししましょうか。橋本大輝〔東京オリンピック出場時スポーツ健康科学部2年生〕が個人総合金メダルを獲ったときですけれども、つり輪で難度が不認定になって、跳馬ではラインアウトがあって、一気に順位が4番まで下がってしまって、最後の種目までに0.4の間に4人の選手がひしめきあっているという状況だったんですね。最終演技の鉄棒ですが、演技の前に、一回、ウォーミングアップができるんですね。そこで選手がウォーミングアップするわけです。その時、2019年の世界チャンピオンのロシアの選手と、2018年の世界チャンピオンの中国の選手と二人、橋本のところに寄ってきて、「このままいったらハシモト、金メダル獲れるよ、がんばれ」と一言言ってくれているんですよ。(一同驚く)

原田 それを見たときに、あー、スポーツってほんとうにいいなあ、とすごく率直に思って、私なんかは自分が



勝つには人のことを気にしている余裕なんかはとてもしゃないけどないんですけど、みんながベストを尽くして、そのなかでだれが1番になったかという感覚で彼らは戦っているんだというところを見たときに、これがある意味ほんとうのスポーツマンシップなんだろうなという気がしたんです。高潔にという外面じゃなくて、ほんとうに本心からこれがベストでだれが1番かを決めようぜっていう、あのなんというか雰囲気、とつてもよかったです。すぐあの瞬間、スポーツに対する考え方をもう一度あらためて勉強させていただいたかなと思ったんです。そんな裏話でいいですか。

司会 (大きく頷きながら) 鈴木先生、ずいぶん視察もされていた様ですね。陸上も応援に来ていただき、ありがとうございました。印象に残ったこととかはありますか。
鈴木 原田先生が今、話したことが私自身にもあって、選手時代、レース前に小部屋に集められて点呼みたいなのを受けて、それでプールに行くのですが、1コースのカナダの選手がみなと握手をしながら「グッドラック」「グッドラック」って言うんです。わたしはそれに感動したんですね。これから雌雄を決すという直前に、お互いがんばろう！と。

五輪には『ファイナリスト』って言葉があります。要するにどれだけ自分が努力してここまで来たかをお互いに分かっていますから、お前もそうだろう、といわゆる同志みたいな、戦友みたいになります。それが感動で…。やっぱりオリンピックはいいなあという気持ちでプールに出ていきました。もちろん金メダルを獲りたいという気持ちもあるので、そのバランスがとつてもよかったです。おかげで自分の緊張度が半分くらいになり、

いいパフォーマンスを発揮することができました。ですから、原田先生のされた話はよく理解できます。これが真の五輪平和の精神、友情なんだと。

鯉川 そこまで究極に競技を突き詰めてきたアスリートだからこそ、自然に出た行動だったんでしょうね。

スポーツ健康科学部のこれらに向けて

司会 とつてもいいお話でした。ありがとうございました。

最後に一言ずつ伺います。学部に向けての将来のこと、期待することを一言ずつお願いしたいと思います。これからの学生たちに対してはみな思いがあると思いますので、決意表明も含めて、学生にどう生きてほしいかを聞かせて下さい。中村先生からお願いいたします。

中村 体育学部からスポーツ健康科学部へと、そして学生の人数も変わり、そして3学科から1学科の学部へと変化しました。ただ、名称や状況は変わってきていますが、芯にあるもの、あるいは土台にあるもの、これについては変わっていないと思います。もちろん変化することは大切ですが、根底にあるマインドを常に土台に持ちながら、進んでいかねばならないとは思っています。

司会 ありがとうございます。では鯉川先生、お願いいたします。

鯉川 中村先生がおっしゃったように、この大学に集まってくる人たちは、体を動かすことが好きで、健康とかスポーツ医学にとつても興味を持っていて、コミュニケーション能力が高い人たちです。この根幹は変わらないので、そういった人たちが、今度は一緒に、学生だとか先

生だとか関係なく私たちと一緒に、次のステップを創っていく、日本のスポーツを創っていく。一緒にステップアップできるようなムードを、これからも創り続けていければいいと思います。

司会 ありがとうございます。では鈴木先生、お願いします。

鈴木 5年間国の仕事をして、行く先々で順大の卒業生に“遭遇”しました。最後の最後に、「実はわたしも順天堂なんです」って。うちの関係者は、控え目ですが皆さんがいいですね。これは校風であり教育であり、長い年月をかけた順大の伝統なんですね。4年間で染みついていくのだと思います。これからもそういう人間を輩出していく大学であつてほしいです。

ただ時代が目まぐるしく変わるので、その社会の変化の分だけは変わっていかなくちゃいけない。いい伝統は残しながら、変えるべきところは変える。医学を身近で感じられる環境にあり、他学部ともいろいろまじりあいながら、世の中の変化を感知し、どこに向かって行くべきかを考え実践していければ、これからも発展していけると思います。

司会 学生たちはなかなか学部間の交流がないんでしょうか。

鈴木 ええ。学生たちの交流は少ないですね。だからもったいないなと思います。学生の人柄はすばらしいです。今日、キャンパスを歩いてきたんですけども、みんなきちんとあいさつしてくれるんですね。こういうさくらキャンパスのいいところを伝えたいと思います。

鯉川 ほんとうにしっかりとあいさつしますよね、うちの学生たちは。

鈴木 ええ。さくらに来てみるとよく分かります。

鯉川 いつもいろいろな方から言われます、きちんとしたあいさつのことは。

司会 さくらキャンパスから離れて、また帰ってきてみてどうでしょう、なにかちょっと変わったことはありましたか。

鈴木 学生の気質、気持ちのいい人たちが溢れたキャンパスは変わってないですね。いいところは変わってない。木がだいぶ大きくなったことと、私が存じ上げない教員が増えましたね。(一同 笑)

司会 それでは最後に、原田先生。

原田 えっ、そんなハードルですか！(笑)

私は競技の強化で鈴木先生の言葉を借りると、とんがってきたので、今後も競技の強化を進めていく、というところに今大学のスポーツ、大事なプレゼンスがそこにあると思いますし、たぶん女性競技を強化していくことが、これからのとても大切なキーワードなのじゃないかという気がしています。強化をしていくに足る、それ

をサポートしていく人材を、やっぱりここで、我々が養成していかなければいけないということを強く感じています。それはトップアスリートと共に生活しながら、共に学ぶからこそ見えてくる部分もたくさんあるだろうと思います。学生たちが世の中に出ていき、さきほど鈴木先生がおっしゃったように、多面的に活躍している学生が順天堂にたくさんいるということ、その全体的な部分というものを、実はその人たちの活躍は順天堂の未来を支えていると思いますから、そういった人材をこれからも維持していきたいと思っています。

司会 本物志向でやっていただくというのも順天堂だと思いますのでよろしくお願いします。

原田 はい、そうですね。

鯉川 (司会の) 山崎先生からも一言いただきたいですね。
山崎 ぜんぶ原田先生が代弁してくれましたから大丈夫です。

原田 それはずるいですね(笑)

中村 それでは山崎先生どうぞ。

山崎 私も鈴木先生と同じで、順天堂を離れた時期がありましたが、温かいんですね。地域のOBの方たちとかいろいろな人たちが温かくて、違う所属でも温かい。控えめに、でも大きな力で順天堂の人たちが支えてくれるんです。ですから、私たちが変わらずそういう人たちを育てたいなと、温かみのある学生だったりとか、ここにいる純粋な感じの、学生を育てたいと思っています。ただ人数も増えたので多様性という言葉で1つに括られてしまうのは少しこわいのではないかなとも思っていて、やはりみんながそれぞれのスペシャリストでどんどん活躍していく様な人材を育てないと、順天堂のよさが出てこないのではないかなと思っています。私自身も、スペシャリストでがんばっていきたくと思っています。

司会 それではスポーツ健康科学部70周年・スポーツ健康科学研究科50周年を記念しての座談会を終了いたします。本日はありがとうございました。





左から青木和浩、廣瀬伸良、内藤久士、吉村雅文、北村 薫、和氣秀文の各氏

『さくらキャンパスの歩み』刊行記念座談会

2

スポーツ健康科学部・ スポーツ健康科学研究科の さらなる発展に向けて

◎日時：2021年12月14日（火）

◎場所：順天堂大学 3号館8階カンファレンスルーム

吉村雅文

スポーツ健康科学研究科長
スポーツ健康科学部長

内藤久士

前スポーツ健康科学研究科長
前スポーツ健康科学部長

廣瀬伸良

さくらキャンパス学生部長

和氣秀文

スポーツ健康科学研究科副研究科長

北村 薫

元スポーツ健康科学研究科長

◎司会

青木和浩

スポーツ健康科学部学部長補佐

司会（青木） ただいまから、スポーツ健康科学部70周年、スポーツ健康科学研究科50周年を記念しまして座談会を開催いたします。

本日の司会を務めます青木です。よろしくお願いいたします。

1学科への移行について

司会 まず初めに、1学科になったことについて吉村先生、内藤先生にお伺いしたいと思います。

どういふねらいがあって1学科となったのでしょうか。同時に定員増になりました。1学科構想はかなり前からあったと思います。実際に1学科にしてよかったこと、さらにステップアップしていくために必要なことなど、多岐にわたる内容ですが、最初に吉村先生からご発言をお願いいたします。

吉村 はい。北村先生に本日お越しいただいていますけれども、確か平成22年に、10年後のスポーツ健康科学部の更なる発展を目指して、学内教職員の有志の参加による「NEXT10将来構想を考える会」が発足しました。その際、過去の経緯で分からないことがあれば全て北村

先生に聞けばわかるよと言われたのを思い出しました。北村先生は、その前から将来構想に関して色々検討されていたと伺いました。今、そんな記憶が蘇ってきました。当時、私も内藤先生も「NEXT10将来構想を考える会」のメンバーでした。スポーツ健康科学部は、スポーツマネジメント学科、健康学科、スポーツ科学科という3学科で運営されており、体育学部からスポーツ健康科学部に改組（1993年）してから、約10年ほど経ったタイミングでした。そして、今後さらに学部が発展していくためには、社会的な情勢や、またスポーツの捉え方がどんどん変化していくなかで、次はどうすべきかという議論を重ねていました。さまざまな議論・調査の中から出てきた1つのアイデアが、1学科制でした。そこから、さまざまな社会的な状況、文部科学省の意向、他の体育系・スポーツ系大学の状況、少子化のことも考えながら、また本学部求められるニーズや人材、スポーツの新たな価値の創出など、幅広く考えながら、1学科制が適切ではないかと。最もこのスポーツ健康科学部が発展していくためには重要ではなからうかというところで動き出したというのが、1学科制に移行する流れと決断の部分だったと記憶しています。

内藤先生どうですか。

内藤 そうですね、2010年の「将来構想を考える（NEXT 10）」は、野川先生が学部長で、そのときいちばん年長だったのが私と吉村先生だったのです。そこから当時55歳以下の若い人たちと10年後を見据えてということで、いろいろな調査や他の大学の様子を勉強しました。我々はなにを目指すのか、というところのなかで、大きな柱として、やはり学科制というところのメリット、デメリット、というところが大きな焦点になります。1学科にするのか、あるいは当時3学科ではありましたが、スポ科には2つコースがあったので、それをベースに4学科にするのか、検討することはたくさんありました。また、「NEXT10」というチームを作る数年前には、新たに全く新しい学科を作るといような動きもあったのですが、「NEXT10」の議論では、やはり柱をなにするのかということで、いちばん落ちついたのが1学科制という考え方だったと。そう考えた理由の中でもっとも大きいのは、縦割りということが持つ弊害です。実際には、そんなに強烈はありませんでしたが、3学科という縦割りのなかで、人事構成や学生の横への動きが制約されていたのは事実です。まずはこの境界を取っ払う。その流れで当時はその第一弾として、学科間での流動性を高められるように、縦割りを崩していこうという動きが活潑になりました。そういう意味で1学科制を真剣に考える機会が10年前にありまして、今回突然に1学科にしたわけではなく、これまでの日本の大学の仕組みや、本学部の歴史の流れのなかでの、起きたことではないかと。

吉村 体育系・スポーツ系大学にはあまりなかったのですが、工学系の大学などでは、学科を撤廃して、ひと括りにしているというのがけっこう主流になっていたということもあり、我々も検討していく追い風になっていたというのもありました。

司会 1学科制になって一年経過していない段階ではありますが、実際に1学科制となって、あらためてよかったという部分は、ございますか。

吉村 それよりまず、我々が最終的に1学科制を決めて、申請をしてというところで、北村先生はどうお感じになっておられましたか。

北村 いきなりきましたね。(笑)

吉村 北村先生は、カリキュラムを含めてスポーツ健康科学部の将来構想をお考えになられてきた中心人物だったので、私たちが、最終的にこれで申請する、となったときに、どのようにお考えになっていたのかということについてお聞きしたいと思っていました。この場で聞くことじゃないかもしれませんが。

北村 大丈夫ですよ。私個人としては、別になんとも思わなかった。(吉村先生と笑い合う)というのは、3学科制

にした当時から、私は、いきなり3学科に振り分けるのではなくて、東大みたいに、ある程度はじめはみんな一緒に学んで、そこからそれぞれに分かれていく、というスタイルは、考えていたんです。ただそれが文部科学省、当時は文部省のなかで、そこまではまだ時期尚早という感じでしたので、それよりも学科、スポーツマネジメント学科というのを創るほうを優先させたのです。結果として3学科制にしたという関係がありましたので、1学科制そのものは、前から私は頭の中にもありましたから、そんなに違和感は感じなかったですね。

吉村 それならうれしいです。

内藤 もともと体育学部の時代も学科としては2つあったけれども、どちらも体育学士でしたし、ゼミの選択なども専攻学科としてはあまりきちっと分かれた学科制ではなかった。だから今回それに戻ったという感じがしないでもない。

あとは現在、入試シーズン真っ只中ですが、「NEXT10」の資料も確認してみても、1学科制に踏み切ろうとした場合のメリットとデメリットです。3学科制におけるそれらを入試について考えると、当時はAO入試、推薦入試、それからセンターを併用した入試の一般入試を行っていましたが、学科が3学科ですとそれぞれに定員があって、もちろん併願できます。そのため見かけ上の受験者がそれなりに増えることはメリットですが、合格候補者の選抜は実に複雑な仕組みでして。これを1学科制にすることで、成績順に並べてスパッと一度に決められるということのメリットを強く感じています。たぶん1学科制にしていなかったら、入試改革による選抜方法の多様化や600人定員ではどんなに大変になっていたかと思います。学科ごとに求める人物像など、いわゆるアドミッションポリシーにそれぞれ特色がありましたが、結局併願をしてくるので、3学科併願した志願者の中からそれにあった志願者を探ってくという難しさなどの現実問題があります。そのあたりは、まだ1年経っていないなかで強く感じることはあります。

北村 要は入試で受験者すべてが一緒になるわけですね。トータルとして。

内藤 トータルとしてはそうです。

北村 倍率は別として、受験者が増えるというのはいいことなんですよ。学科をいわばなにかの形で変えるというのはチャレンジでもあります。いじって教育のシステムがよくなるということももちろんあるのだけれども、いくら教育のシステムがよくなったとしても、受験生が来なかったら、順天堂に入りたいという人がいなければ、大学としての魅力がなければ、意味がないんです。

吉村 おっしゃるとおりです。

北村 受験生がどれだけ増えたかということを考えてと

きに、増えたのならそれはそれでいいことなんだと、私は思います。

スポーツマネジメント学科の設立について

廣瀬 本日、北村先生に来ていただいているので、ぜひ、お伺いしたいことがあります。さきほどマネジメント学科の話が出ましたが、体育学部時代にあった体育学科と健康学科に加えて、スポーツ健康科学部スポーツマネジメント学科を創られた、それはどういう感覚だったのか、ずっとお聞きしたかったのです。

北村 さきほどまとめて話すべきだったことかもしれません。体育学部で教員養成というだけでは、受験生確保には魅力がない。十分な受験生を確保するという面では行き詰まっていたのです。それで、そこのところをなんとかしなくてはならないというのは1つありました。もう1つ、いちばん大きかったのは、その当時、「するスポーツ」だけでなく「観るスポーツ」や、一部分ではありましたがスポーツボランティアですとか、今でいう「支えるスポーツ」ですけれども、そういう話が重要視されたことがあります。スポーツというのが、昔は「体育」の教材としてのスポーツという概念だったのだけれども、そこに収まらない事例や研究が、体育学会でも発表されるようになってきていたのです。そうすると、体育、学校教育のなかの体育科の教材としてのスポーツというのではそれに収まらないっていう状況になってくるというのは分かっていたから、その収まらないところをどうやってキャッチアップしていくかという、そのところがやはりいちばん大きかったところでした。

廣瀬 そういう経緯で、国内の大学に初めてのスポーツマネジメント学科が誕生したのですね。

北村 そうかもしれません。ただ、マネジメントだけにこだわってはいなかったんです。

廣瀬 どういうことでしょうか？

北村 今だから言いますと、私はスポーツシステム学科とか、スポーツデザイン学科とか、いろいろなことを提案してきました。スポーツデザインっていうのはいいなと思っていました。単に競技力を向上させるというのだけではなくて、それにまつわるさまざまな様相を全部組み合わせ、全体としてのスポーツ振興を考えていくという意味では「デザイン」という概念がいいんじゃないかと思ったのです。ですが、文部省ではまったく理解してもらえないという話でした。

それでその当時でも理解してもらえる言葉としてはなにかといいますと、「マネジメント」だったんです。マ

ネジメントでしたら文部省にも理解してもらえました。今と違ってそれまでは、文部省の担当者が書類申請全て見て、それを審査の先生方に文部省のその職員が説明をしなければならなかったのです。我々が説明するのではなくて。文部省の職員が分かる言葉でないと説明できないということになります。ですからいろいろな折衝していくなかで、マネジメントだったら理解してもらえた。そういうことで、スポーツマネジメント学科になったということなのです。

だから私が最初イメージしていたもののなかの、“マネジメント”の部分だけしか使ってもらえなかったという事情です。

廣瀬 なるほど。当時から私はかなり頭が固い教員で、当時は、かなりのインパクトがあったんです。「順天堂にこんな学科ができて良いの？」と(笑)。

司会 今ではスポーツと名がつく学部は多くなりましたが、歴史ある順天堂の体育学部が体育系大学の先駆けとしてスポーツ健康科学部という名称を選びました。健康科学部という案もあったと伺っています。

北村 はい、ありました。

司会 「健康」か「体育」か「スポーツ」にするのかというところで、様々な情報を得る努力をされたなかで、教員同士で議論をずっと重ねていたという話がありますが。

廣瀬 はい、それはもう大変でした。私は当時、ネーミング委員会に入っておりましたので。

北村 アメリカでは健康科学部のなかに医学部があったり、ケアの学部があったりしていました。健康科学部が大きいのです。医学部は健康科学部の一部分なので、こちらで健康科学部という名称、学部名を使ってしまうと医学部との摩擦もあり得るか。そういう発想もありました。

定員増・入試改革について

司会 少し話を戻させていただきます。現在、1学科と同時並行で定員増がありますが、さらに入試改革も同時期にきています。なにが正解なのかが、正直分からない部分もあるかもしれません。そして、子どもも少なくなり、体育系大学も多く存在しています。順天堂としてはどういった方向性に向かうのかという点は大変気になる場所です。正直な今の感想というのはいかがですか。吉村 正直なところ、今、スポーツ健康科学部の発展に関して、これだという明確な、確実な方向性を示すことは難しいと思っています。しかしながら、体育系・スポーツ系大学として70年の歴史の中で発展してきた部分

を今一度振り返り、また、スポーツ健康科学部ではこんな学生を育成し世の中に輩出して行こうとしていることを継続して強く発信していくことは大変重要だと思っています。要するに今、さらなる発展を考えなければならぬときがきているわけですから、1学科制と定員増は、大きく飛躍できるチャンスと考えなければならぬと思います。たしかに1学科制と定員増というのはとてつもない大きな変化で戸惑うことも多いと思いますが、さきほどもお話がありましたように、1993年に3学科制にして約30年、表現は不適切かもしれませんが、大きな改革はなかったと考えると、今後の発展のためには、ほんとうにいい機会であり、絶好のチャンスだったと思います。

司会 ポジティブにとらえることが大切ですね。ネガティブにとらえていても、発展しないと思います。

吉村 ネガティブに捉えている人は減ってきていると思います。今回の改革に対して、そんな絶対ムリだろうという話がけっこう多かったんですけども、現実的に認可され、さあ、学生募集を始めるぞというところには、ネガティブな感じが減ってきた印象があります。先生方もこの改革に関して受け止めていただき、次のことを考え出していただけたと感じています。

司会 内藤先生、いかがでしょうか。

内藤 そうですね。それ程昔の話ではありませんが、まず410人になるすぐ前には、330人からプラス80人とも言っていたんです。330から410でもちょっと多いかなと学科間の人数バランスに悩まして。ですが、意外にも入学してから学生が、比較的人気があった学科に入ったのだけれども、入ってから他のことを学びたいとか、他の学科にいたけど別のことを学びたいという学生が多く出てきました。実際ゼミなどで移動はけっこうあるような形です。そういう意味では、さらに3学科のままに、もしもあと200名あるいは190名増やすにしても、どこで学科で定員を増やすのか、スポーツ科学科の倍率が比

較的高いからそこを増やすのか、でもそこだけ大きくなるのはどうなのか、スポ科の2コースをベースに4学科にするのか、それとも新たな学科を増やすのか、とか。そういう面では1学科になったことで、600名というメリットが生きてきて、まだ初年度の試験しかしてないですけれども、学生たちも、これからどのコースへいこうかということでも勉強してくれるのかなというところがあります。あとは現実、大きな課題としては、定員が増えたとこれまでの教室だけですと、小さな教室しかありませんので、授業数をものすごく増やして、また資格の関係から小人数でやっていた授業が多かったのも、それらをカリキュラムから全部変えることができたのです。600名の定員に対して、教員の負担は増えています。中でも授業という面では、特に実技の先生はかなり負担が増えているのですけれども、比較的、バランスを取りやすいのではと思っています。今後3年次、4年次になってきたときに、学生は600人に増えたいけれども、実際の授業のところでは先生方の授業負担がうまく解消されてくる努力もしています。先生方には正直研究にも打ち込んでほしいですし、そのような思いもあるのですけれど。600人、それと1学科制、増員、入試改革、それからプラスしてコロナ〔新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)。2019年12月に中国で感染者が報告され数か月でパンデミック (世界的流行) となった。〕の問題もありますが、これらのすべてのバランスのうえで物事を見ていく必要があると思います。「NEXT10」のときには10年後を見据えて議論しましたが、1つの方向性をおおよそ決めたその年度の終わりに東日本大震災を経験しました。

です。10年後新たな学部をスタートするとなったときに、もしも世の中で元気が失われるようなことが起きたとしても、スポーツの力で元気を取り戻すことができる、我々はスポーツ健康科学に対する自負みみたいな雰囲気がありました。時代の影響ってすごく受けてくるんだと思うのだけれど、今回は我々はそういう意味では



コロナの影響っていうのがすごかった。初年度の学生募集をするときにコロナが起きました。それでかなりのマイナスだったのですけれども、でもそれによって大学の授業がオンラインになって、今では当たり前になるほど普及しました。こういうのを経験してよりうまく進めるのかなと思います。

司会 まだ和氣先生、なにも発言されていませんね。

和氣 はい。大学院についてのお話を準備していました。(笑) (一同 笑)

和氣 わたくしは順天堂から離れていた期間が非常に長かったので、遠くから本学の変化を眺めてきました。私が大学4年生のときに習志野キャンパスからさくらキャンパスに移転しまして、そのときはもちろん全てが新築でした。今は私が学ぶ立場から教える立場になってここにおり、そして、この3号館が建ちました。とても感慨深いものがあります。

内藤 習志野キャンパスの研究室は木造平屋建てのようなどころから、さくらキャンパスに来たとき、エレベーターが校舎にあって、それがさらに今、今日の会場の3号館のように、こんなに高い。

和氣 当時は校舎にエレベーターがあるだけでも感動しました。そのときは、エレベーターは学生使用禁止だったような(笑)。酒々井駅からどう通学するのかという小さな問題はありましたけれども、キャンパスのなかはとても近代的で同級生は皆喜んでいました。ただ今となるとどうしても習志野キャンパスもなつかしく思い出されます。思い出もたくさんありますし。わたくしが卒業するときには、まだスポーツ健康科学部になるとか共学になるとかといった情報はなかったと思います。1993年には女子はいましたか？

北村 女子はいました。2年前からです。

司会 (青木) 私が4年生のときに1年生に女子学生が入学しました。

和氣 私たちにとって、共学はうらやましかったです。学部の名前も変わりましたし、女子も入ってきて共学となり、そういうことも含めて私たちの時に比べて大きく変わりました。私たちが卒業して数年後がまさに変革のときでしたね。

司会 定員増も含めて今の順天堂を北村先生、どのように見ておられますか。

体育学部の経済的な自立とは

北村 いちばん気になっているのは「しゅうし」がどうなっているか、「しゅうし」ってマスター「修士」ではなくて、あのお金「収支」ね。(一同 ああーと頷く)

北村 私たちが学部を改組したとき、そのところも1つの要素でした。体育学部の時代は医学部の、もっと言うと病院の収入でもって、体育学部がなんとか維持されていたという側面があったのです。それから、体育学部の受験者数を増やして少しでも自立したい、できるだけ自立に近づいていこうという狙いも実はあったのです。その意図の結果として、定員増というのは教員の方からすれば負担が大きくなってたいへんだらうけれども、経済的な自立という面では、他の学部や病院収入に頼らなくても学部存在の意味が生まれ、学部を動かしていけるということになります。その面でもいいことだと思っています。法人全体として順天堂の収益は病院収入に頼るところがありますけれども、医療制度の改革がいつどうおきるかわかりません。病院収入を頼りに我々は伸び伸びとやっていいのか、ということです。それは非現実的でした。全ての他学部の変革とモチベーションにもかかわることです。だから各学部ごとに自立することで600人にすることは理解できます。また学部はこの3号館を建ててもらったことと、それからプール、アリーナもあります。これらの投資を学部収入だけで取り返すことは、まだまだ先だと思うのですが、それでも先を見据えることが大切だと思っています。

吉村 もちろんある期間はかかりますが、さらに発展していくための先行投資だと思っています。

北村 「財」の独立は「学」の独立のためにも必要だということではたしかなのです。そういう意味では大変いいことなのではないかと理解しています。

内藤 実際に過去に授業料を下げたころに定員増が行われているので、授業料の収益を数で補えるような意図がないわけではない、ということもあります。

廣瀬 本年度からの定員増については、現在はまだ1年生だけですけれども、学部としての枠組みを徐々に創っていければ、そして、我々がしっかりと学修体制に流し込んでいければ、うまくいくのではないかな、と考えています。ただ、今、学生部長の立場で言わせていただきますと、600人という数が4学年揃ったときに2400人になるわけです。そのとき、キャンパス内外の学生生活がいったいどうなるのか？ものすごく期待と不安、両方を感じています。実は、学修面に関してはそんなに心配してはいないのですが、生活面を中心にそれに対して、大学側がどう整備し、多様な学生たちに寄り添っていくのか、ものすごく大きな課題だと感じているところです。それをうまく舵取りできれば素晴らしい大学に発展していくような気がします。これからどう検討していくのが、学生部の大きな課題です。

和氣 私のときは140人でした、たしか。4学年全てで560人。それが1学年でそれ以上ということですね。

廣瀬 そうですね。コロナが収束すれば、医学部も含めて啓心寮に約800名の学生が一同に集うということになるわけです。1学年だけですよ。

和氣 学生の顔も名前も一定数しか覚えられないですし、学生がどこに住んでいるのかも分からないような人数です。

廣瀬 そういうことですね。数というのは、なかなかたいへんです。それだけの個性が揃うということですから。

Rebornへの取り組み

司会 一点まだ聞きそびれていることがあります。今、Rebornということで教員のF Dも含めて、この1学科制にともなう新カリキュラム他、様々なことについて教員間で議論しています。実際に主導でやられている吉村先生の目から見まして、Rebornのねらいはどういったところがあるのですか。

吉村 大前提は学部がさらに発展していくところです。先生方にはことあるごとに発信をさせていただいてますけれど、1学年600人ひとりひとりの学生をきちんと成長に導くという目標を設定することが、先生方の能力を引き上げ、学生のやりがいや生きがいも含めて、結果的に学部全体の成長に繋がっていく、ということです。そして、そのような状況の中で成長した学生が社会に出ていくことによって、順天堂の素晴らしさ、また教育の質の高さというようなものを多くの方々に理解してもらえるのだと思っています。600人という大きな単位ですけれども、今までやってきた我々教員の学生に対する姿勢だとか教育方針、理念といったものを、もう一度、足元をきちっと見ながら、学生と向き合っていくという姿勢が、今後大きな発展に繋がっていくと考えています。ですので、先生方はこれまで以上に授業を工夫していただかなくてはならないし、学生の成長をしっかりと促していただけるようにならなければいけない。そして学生は単位を取るだけではなくて、「勉強ってほんとうにおもしろいんだ、役に立つんだ」ということを追求してくれるように導かなきゃいけないと思っています。なんとか「単位を取らせる」というところから、学生が自主的に学び、学生同士が教育し合い、評価できるような、新たな学びを創っていくということが、今後我々の大きな目標になるのではないかなと思っています。そしてそのような新たな学びは、必ずや先生方の成長と学生たちの成長につながり、社会からの認知、期待に応えることができるようになると思っています。600名の定員増1年目、大事な時なので先生方にはRebornにご協力をいただきたいと願っています。

司会 内藤先生、補足ありますか。

内藤 さきほどの定員増とあわせると、ややもするとなにか膨張するような感じがあります。そうではなくて中身がもっともっと濃くならなくてはいけない。そのために「生まれ変わる」という、そういうことだと思っていますけれど。

司会 ありがとうございます。今回の対談は、学部と研究科の発展となっております。あらためて吉村先生から学部のビジョンについてご発言いただけますか。

学部と研究科の発展について

吉村 さきほど述べたこととかぶりますが、入学してきたひとりひとりの学生の4年間の成長を促し、社会に送り出すということを我々がしっかりとサポートできるというのが絶対条件です。スポーツ健康科学部がさらに発展していくために、学生ひとりひとりに目を向けて、寄り添い、教育していくことを徹底しないかぎり、順天堂のよさを伝え残していくことはできないと思っています。交通網が発展し東京からは近くはなりましたけれども、都内にある大学と肩を並べて競争していくことを踏まえますと、どうしても求めていかなければならない部分だと考えています。順天堂に進学すれば、必ず社会で活躍できるというものをこの4年間で学ぶことができ、力をつけることができ、育むことができる。という部分を確固たる信念を持って発信できるようになることが重要なのではないかと考えています。

司会 次は研究科のビジョンということで今副研究科長のお立場で和氣先生いらっしゃいますが、研究科のビジョンはいかがでしょう。

和氣 私の個人的なビジョンになってしまいますが、今学部の方は学生数が増えています。当然そのなかには卒業後も、学びを深めたいという学生が増えてくると思いますので、やはり4年後には研究科の方も定員増を行う必要があるのではないかと考えております。

歴史を振り返ってみますと、93年にスポーツ健康科学部になって、そしてその4年後に大学院もスポーツ健康科学研究科に変わっています。そのことからしても4年後にはなんらかのアクションをおこす必要があると思っています。

定員を増やすということはその中身も変えていく必要がありますが、たとえば修士であるならば、修士は通常2年制なんですけど、1年制というコースも取り入れる必要があるのではないかと考えています。私立におけるスポーツ・体育系の大学院は順天堂が最初ですが、1年制コースを備えているスポーツ系の大学院は他にありまして、

そういった意味では遅れをとってしまっている印象をうけております。うちには社会人の大学院生もおります。そういった実務系のキャリアを持っている大学院生はうまく体制を整えれば、1年間で修了できるようなシステムを作れるんじゃないかと思っています。

修士論文の質をどうするかという問題はあると思いますが、工夫すれば質を担保する指導体制は十分につくれるのではないかと思っています。また、実際に科目履修生という形で1年間で教職を取りたくて大学院に進学してくる学生もいるようです。加えて、もし専修免許も1年で取れるのであれば、そういったことを目的とした大学院コースも作れると思います。

あとは競技ですね。アスリートとしてもっとやっていきたい、さらに学びも深めたい、という学生に対しても、1年で終えられるような新しいコースを準備してあげてもいいと思います。

一方で逆に長い期間、研究をしてもらい、特に研究者になりたい、大学の教員になりたい、そういう強い希望を持っている人は修士、博士の一貫教育で5年制の大学院をつくと、より研究プランも練りやすくなりますし、さらに質の高い研究も実施できます。わたくしが思うのはもしもそういうことができるのであれば、1年間は海外に行く、それは順天堂大学と協定を結んでいる大学でもいいですし、あるいは個人的に迎えてくれる大学でもいいと思いますので、1年間は海外に行って研究をやらしてもらい。そういう仕組みがあってもいいのではないかと考えています。

まだ国際化に関することなどいくつかあるんですけども、内藤先生にバトンタッチします。定員が増えることは先生方がおっしゃるとおりチャンスなので、様々な可能性を考えていきたいと思っています。

研究科の振り返りと今後の課題

司会 内藤先生は以前学部長も研究科長もご経験がおありで、特に内藤先生が研究科長時代、後期課程が本格的になりました。今では後期課程に進むのは大学の教員が当たり前という時代になりました。当時の振り返りと今後のビジョンについてお話しただけたらと思います。内藤 大学院に求められるのは時代によって変わってきます。昔の学部では卒論書いて猛烈にがんばったというのが、今は一般的には、卒論は必ずしも必要ではなく、昔の卒論が今の大学の修士ぐらいのイメージかもしれません。昔は修士に入るのも難しかったし、修士論文というのはとてもハードルが高かった。今は研究者として道を進むのであれば修士を持っていないと、という時代に

なりました。昔は、体育学の分野では修士を取得すれば、大学の先生になれたという時代でした。ニーズに合わせた大学院とはなんなのか、というところが大きくて、その選択肢に、さっき和氣先生もおっしゃっていましたけれど、一般の人のリカレント教育の場としての大学の修士課程、もっとスポーツのことを学んでみたいという全然スポーツと関係のない学部を卒業した方、それ以外にももっと学びたいという人たちを受け入れられるだけのキャパシティを作らないとなりません。その面では教員側がもっともっとがんばらなければいけないのかなと。ここまで大学院が充実してこられたのも先生方の努力と向上心のおかげです。今はほとんどの先生が博士の学位を持っています。若い先生たちにも大学院の担当教員として大学院の教育と研究に携わってもらっていますので、学部と同じ教員メンバーで総力をあげて大学院の充実にも取り組めると考えています。定員を増やす準備はできていますが、ただ内容をどうするかということは時代にあったところをどう捉えるかではないかと思っています。

和氣 外国人も積極的に受け入れています。

内藤 そう、外国人も外国に出ていくことも積極的にやっています。

和氣 そうですね。

司会 あらためて本日、北村先生に起こしいたできております。生き字引です。学部の改組、大学院も含めて、北村先生も研究科長・教務委員長を務めておられたこともおありになり、カリキュラムや教務事項は、北村先生のところに行けば分かるかと記憶しております。あらためて50周年や70周年を迎え、北村先生が、お感じになったところはいかがでしょう。

北村 今の内藤先生の話、和氣先生の話とも繋がりますが、たとえば大学院に入りやすくなるというのは悪いことじゃないと思います。(一同頷く)

北村 さっき和氣先生が言われた5年間一貫教育を考えたことがありました。なかなか具体化できませんでしたがトライしてほしいと思います。もちろん外国の研究機関との連携というのもこれから必要になってくると思います。私が学部改組をやり、大学院もそれに合わせて名称を変えてきたというなかで、頭の中にあっただけども表にあまり出さなかったことが2つあります。

その1つは学術性というものに関係してくるんですけども、「スポーツ健康科学部」を創ったときに、キャッチコピーを作ったんです。それは「スポーツと健康を科学する」です。今はあまり違和感なく使われていますが、当時はかなりの違和感がありました。科学する、科学って「する」ものかという感じでした。ただ日本語としては存在するわけで、「科学」という名詞を「する」という動詞をくっつけることによって、複合動

詞にしたのです。科学に動作性を持たせようと思ったんですね。科学すると表現することによって、スポーツ、健康を“静的”なイメージからダイナミックな“動的”なイメージに変えていきたいなと思ったのです。それがどこに刺さったかという、実は体育学会の研究者であったり、あるいは高校の先生であったり、というところに、うまく矢が刺さったように思います。あーっ、なんだ、ダイナミックな研究、ダイナミックな教育がしてもらえるんだ、あるいはそれができるんだ、と。それが1つ、我々の学部改組でアピールできたことなのだろうと。これが1つめです。

もう1つが、卒業したらスポーツマインドを持って社会に出ていていただいて、社会貢献をしてもらいたい、ということです。スポーツマインドというのを強く打ち出したんです。これなにかといいますと、私のなかに体育学部という、どうしてもスポーツで強い選手や保健体育の先生を目指す人しか触れられない、そういう場所であり、存在だと思われている、と私は感じていたのです。でもスポーツマインドを打ち出した私のベースはなにかというと、「スポーツが好きならいいじゃん、できなくたっていいじゃねーか(笑)」スポーツが好きでスポーツのそばでなにかやってみたい、そういう仕事をやってみたいという人がいたら、運動能力が低くてもいいじゃないか、というような。そういう発想が私のなかにあったんですね。だからスポーツができる人ももちろん来てもらいたいけれども、スポーツが好きな人に来てもらいたい。これを潜在的に訴えかけるような表現をいろいろなところでしていきました。たぶんこれが受験者、高校生には刺さったんだろうと思っています。その結果として今まで体育学部の時代にはこれだけの(両手を合わせて丸く輪にして)人しか対象にならなかったのが、好きだったらいいじゃん、あ、これオレ好きだからやってみたい、勉強してみたい、そういう人が集まってくるようになった。だから「スポーツ好き、集まろう！」というキャッチコピーも作りました。とにかく、「好き、好きを仕事にしようよ」という発想でアプローチをしていったのが2本目の矢です。そして体育教材としてのスポーツというところから広がっていきっかけを作れたのではないかと。それが波及して、今はそれが当たり前になってきています。その当たり前を作れたというのを順天堂の誇りとしてもいいのではないかと思います。逆に言うと、これからなにが人々に刺さるのかと、そこのあるところを見つけていかなければいけないんだと思うんです。

1学科制というのは、刺さるものが1つあると思うんです。なにかというと受験生がこれをやりたいと今すぐには決められないけども、なにかスポーツ系の順天堂で

やってみたいという人たちに対して、1学科制はモラトリアムを与えたんです。まずは1年のモラトリアムを与え、そして分野を決めたらもう1年、コースのモラトリアムをあげる。このモラトリアムというのは、今の高校生にとってみると、やはり刺さる要素の1つなのではないかと思うんですね。そういう意味で1学科制の入ってから決めればいいのかというシステムというのは、絶対刺さります。だから受験者も増えていくと思います。ただそれも当たり前になってくると思いますので、当たり前になったときに、順天堂は次のどここのところに矢を放っていくかという、そこのあるところを考えていくことをいつも考えていかなければいけないと思うんですね。(一同 頷く)

北村 大学院で言いますと、スポーツビジネスに目を向けたのは順天堂だったんです。ですが後続の早稲田に、スポーツビジネスについては取られています。もうスポーツビジネス教育研究のメッカは早稲田になってしまいました。もうこれは受け入れなければいけない現実です。そうすると、順天堂は早稲田のスポーツビジネスに匹敵するような、「これ」というものを打ち出していかなければいけないんだと思います。1学科制でももちろんいいのですが、早稲田のスポーツビジネスは最初の頃は実業の世界の人たちを大学院1年コースで集めたのです。実業家や社長、あるクラブの優秀な人材だとか、場合によっては元プロ野球選手であったり、大相撲の横綱であったり、そういういろいろな人を集めた。それをスポーツビジネスというところで束ねて、1年制の大学院を確立して来たわけです。それに匹敵するようなものを順天堂に作ってもらいたいというのが、私の1つのお願いということになります。(一同 頷く)

北村 ベースとして学部の教育というのももちろんそうなんですが、学部のほうの教育のほうがもっと難しいと思います。というのは、スポーツの概念もどんどん変わってきているからです。それこそeスポーツもスポーツだ、もちろんチェスや将棋はスポーツだ、となっていくと、スポーツで身体的な健康を維持していきましょうという命題は、むしろ消えていくというか。逆にeスポーツのプレイヤーは、私も話を伺ったことがありますけれど、彼らはeスポーツをやるために体を鍛えているんです。健康でないとeスポーツでスポーツできないから、健康を一生懸命維持することを考えている。あるいはお年寄りもスポーツを楽しみたいから健康に気をつけている方もたくさんいます。スポーツで健康になりましょうというのではなくて健康じゃないとスポーツができないから、健康のほうを私は一生懸命維持するためにがんばっていますよ、そういう人がいるんです。そういったスポーツと健康の位置づけの変化みたいなものも含



めて考えたときに、順天堂のスポーツ健康科学部では、「科学する心」をどこに振り向けていくのかということを考えてもらいたいと思っています。

ちょっと長くなってしまいましたが、そういうところまで考えてもらえれば嬉しいなと思っています。

これからのスポーツ健康科学部について

司会 まさに今日これから、ステップアップしていくために今後私たちが考えていくこと、目指している姿、をご示唆いただいたと思います。

印象にあるのは内藤先生と北村先生が大学院のカリキュラムを検討されていた際、シンプルに分かりやすくする、そして多様性に応じた内容にすべきだと議論されていたことを覚えております。まさにスポーツの多様性というのはこれからスポーツ健康科学部に求められ、この研究科に求められるところだと実感しました。

それでは、それぞれの先生方、今後こんなことを目指していきたい、10年後、20年後、こういう大学であってほしいということ、和氣先生から順にお願いできますか。和氣先生、どうぞ。

和氣 10年後ですか。

司会 5年後でもいいです。(一同 笑)

和氣 国際化をさらに推進していく必要があると思っています。本学には国際教養学部ができていますし、今は海外に行く学生や研究者、また本学に来る留学生も増えてきていますので、10年後にはスポーツ系国際大学と言われるぐらいになりたいと。学部も大学院もですけど、今後も大きく成長していればいいなと思います。

吉村 私も和氣先生が言われた国際化というのは大変重要な課題だと思っています。最近さまざまな活動を行う中で、よく感じるがあります。学部経営とか運営、さらに大学の発展を考えていくときに、1つの側面で物

事を考えるのではなくて、2つ3つ、もっと多くの側面を見ながら考えていくことが重要ではないかとよく感じています。和氣先生が言われたように、我々が今から求めなければならないのは、国際化はもちろんですが、継続して求め続けなければならない運動部の強化という側面、さらに施設も充実させていかなければいけないという側面、入試のために学生募集もしっかりとやっていかなければいけないという側面、優秀な高校生も獲得しなければならないという側面等、さまざまな側面をうまく組み合わせる物事を考えることのできる先生方や事務職員、そういう人材を増やしていくというのが、今後の大きな発展に繋がっていくのではないかと、強く感じています。

内藤 ここまで学部が70年、大学院が50年、まだまだこの先続いていくわけですが、もう一回くらい名称を変えるようなときがあるのかなと。北村先生の、スポーツ教養学部とか、それぐらいにまでしてもいいのかなとも思いますけれど。

ところで、大学院の主役はやはり学生で、大学院なら大学院生、学部であれば学部の学生ですが、今の学部生や大学院生を見ていると1つ思うことがあります。それは、昔はもっと身近にモデルがあって、たとえば、学部の学生からすると大学院生ってこんな感じ、というモデルがあって、型にはまってしまうのはデメリットかもしれませんが、それらいろいろなモデルに接して将来が描けた。今は逆にいいモデルが、特に新しい学部がスタートしたばかりなので、今の学部の学生にとってはいいモデルになる先輩とか大学院生とか、若い先生方とかの印象が薄い。そういう面ではいろいろなモデルになる学生がいて、その“いろいろな”というところが大切じゃないかと思っています。ただ、これまでは型にはまっただけのうちのいくつかのパターン、たとえばですがトップアスリートを目指すプロになるというモデルだけだったのだけれど、今後はプロを目指しているだけだけれども別の分野でもこ

んなにもがんばるとか、研究者を目指しているんだけども普段もしっかりアスリートとして頑張っているとか、もっともっとたくさんいいモデルになる学生が出てくる学部、いいモデルがたくさんいる大学院、そういう大学にしていけると、もっともっと、外から見たときも中から見たときも、魅力が増すのではないかと感じています。廣瀬 先生方のお話を伺い、これからの順天堂の発展、新しいもの、またその次を見据えて、とのリクエストがありましたけれど、私は、これまでの順天堂本来の姿も忘れないで、ということもすごく感じるんです。体育学部時代から、スポーツが大好きで、スポーツを実践して、そして、指導者になっていくという部分はやはりこれからもしっかりと核になっていく部分だと思っております。そこをしっかりと実践しながら、新しいものに目を向けていくべきだと、と考えています。

司会 まさに変わらない柱と時代のニーズに合った新しいものですね。

廣瀬 そうです。

司会 新しい改革に向けて変化をしていくという意味では、まだまだこの先、変化をしていくんだということは非常に感じています。

白熱してしまいお時間超過してしまいました。もう少しお時間いただききまして、少し肩の力も抜いて進めさせていただきます。(一同 笑)

学生生活の近況について

司会 廣瀬学生部長から、近況の学生生活について、忌憚のないご意見をお願いします。

内藤 とても記録に残るようなことは言えないです。(一同 笑)

廣瀬 はい。(笑) 学生生活においては多岐にわたります。ここで話せないことがたくさんあります。(一同 言えない、言えない 笑))

廣瀬 順天堂の学生生活は、やはり啓心寮でしょうか。しかし、女子寮こそできましたが、学部改組や定員増による大学の変革に対し、啓心寮の根幹的なものは何も変わらないままに継続されてきました。しかし、学生の人数が増えてきて、女子も増えてきているなかで、やっぱり、変化が起こってきています。私見ですが、振り返れば、さきほどのマネジメント学科誕生の頃から少しずつ変わってきているという印象を受けていました。それがどのような方向に行くのか、なかなか掴みづらかったんですけども……。今後、どういうふうに大学と啓心寮がかかわりあっていくのか、とても大きなテーマだと思っております。

過去の啓心寮は、医学部で医者になるグループと体育学部の教師になるグループで異文化が融合し、それは、自治会寮でもないし、大学では教育寮とは言っていますが、ガチガチの教育をやってる寮でもない。逆にそれが唯一無二の順天堂の色を出しているような気がしていたのです。ところが、さきほど内藤先生がお話していただきましたけれど、いろいろな人が入寮してきて、確かに色が混ざり合って不思議な色調は出しているのですが、未だ、特徴的な順天堂の色が出てきていないように感じています。今後、対応していかなくてはいけない部分が非常に多いと思うんです。自らを、心を啓発していく寮、まさしく啓心寮ですが、今後、今まで以上に大学の中で重要なパーツになってくると思います。

司会 コロナでいちばんの対応に悩んだのが啓心寮だと思います。大学寮であり、医学部とスポーツ健康科学部が入寮するという特徴ですが、コロナが出たときには対応に追われ決断もせまられました。大学寮を持っているがゆえに苦労した点も多くあると思います。その点は、吉村先生もご苦労されたと思います。率直な今の実感、今後の寮のあり方はどういう方向に進んでいくのか、正解はちょっと見えないかとも思いますが、いかがでしょうか。

吉村 実はその話、今日の朝のミーティングでも話させていただきました。基本的には今までの寮の形に戻します。このコロナの影響でいろいろありましたけれどもスポーツ健康科学部に関しては来年度は正常化ということで全員の入寮を許可したい。そのなかで、次は当然万が一なにか起こったときにどう対応するのか、どれだけ感染防止の意識を高めて、寮生活をするのかということに注視していくことが肝要だと思っています。そして学生の協力を仰ぎ、実際の寮生活をどう安全に安心して、しかも楽しく過ごしてもらおうかということを皆さんで考えていただきたい。これは来年度の話ですけども、そうしていきたいと今は考えております。今まではもしもクラスターなどが寮内で起こったときは大きな影響が出てきます。運動部に所属している学生が陽性者になったなら活動が中止になる、公式戦に出られない、という状況になりますから、とにかく寮内で陽性者を出さない対応がメインになっていました。ですが来年度からは通常の寮生活を実施しながら、どうすれば陽性者を出さないようにできるか、そのためになにが大事かということの教育を徹底していくということ、寮生同士が協力、工夫をして安全安心の体制をつくるのが、重要なのではないかなと今は思います。もちろんどうなるかわかりません。オミクロン株の問題もありますので、また1月にとんでもない数が出できたりする状況があれば、それは臨機応変に対応していかなくてはいけないと思います。

けれども、いまのところではなんとかこのいい順天堂の大きな特徴である寮生活は、4月から実施したいと考えております。

廣瀬 吉村先生と同様、私もコロナ禍で開寮し、学生を入寮させるととんでもないことが起こる、と覚悟していました。ところが、ひとり一部屋にはしましたけれども、順天堂の啓心寮に集まってくる学生さんは、考える力と自制の力を持ってきていました。若い彼ら彼女らですから、ときどきは雷を落とすこともありましたが、先述の力をもった学生が集ってきてくれている、ということは、これは過去からの高い順天堂の実績と社会的評価である、と考えています。一人ひとりが考えて行動して、相手のことも考えて、そんなことが出来る学生さんが集まっているんだな、と実感しました。

これは来年度以降の話で、大変に厳しいコロナ状況ではありますが、順天堂の学生であったら、この2年間よりも一歩前に踏み出した形でやらせていただいても、できるんじゃないかなと、そんな気持ちになっています。そして、再来年にはまた医学部の学生にも来ていただいて、また、一緒にやっていけるような思いはあります。

北村 ちょっといいですか。私は、理事長に、寮をテーマにして補助金をもらって下さいと言われてたことがあるんです。ちょうどいろいろな助成金のなかに、寮をテーマにできるようなものがあつたんです。それに合わせて資料をつくり提出して、理事長からも「これはいいね」と言われて、国に出しました。そうしたら、負けちゃったんです。どこに負けたかというところ東京理科大学です。理科大学は北海道に寮を作っていました。北海道に学生を連れて行き、そこに一般教育の先生が大勢張り付いて、そこで一般教育を教える、そういう形でした。それだけであれば別に負ける要素はなかったのですが、なにで負けたかというところ、エビデンスです。北海道に行った学生たちが東京の学科に戻ってきて、成績を比較したら北海道

に行った学生たちの伸びが高かった。そういうエビデンスがあつたんです、理科大学に。こちらのほうは、「うちの寮はいいぞ、いいぞ」と言葉で言うだけで数字で証明できなかった。そこで負けたんですよ。寮は順天堂の売りになると思うんですが、そのときにエビデンスを蓄積して、エビデンスでアピールしていくことがかなり大切だと経験上から思いました。これからの順天堂を大きくしていく、より優秀な学生を採るための重要な方策の1つになるのではと今思いました。

廣瀬 貴重なお話、ありがとうございます。

司会 私は同窓会の仕事もしていますが、同窓生から寮運営がとてたいへんなことと、学生も努力をしており、大学側が気合を入れて対応しているのだろうねという話を耳にします。同窓誌にも「コロナへの取り組み」を特集として掲載しています。同窓生たちは、今回の入寮、ひとり一部屋ですけども、トライしたという点を評価していると実感しています。内藤先生も寮のことで考えた部分が多岐にわたってあつたと思いますが、今振り返ってみて、まだ振り返る余裕はないとは思いますが、ここまででどのような感想をお持ちですか。

内藤 学生だけでなく、いろいろなところから、もしなにかあれば終わりだという雰囲気でしたから頑張ったのだと思います。学生のなかに寮に入れた学生と入れなかった学生がいて、そういう面では、かわいそうなんだけれども、北村先生が言われたようなことで寮の価値を客観的に評価してエビデンスを手にすることが重要であれば、寮を経験した学生と出来なかった学生の様子を追っていくのも1つのアイデアですね。

吉村 そうですね。

内藤 外に出た学生が不利だとは言いたくないんですが、寮の良さは維持するように、これからはさらによくしていくためには、ということでは、いろいろなヒントがあるのではと思いますよね。



司会 寮も女子寮が新しくなりました。女子学生に聞きますと、すごく過ごしやすいいと言っていました。男子は私が住んだ頃とまったく変わっていないような状況ですが。(一同 笑)

学生像の変化

司会 次にさくらのキャンパスに移転してから、現在まで学生像の変化についてお聞きます。こういった点が少し足りないとか、逆にこういったところはすごいなど、感じたことはありますか。

廣瀬 今の学生に何か足りないとか、そういうことはあまり感じていません。過去の啓心寮の学生は元気がよくて、寮祭などでアピールする部分が多かったのですが、確かに今の学生はそういう部分に関しては、熱くなる様子はないのかな、と感じることもあります。ですが、彼らは彼らなりに非常によく考えていて、言うなれば、肩の力が抜けたという感じで、割とリラックスしていろいろなことにチャレンジしてくれています。寮関係の先生方ともコミュニケーションをとりながらやってくれていますので、特にそのあたりで心配していません。ただ、アスリートたちが、寮から離れたがるきらいはやはりあって、現実問題として、さらなる自分たちの競技力向上を目指した場合、啓心寮での生活から離れた方が良いとの考え方があるのかもしれませんが。どちらが正解かは分かりませんが、ここのこと少しそういう感じは確かに出てきましたね。寮祭はここ2年は開かれていませんが、寮の行事にアスリート学生の参加が少なくなっているのは事実です。クラブ関係の教員からそのような指導もあるのかもしれませんが。

司会 600人ともなると多様な学生層が増えています。私も今1年生の授業を受け持っていますけれど、入学時から教員にはならないとか、運動部には入りませんか。でもスポーツの仕事に携わりたいという素直にそういう学生が入っているということがあったりします。あとはスポーツ系ではないところを志望していても、スポーツ健康科学部でビジネスのようなものができそうだからとか、そういう志望者も増えてると実感しているところです。そういう意味では寮も多様な学生たちが増えています。順天堂の啓心寮では部屋長という制度がずっと続いてきたんですが、そこの人選の部分というのは難しくなると。今も難しい部分がありますと思います。私の頃は、ちょっと成績悪い子は寮に残って勉強でしたけれども。(一同 笑)

司会 医学部だとそのような冗談話もしていました。医学部は2年間、寮にいられる時代でしたし。スポ健でも

成績悪いからちょっと寮に残って、もう一回1年生の授業受けたほうがいいという話を学生間でしていた覚えもあります。特に学則100条〔体育学部時代の学則には2年次終わりまでに所定の単位を修得しなければ3年次の学科目を受講することはできない旨の規定が設けられていた。〕がありましたから、なんとしてでも2年生で単位を取らないといけないので、必死になって2年生は勉強をしていたなというのが印象にあります。廣瀬先生、いかがでしょうか。

廣瀬 今の啓心寮の上級生たちには、自分たちが楽しかった、という思いから、1年生にも楽しい思いをさせなきゃいけない、そんな思いに縛られているようなところがあるんです。本当はそうでなく、学部長の言葉を借りれば、自分が成長するために残る、ということが本来の室長の在り方だったんですが、「おもてなし」が前面に出て、振りまわされているところを正しい在り方に戻さなくてはいけないと考えています。学生自身も過去とは違った思考をする人も出てきているような感じですので、室長が自分で自分を追い込んでしまったり、メンタル的に不安定になったり、問題を抱え込んでしまったり。ぜひ寮監の先生方や校医の先生方とも相談しながら、進めていきたいと考えております。

学部・研究科のさらなる発展に向けて

司会 今回のテーマは「学部・研究科のさらなる発展に向けて」ということで、70周年、50周年を振り返り、これからの順天堂の姿もこの座談会のなかから活かせるお話もあったと思います。最後に一言ずつ感想も含めてお願いしたいと思います。

和氣 大学院とは関係ないのですが、私自身寮の思い出は強く残っていて、今はコロナの影響で入寮できない学生もいますので、なんとかしてあげたいという気持ちがあります。600人に増えたことによる不安はありますが。体育学部だけではなく医学部の学生とも一緒に過ごしたかけがえのない思い出がたくさんありますし、今でも親しくしている同級生がたくさんいます。それは寮生活があっただけだと思います。コロナの影響で裸まつりも開催できなくなっていますよね。来年もおそらくできないでしょうから、3年間ないということになります。その次もなければ、裸まつりの文化を受け継ぐ機会が失われてしまいます。裸まつりを教えることができる学年がいなくなるわけですから。そうすると、我々OBが率先して教えないといけないかもしれません。やはり良き伝統は残さなきゃいけないなと。廣瀬先生のおっしゃるようなよいところは変えていく必要はないと思います。

司会 北村先生、今日を振り返ってお願いします。裸まつりの件じゃなくていいです。どうぞよろしく願いいたします。(一堂 笑)

北村 スポーツの根っこはなにかといたら、やはり楽しむことだと思うんです。寮も「楽しむ寮」。楽しませるんじゃなくて。新庄剛志さん〔2022年シーズンからプロ野球球団の北海道日本ハムファイターズ監督を務める〕が言っていたよね、「お客さんを楽しませるんじゃなくて、自分が楽しめば、お客さんも楽しんでもらえる」と。あるいはスポーツの競技でもレベルや性質が違ってもいいけれど、そこでも楽しむということが非常に重要です。学問でもやはりそこに入り込んでもらう。学問にのめり込めばのめり込んだほど楽しさが返ってくる、そういうようなところにもってほしい。人間関係の楽しさだとか、スポーツや研究というものをとおして得られるさまざまな楽しみを提供できる、大学、大学院であってほしいなと思います。以上です。

吉村 私は学生に対して、伸び伸びと、イキイキと学生生活を送ってほしいと願っています。大学生活というのはほんとうに自分の可能性をもっと伸ばせる4年間、6年間だと思っています。表現がよくないかもしれませんが、親の脛をかじってですね、肩身の狭い思いをして、自分の意見も堂々と表現しないというのではなくて、失敗しても、叱られてもいいじゃないですか、もっと伸び伸びと、イキイキと活動しながら自分の可能性を伸ばしていける、そういう啓心寮であってほしいし、順天堂での学生生活であってほしいと思っています。そしてそれを我々教員がいかにサポートできるかを考えるかが重要ではないかと思っています。この70年、50年という節目を機にあらためて先生方にも考えていただきたいし、私自身もそういう学生が増えるように、ひとりでも増えるように、最善を尽くしていきたいと思っています。

内藤 大学は学生がいて、教員がいて、もちろんそれに関わるたくさんの人たちがいて、そこで学生が生き生きする。学部も学科も大学院生も。そのためには、学生に教員の背中を見て育てとは言いませんが(笑)、ショボい教員の背中見てもしょうがないですから。あの先生、すごい研究に打ち込んでるとか、あの先生、すごい熱血だとか、すごくおもしろい授業をしてくれるとか、大学、大学院が伸びていくためのキーは、やはり教員の責任はとて大きいと思います。そういう意味で、まずはキャンパスに働いている教職員すべてがすごい生き生きした姿を見せていける、そういうなんというか、キャンパス、学部、大学院、になるように我々もがんばらないといけないと、とあらためて思いました。

廣瀬 他の先生方のような、素晴らしい将来展望なんかは正直、持ち合わせてはいないのですが……、長くこち

らの大学に勤めさせていただきまして、実は長いこと勤めさせていただいていると役得もあって、過去の教え子たちの次の世代、つまり彼らの息子たち、娘たちが入学してきて、私の授業を受け、クラブで指導を受けてくれています。言うなれば、世代的には「孫世代」になっているのですけれど、まあ、孫ですからやはり可愛いのですよ。ただし、可愛いからこそ、厳しいこともはっきりと言う、私自身は、ちょっと小言の言える教員であり続けて、次の順天堂をみていたい、そんな風に感じております。

司会 私自身はさくらキャンパスの一期生です。入試が習志野で今でも覚えています。大学には見えない校舎で入試の面接の際ドアを倒してしましました。(一同 笑)

司会 入学時には新しいキャンパスでした。さくらキャンパス一期生という立場でも今日のような座談会に参加させていただいたということをはんとうに光栄に思っております。こういった機会を与えていただき感謝を申し上げます。

実は本日、雨が降ってしまして、座談会中に晴れました。実は北村先生がお話されたときに、虹が出ていたんですよ。(一同 虹が出たほうを見る)

司会 今日は雨でデッキで撮影できませんねと話してたんです。ところが、学部発展の話をしている時に、晴れ間が出てきて、虹が出ました。このキャンパスはなにかパワーをもっているのかもしれませんが。小川理事長が初めてこのキャンパスに来られたときも、大雨だったのに、理事長が来たら急に晴になって、この3号館っていうのは、なにか“もってる”場所なのかなと思いました。もしかしたらここにいらっしゃる先生方が“もってる”のかもしれませんが。今回の対談中に虹が出てたというのは、未来に向けていい座談会ができたのではないかなと、個人的に思っております。特に北村先生、わざわざお越しいただきまして、ありがとうございます。(北村先生に一同礼)

我々が分からなかった部分、これまでの先生方の取り組み、改組も含めて我々勉強させていただき、あらためて我々の目指すべき指針というのを示唆いただいたと思っております。またぜひお話を聞かせて下さい。今度は、カフェテリアで学部長がご馳走していただけるそうです。

吉村 定食をごちそうします。アルコールなしで。(一同 笑)

司会 それでは長時間にわたる対談を終えたいと思いません。先生方、ありがとうございます。

習志野キャンパス 1951（昭和26）年～1988（昭和63）年

1947（昭和22）年千葉県習志野市の元騎歩兵学校跡地に学生寮「啓心寮」が開設され、習志野キャンパスは1951（昭和26）年順天堂大学への改組/体育学部（I類・II類）の開設（スポーツ健康科学部創設の年）によって始まる。医学知識の豊富な保健体育教諭・体育指導者を養成と心身ともに強靱な人格育成を目的として健康総合大学として黎明を告げる。1988（昭和63）年「習志野キャンパス」から「さくらキャンパス」に移転となり、新たな歴史を刻み始める。



当時の習志野キャンパス校舎全景



1号館校舎

順天堂大学校歌

一、光に映ゆる湯島の台地
聖鐘爽やかこだますところ
仁術の道譲りてこゝに
光栄ある歴史に輝く母校
おゝその名われらの順天堂

二、雲わき流る習志野の原
若き生命は誇りに燃えて
朝に学び夕に磨く
誠と力に溢るる母校
おゝその名われらの順天堂

三、希望の旗を掲げよ今ぞ
人類福祉の誓いもあらた
行く手を築く若き国手の
導き使命に伸びゆく母校
おゝその名われらの順天堂



体育学部初代学部長 東俊郎先生



体育学専攻/健康教育学専攻1期生（12名）入学 1952（昭和27）年



習志野キャンパス正門付近



本部事務室



1号館校舎付近



入学試験風景



入学試験風景



啓心寮入寮風景



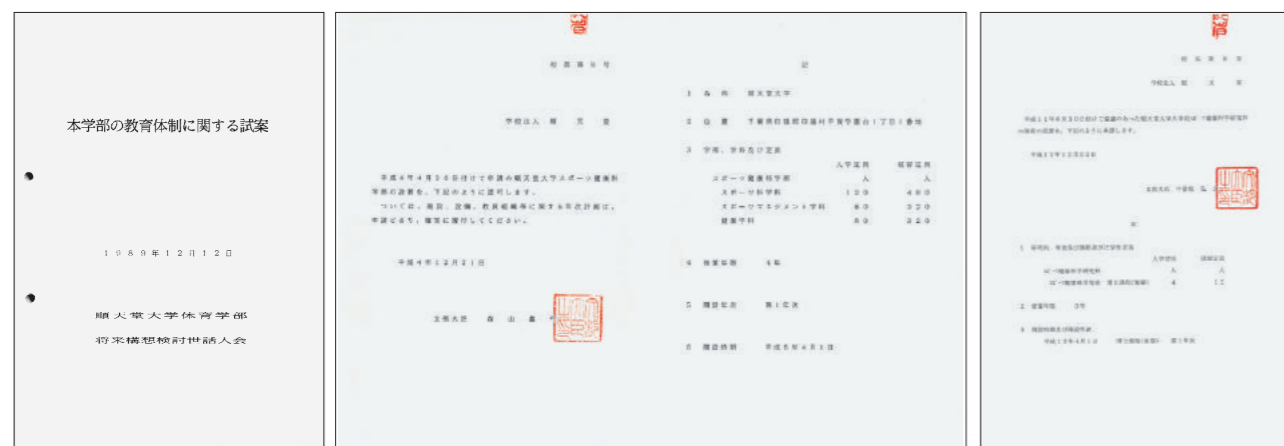
啓心寮5寮竣工 1974（昭和49）年

さくらキャンパス 1988（昭和63）年～

順天堂創立150周年記念事業の一環として、1988（昭和63）年に体育学部と医学進学課程を千葉県印旛郡印旛村（現千葉県印西市）へ移転。1991（平成3）年には、体育学部初の女子学生（体育学科36名、健康学科20名）が入学した。



1988（昭和63）年2月に撮影されたさくらキャンパスと平賀学園台。平賀学園台地区は、順天堂大学さくらキャンパスとのセット開発事業として整備された。



さくらキャンパスへの移転前から新学部の構想が練られた（左写真）。1993（平成5）年4月に体育学部（体育学科、健康学科）を改組してスポーツ健康科学部（スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科、健康学科）を設置（中央写真）。1997（平成9）年には、スポーツ健康科学部第一期生の卒業に合わせて、大学院体育学研究科をスポーツ健康科学研究科に改称し、2000（平成12）年に博士後期課程を開設した（右写真）。



答辞を読む女子第一期生 1995（平成7）年3月



中央が日本初となる博士（スポーツ健康科学）の学位を取得した高橋淳一郎氏 2003（平成15）年



スポーツ健康科学部の入学定員については、設置当初の280名から、2005年には330名、2017年には410名、1学科制へと改組した現在では600名まで増加している。教育施設の充実と定員増への対応のため、2021年には3号館（写真中央）が竣工した。



新講義棟などの紹介動画

体育学部・スポーツ健康科学部の主な改編

| | |
|---------|---|
| 1993年4月 | 体育学部をスポーツ健康科学部に改組 スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科、健康学科を設置 |
| 2001年4月 | 入学定員変更（スポーツ健康科学部定員280人） スポーツ科学科 120人から140人 スポーツマネジメント学科 80人から70人 健康学科 80人から70人 |
| 2005年4月 | 入学定員変更（スポーツ健康科学部定員330人） スポーツ科学科 140名から190名 |
| 2017年4月 | 入学定員変更（スポーツ健康科学部定員410人） スポーツ科学科 190名から250名 スポーツマネジメント学科 70名から80名 健康学科 70名から80名 |
| 2021年4月 | スポーツ健康科学部を改組、入学定員変更（スポーツ健康科学部定員600人） スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科、健康学科の3学科を廃止し、新たにスポーツ健康科学科を設置して1学科とする |

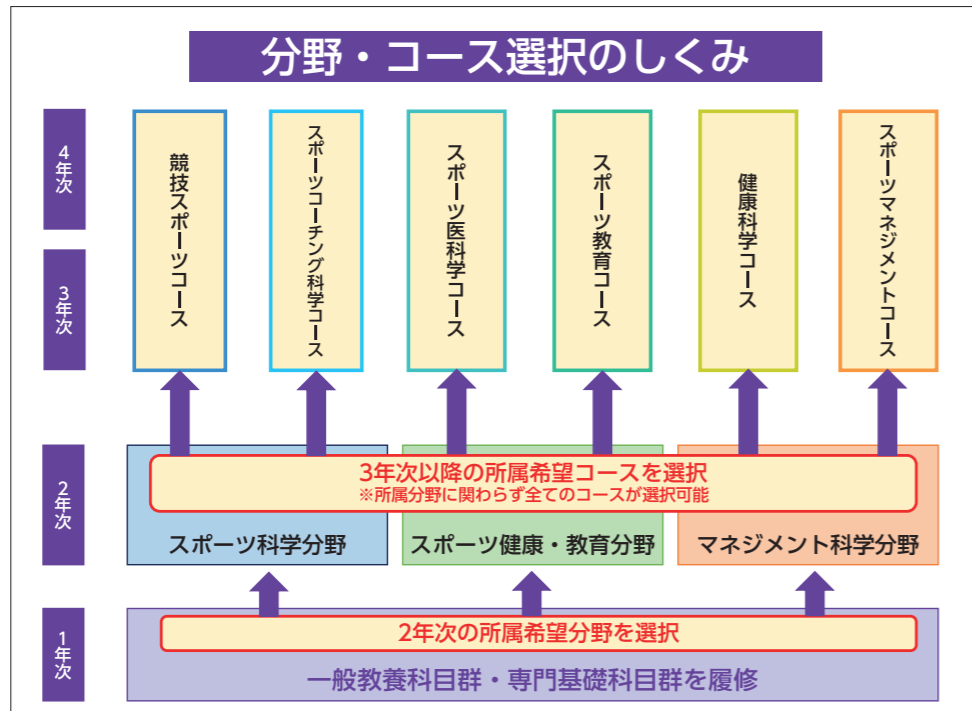
大学院体育学研究科・スポーツ健康科学研究科の主な改編

| | |
|---------|--|
| 1997年4月 | 体育学研究科をスポーツ健康科学研究科に改称 保健体育学専攻を廃止し、スポーツ健康科学専攻を設置 |
| 2000年4月 | スポーツ健康科学研究科にスポーツ健康科学専攻博士後期課程（入学定員4人）を設置 スポーツ健康科学専攻の小区分をスポーツ科学、スポーツ社会学（翌2001年にスポーツ社会科学へ変更）、健康科学の3領域に整理 |
| 2010年4月 | 博士後期課程入学定員を4人から10人へ増員 |
| 2016年4月 | 博士前期課程入学定員を21人から61人へ増員 |

第2章 教育課程

スポーツ健康科学部の教育課程

1991（平成3）年の大学設置基準の大綱化によって高等教育機関の個性化と多様化が求められる中、1993（平成5）年に設置された本学スポーツ健康科学部では、学習機会の多様化に応えるために編転入学〔1997（平成9）年〕や科目等履修生〔2001（平成13）年〕の制度を設け、また、自己点検・評価による教育課程の不断の見直しを進めてきた。特に2002（平成14）年と2019（平成31）年に大幅な改正を行い、2021（令和3）年に3学科制から1学科制へと改組した。2021年に設置したスポーツ健康科学科では、これまでの3学科の教育内容を3分野6コースに再編成した。学生は初年次にスポーツ健康科学の様々な科目を網羅的に学び、興味関心や進路に合わせて2年次に分野を、3年次にコースを選択して学びを深めていく。



スポーツ健康科学科 授業科目名[単位数]

| 2021（令和3）年 | | | | | | | |
|------------|--------|--|--|---|------------------------------------|--|---------------------------------|
| 外国語科目 | 必修 | Basic English I [2] Basic English II [2] | 専門 必修 | ゼミナール[4] 卒業研究[4] | | | |
| | 選択必修 | Basic English III [2] TOEFL・IELTS [2] フランス語[2] | 選択必修 | インターンシップ[2] グローバルコミュニケーション[2] 国際スポーツインターンシップ[2] | | | |
| | | 中国語[2] | | 競技スポーツコース必修 | スポーツコーチング演習[4] スポーツリーダーシップ論[2] | | |
| | | English Presentation[2] English Reading[2] | | スポーツコース選択必修 | セルフコーチング演習[2]* 他コース選択必修科目（*の科目） | | |
| | 一般教養科目 | 必修 | 日本国憲法[2] 文章表現法[2] 新しい世界を拓いた人々 [2] | 専門科目 | スポーツコース必修 | スポーツコーチング演習[4] スポーツコーチング論II [2] | |
| | | 選択 | 心理学[2] 経済学[2] 文学[2] 人間の生き方[2] | | スポーツコース選択必修 | スポーツコーチング総合実習[2]* スポーツ外傷・障害の評価と救急処置実習[2]* 他コース選択必修科目（*の科目） | |
| | | | 人間関係学[2] 情報処理演習[2] データサイエンスのための数学[2] | | 選択 | スポーツ栄養学演習[2] スポーツコンディショニング実習[2] アスレティックトレーニング実習[2] アスレティックトレーナー総論[2] アスレティックリハビリテーション実習[2] | |
| | | 社会科学科目 | 必修 | | 社会学[2] | 選択 | 社会学の調査研究演習[2] スポーツマーケティング[2] |
| | | | 選択必修 | | 細胞の生物学[2] 一般化学[2] | | |

| | | | | | | | |
|------------|--------|--|--|--|--|---|--|
| スポーツ健康科学科 | コース必修 | 基礎の物理[2] 統計学[2] 体づくり運動[1] 陸上運動[1] 水泳[1] 器械運動[1] | スポーツの生理学・生化学[2] スポーツ医科学総合実験実習[2] スポーツ医科学基礎演習[2] スポーツ医科学研究法 I [2]* 身体機能学演習[2]* 他コース選択必修科目（*の科目） スポーツ医科学研究法 II [2] | | | | |
| | | 運動実技科目 | | 選択必修 | 球技（ゴール型）[1] 球技（ネット型）[1] 球技（ベースボール型）[1] ダンス[1] 武道[1] | | |
| | | | | 選択 | アウトドアスポーツA[1] アウトドアスポーツB[1] | コース必修 | スポーツ教育学演習[2] 保健体育科教育法IV[2] 教職実践演習（中・高）[2] 教材開発論演習[2]* |
| | | | | | スポーツ健康科学総論[4] 体育原理[2] 生理学[2] 機能解剖学[2] スポーツ指導者に必要な医学的知識[2] スポーツと栄養[2] スポーツマネジメント総論[2] スポーツ社会学[2] 特別支援教育論[2] | コース選択必修 | 学校体育経営管理学[2]* 教育課程及び教育方法の理論と実践[2]* 生徒・進路指導論[2] 知的障害者指導法[2] |
| | | 専門基礎科目 | | 必修 | キャリアデザイン[2] スポーツ心理学[2] 運動生理学[2] スポーツコーチング論 I [2] 衛生・公衆衛生学総論[2] 生涯スポーツ論[2] | 健康科学コース科目 | スポーツによる健康サポートの科学[2] 健康運動指導論[2] 健康運動指導実習[2] 健康教育学[2]* 健康学実習[2]* 環境衛生学[2]* 環境衛生学実習[2]* 運動処方演習[2]* 教育相談[2]* 精神保健学[2]* 労働基準法[2]* |
| | 選択必修 | | 体カトレーニング論[2] スポーツ医学総論[2] スポーツの測定評価学[2] スポーツ外傷・障害学[2] 発育発達と加齢の科学[2] スポーツバイオメカニクス[2] | | コース選択必修 | | スポーツマネジメント I [2] スポーツマネジメント演習[2] スポーツマネジメント II [2] スポーツ文化論[2]* スポーツメディア論[2]* スポーツファイナンス[2]* スポーツ組織マネジメント[2]* |
| | | | 保健体育科教育法 I [2] 保健体育科教育法 II [2] 保健体育科教育法 III [2] スポーツ情報科学[2] 学校保健学[2] | | | | 選択 |
| | 共通科目 | | 専門展開 | 知的障害者の心理[2] 知的障害者教育課程論[2] 健康学概論[2] 障害者教育総論[2] リハビリテーション概論[2] 医学概論[2] 精神医学[2] | 保健体育科 関連科目 | 教育原理[2] 教職概論[2] 教育心理学[2] 特別活動の指導法[2] 総合的な学習の時間の内容と教育課程の編成[2] 学校経営論[2] 道徳の理論及び指導法[2] 教育実習[自4] 事前事後指導[自1] | |
| | | | | 情報社会論[2] 経営組織論[2] 組織開発論[2] スポーツビジネス演習[2] イベント概論[2] | | 教職関連科目 | 肢体不自由者の心理・病理・生理[2] 病弱者の心理・生理・病理[2] 障害者の病理と生理[2] 肢体不自由者指導法[2] 病弱者指導法[2] 視覚障害者の教育[2] 聴覚障害者の教育[2] 発達障害と重度・重複障害者の教育[2] 特別支援教育実習（事前事後指導を含む）[自3] |
| | 教育分野科目 | スポーツ健康・選択 | 社会科学の調査研究演習[2] スポーツマーケティング[2] | 特別支援学校教諭 関連科目 | | | |
| マネジメント分野必修 | | | | | | | |

スポーツ健康科学研究科の教育課程

1971（昭和46）年に設置した体育学研究科修士課程は、日本の私立大学で初めての体育学の大学院として21名の入学定員でスタートした。本修士課程の保健・体育学専攻には、体育学、体力学、コーチ学、スポーツ医学、健康管理学、学校保健学および環境衛生学という7つの学科目が置かれ、学生は専攻する学科目を主科目として、主科目担当教授の指導の下、主科目から10単位以上、ほかの学科目から20単位以上を修得することが求められた。

1997（平成9）年には、スポーツ健康科学部の1期生の卒業に合わせて体育学研究科をスポーツ健康科学研究科に、保健・体育学専攻をスポーツ健康科学専攻に名称変更した。このとき、学科目という呼称を領域に変更し、スポーツ医科学（スポーツ医学と体力学を統合）、コーチング科学（コーチ学から名称変更）、体育・スポーツ社会学（体育学から名称変更）、健康科学（健康管理学と環境衛生学を統合）および健康教育学（学校保健学から名称変更）の5領域に再編した。

1999（平成11）年、領域の中に分野を設けて、それまでの5領域を6分野に整理するとともに、スポーツ科学領域（スポーツ医科学分野、コーチング科学分野）、スポーツ社会科学領域（スポーツ社会学分野、スポーツマネジメント学分野）、健康科学領域（健康学分野、健康教育学分野）の3領域のそれぞれに各分野を配置した。翌2000（平成12）年には、修士課程を博士前期課程に変更して博士後期課程（入学定員4名）を新たに設置。この後期課程では、スポーツ科学、スポーツ社会科学および健康科学の3領域のいずれかを主たる研究領域としながらも、他の領域の方法論等を取り込んだスポーツ健康科学研究の深化と総合を企図した教育課程が構想された。

2003（平成15）年には前期課程の6分野を廃止して3領域のみを残し、2012（平成24）年に領域の呼称を系に変更（後期課程では3領域の区分を廃止）したが、翌2013（平成25）年のカリキュラムの大幅な見直しに合わせて前期課程の系の区分についても廃止して現在に至っている。

| 博士後期課程 | | 授業科目名[単位数] |
|----------|-------------------|-------------------|
| 領域 | 授業科目 | 2012（平成24）年～現在 |
| | 2000（平成12）年 | 2012（平成24）年～現在 |
| | 授業科目 | 授業科目 |
| | スポーツ健康科学特別講義[2] | 特別研究[6] |
| スポーツ科学 | スポーツ科学特別演習[2] | スポーツ健康科学特別講義[2] |
| | スポーツ医学特論[2] | スポーツ科学特別演習[2] |
| | スポーツ栄養・生化学特論[2] | スポーツ医学特論[2] |
| | コーチング科学特論[2] | スポーツ栄養・生化学特論[2] |
| | スポーツバイオメカニクス特論[2] | コーチング科学特論[2] |
| スポーツ社会科学 | スポーツ社会科学特別演習[2] | スポーツバイオメカニクス特論[2] |
| | スポーツ社会学特論[2] | スポーツ社会科学特別演習[2] |
| | 生涯スポーツマネジメント特論[2] | スポーツ社会学特論[2] |
| | スポーツメディア特論[2] | 生涯スポーツマネジメント特論[2] |
| 健康科学 | 健康科学特別演習[2] | スポーツメディア特論[2] |
| | 環境健康科学特論[2] | 健康科学特別演習[2] |
| | 精神保健学特論[2] | 環境健康科学特論[2] |
| | 健康政策特論[2] | 精神保健学特論[2] |
| | | 健康政策特論[2] |

修士課程・博士前期課程

| 1997（平成9）年 | | 1999（平成11）年 | | 2013（平成25）年～現在 | |
|---------------|--------------------|----------------|-------------------|----------------|----------------------|
| 領域 | 授業科目 | 領域 | 授業科目 | 科目区分 | 授業科目 |
| スポーツ医科学 | スポーツ医学特講[2] | スポーツ科学 | スポーツ医学特講[2] | 基礎科目 | 研究論文作成の基礎と展開[2] |
| | スポーツ医学特演[2] | | スポーツ医学特演[2] | | スポーツロジック序論[2] |
| | スポーツ障害特講（内科）[2] | | スポーツ生理学特講[2] | | コーチングとスポーツ組織[2] |
| | スポーツ障害特講（外科）[2] | | スポーツ生理学特演[2] | | スポーツ医学[2] |
| | 体力学特講[2] | | 生体機能調節論特講[2] | | スポーツ生理学[2] |
| | 体力学特演[2] | | 運動生化学特講[2] | | スポーツバイオメカニクス[2] |
| | スポーツ生理学特講[2] | | スポーツ身体組成学特講[2] | | スポーツ栄養学[2] |
| | スポーツ生理学特演[2] | | スポーツ医科学研究法実習[2] | | アスレチックトレーニング論[2] |
| | 生体機能調節論特講[2] | | コーチング科学特講[2] | | スポーツ統計学[2] |
| | 栄養・生化学特講[2] | | コーチング科学特演[2] | | スポーツ心理学[2] |
| コーチング科学 | スポーツ医科学研究法実習[2] | コーチング科学 | スポーツ心理学特講[2] | （専門基礎科目） | スポーツ社会学[2] |
| | スポーツ医科学特別研究[4] | | スポーツ心理学特演[2] | | スポーツ国際文化論[2] |
| | コーチング科学特講[2] | | 体力トレーニング論特講[2] | | メンタルヘルス[2] |
| | コーチング科学特演Ⅰ[2] | | スポーツバイオメカニクス特講[2] | | 環境健康科学[2] |
| | コーチング科学特演Ⅱ[2] | | コーチング科学研究法実習[2] | | ヘルスプロモーション論[2] |
| | コーチング科学特演Ⅲ[2] | | スポーツ科学研究指導[4] | | 測定系スポーツの指導理論と方法[2] |
| | トレーニング方法特講[2] | | スポーツ組織開発論特講[2] | | 表現系スポーツの指導理論と方法[2] |
| | スポーツバイオメカニクス特講[2] | | スポーツ社会学特演[2] | | 球技スポーツの指導理論と方法[2] |
| | コーチング科学研究法実習[2] | | 社会意識論特演[2] | | 武道スポーツの指導理論と方法[2] |
| | コーチング科学特別研究[4] | | 生涯スポーツ特演[2] | | スポーツ運動学[2] |
| スポーツ社会科学 | 体育・スポーツ社会学特講[2] | スポーツ社会科学 | スポーツ社会学研究法実習[2] | A | 競技団体プラクティカム[2] |
| | 体育・スポーツ社会学特演[2] | | スポーツマネジメント論特講[2] | | コーチングプラクティカム[2] |
| | 体育・スポーツ経営学特講[2] | | スポーツメディア論特講[2] | | 体育施設プラクティカム[2] |
| | 体育・スポーツ経営学特演[2] | | スポーツイベント論特演[2] | | スポーツ組織開発論[2] |
| | 体育・スポーツ心理学特講[2] | | スポーツマネジメント学研究法実習 | | 生涯スポーツ国際比較論[2] |
| | 体育・スポーツ心理学特演[2] | | スポーツ社会科学研究指導[4] | | スポーツマネジメント論[2] |
| | 体育・スポーツ社会学研究法実習[2] | | 生涯健康論特講[2] | | B |
| | 体育・スポーツ社会学特別研究[4] | | 生涯健康論特演[2] | | スポーツ国際イベント論[2] |
| | 生涯健康論特講[2] | | 精神保健学特演[2] | | スポーツ行政プラクティカム[2] |
| | 生涯健康論特演[2] | | 環境保健学特演[2] | | スポーツ産業プラクティカム[2] |
| 精神保健学特講[2] | 健康社会学特講[2] | 余暇産業プラクティカム[2] | | | |
| 健康科学 | 環境保健学特講[2] | 健康科学 | 健康社会学特講[2] | 専門応用科目 | 障害者と特別支援教育[2] |
| | 環境保健学特演[2] | | 健康教育学特講[2] | | アダプテッド・スポーツ論[2] |
| | 健康社会学特講[2] | | 心身障害教育論特講[2] | | 健康運動指導論[2] |
| | 健康科学研究法実習[2] | | 健康運動指導論特演[2] | | C |
| | 健康科学特別研究[4] | | 健康教育学研究法実習[2] | | 臨床心理学[2] |
| | 学校保健学特講[2] | | 健康科学研究指導[4] | | 保健福祉行政プラクティカム[2] |
| | 学校保健学特演[2] | | スポーツ健康科学総論[2] | | 健康産業プラクティカム[2] |
| | 心身障害教育論特講[2] | | 情報処理概論[2] | | 健康教育プラクティカム[2] |
| | 健康教育学特講[2] | | | | 保健体育科授業論[2] |
| | 健康運動指導論特演[2] | | | | 健康教育学[2] |
| 健康教育学研究法実習[2] | | スポーツ教育学[2] | | | |
| 健康教育学特別研究[4] | | 学校経営論[2] | | | |
| 共通選択科目 | 情報処理概論[2] | | | 保健体育科 教職科目 | 教育技法・教材開発プラクティカム[2] |
| | | | | 共通科目 | スポーツ健康科学英語特別講義[2] |
| | | | | 共通科目 | スポーツロジック実践英語[2] |
| | | | | 共通科目 | スポーツと健康のための疫学[2] |
| | | | | 共通科目 | スポーツロジックレクチャーシリーズ[2] |
| | | | | 共通科目 | スポーツ健康科学プラクティカム[2] |
| | | | | 共通科目 | 国際交流プラクティカム[2] |
| | | | | 専門科目 | スポーツ健康科学研究方法論[4] |
| | | | | 専門科目 | スポーツ健康科学研究法実習[2] |

第3章 研究活動

スポーツ健康医科学研究所

2005（平成17）年度に「運動に対する心と体の適応：オーダーメイド型運動プログラム作成のための客観マーカー開発（2005（平成17）～2009（平成21）年度）」をテーマとして文部科学省のハイテク・リサーチ・センター整備事業の対象研究組織に選定され、小川秀興（学校法人順天堂現理事長）を初代所長として設置された。これまでに、文部科学省の戦略的研究基盤形成支援事業「子どもの健康づくりのためのスポーツ医科学拠点の形成（2011（平成23）～2015（平成27）年度）」や私立大学研究ブランディング事業「脳の機能と構造を視る：多次元イメージングセンター（2016（平成28）年度）」、「スポーツ科学による“Health Creation”：代謝科学研究を基軸に世界展開するブランディング事業（2017（平成29）年度）」に選定されている。



スポーツ健康医科学研究所 2006（平成18）年竣工



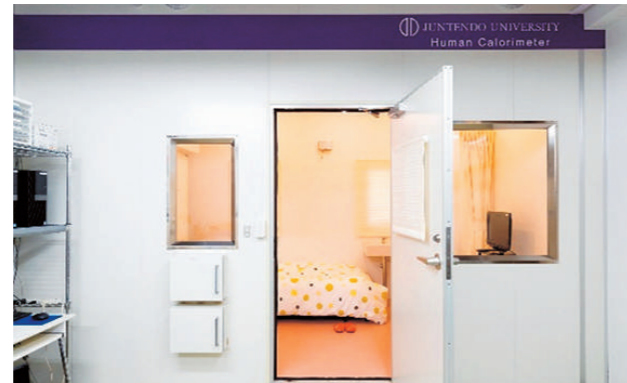
筋肉量の定量評価などが可能なMRイメージング装置



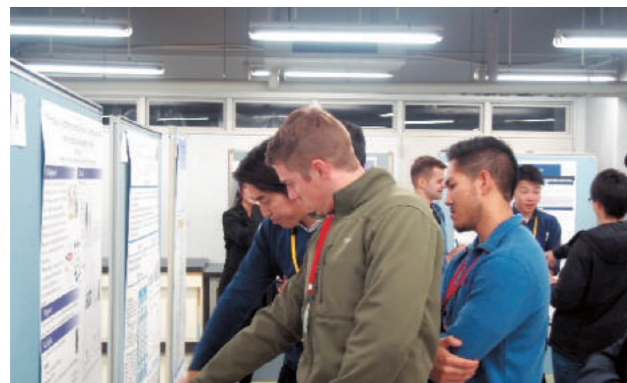
骨密度測定と脊椎骨折分析を組み合わせることで、より正確な骨折リスクを診断できるX線骨密度測定装置



様々な温度・湿度環境での運動を再現することができるトレッドミル室



日常生活動作中のエネルギー代謝量を測定することができるヒューマンカロリーメーター



学術講演会、所内セミナー、所外(特別招待)セミナー、海外研究者特別セミナー、国際シンポジウムおよび交流会、スポトロロジーセンター・スポーツ健康医科学研究所合同研究成果報告会などを定期的に開催している。

スポーツ健康医科学研究所長
2005（平成17）～2021（令和3）年度現在

| | |
|------|-----------|
| 所長 | |
| 小川秀興 | 2005～2008 |
| 木南英紀 | 2009～2017 |
| 内藤久士 | 2018～ |

研究活動、科学研究費、研究紀要

研究活動

さくらキャンパスにおける研究の情報交換と人的交流を目的に、ワークショップ（年8回）や学術研究講演会（セミナー）を定期的に開催している。スポーツ健康科学部共同研究は、研究の一層の活性化に資することを目的に研究助成を行っている。研究成果公表の場として、研究成果報告会を毎年開催している。大学院博士後期課程に在籍し、スポーツ健康医科学研究所に関係する研究を行っている学生を、教員の指示のもとに研究を補助するリサーチ・アシスタント（RA）として積極的に受け入れている。



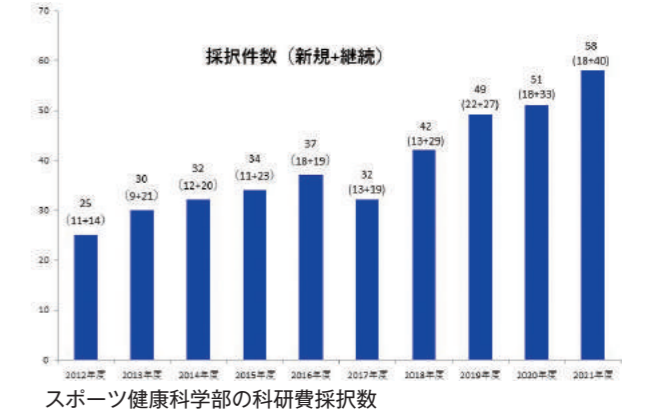
ワークショップ



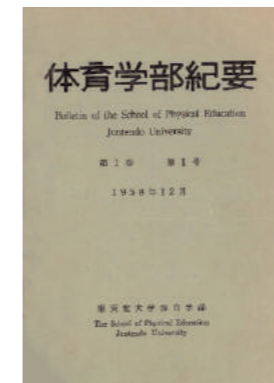
研究成果報告会

科学研究費

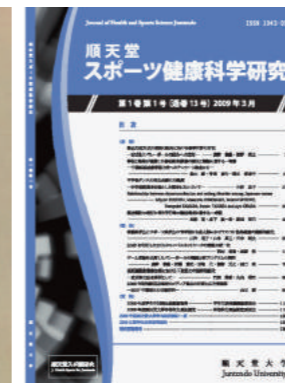
科学研究費（科研費）の採択件数は、2017（平成29）年度以降増加傾向にある。2021（令和3）年3月文部科学省発表の中区分別採択件数は、スポーツ科学、体育、健康科学およびその関連分野において順天堂大学が全国第2位となった。学部独自で科研費取得のための勉強会を年2回開催している。大学全体で開催される講習会とは異なり、スポーツ・健康領域における近年の採択状況や採択者・審査員経験者からの採択のポイントなどの情報提供をJURA（順天堂大学リサーチ・アドミニストレーション）と協働して組織的に行っている。



研究紀要



体育学部紀要



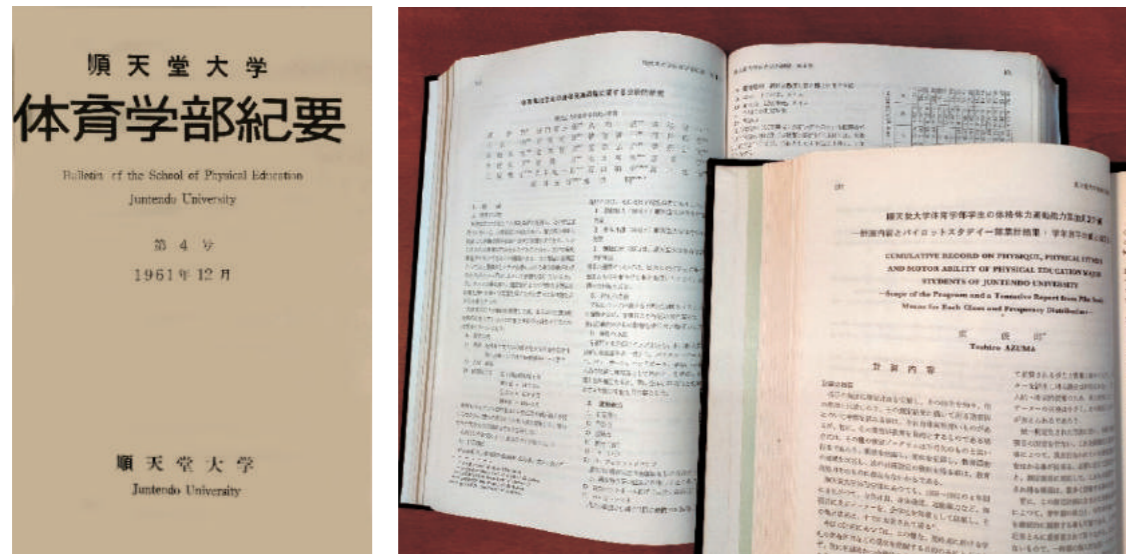
順天堂スポーツ健康科学研究

1958（昭和33）年に「体育学部紀要」を創刊。以降、「順天堂大学体育学部紀要」、「順天堂大学保健体育紀要」、「順天堂大学スポーツ健康科学研究」と変遷し現在の「順天堂大学スポーツ健康科学研究」に至る。「順天堂大学スポーツ健康科学研究」第1号から最新号を学術メディアセンターHPにて公開している。2020（令和2）年から冊子体発行に先行し、採択論文のWeb早期公開を行っている。

体格体力運動能力累加測定

体育学部紀要が創刊された1958（昭和33）年から1961（昭和36）年までの4年間に、初代体育学部長の東俊郎教授を中心に体育学部生を対象とした身体計測、身体機能、運動能力など68項目におよぶデータを収集し、その集計結果が1961（昭和36）年に順天堂大学体育学部紀要に報告された。

1968（昭和43）年に「順天堂大学体育学部学生の体格体力運動能力累加測定計画（順天堂大学保健体育紀要）」が発表され、当時の東俊郎学部長を委員長とし、体育学部専任教員によって組織される特別委員会が発足した。1968（昭和43）年にパイロット・スタディが行われ、1969（昭和44）年に本計画がスタートした。



「順天堂大学体育学部紀要」に報告された累加測定計画

記録の累加 そしてさくらキャンパスへ

1969（昭和44）年以降学年暦に組み込まれて累加測定が毎年実施され、測定結果が組織的に記録保存されていたが、1980（昭和55）年からはその集計結果が順天堂大学保健体育紀要に毎年報告されるようになった。さくらキャンパスへの移転を控えた1987（昭和62）年には累加測定集計システムを開発し、マークシートによるデータ入力を採用され、1987（昭和62）年以前のデータはこのときに電磁的に記録され、現在も保管されている。1993（平成5）年に体育学部を改組し、スポーツ健康科学部が完成を迎える1996（平成8）年には、教授会において新累加測定計画が承認され、測定項目や測定時期の変更が行われた。



累加測定の発展とJ-Fit+ Study

2016（平成28）年からは携帯端末によるデータ入力を採用し、体格・体力の測定に加えて運動・生活習慣等調査も実施している。2000年代に入り、学生時代の累加測定結果を活用した同窓生研究がいくつか実施された。2016（平成28）年からはスポーツ健康医科学研究所の研究プロジェクト（Juntendo Fitness Plus Study: J-Fit+ Study）として位置づけられたことで研究が加速した。

2017（平成29）年には過去に実施した同窓生研究の参加者を対象とした追跡研究が行われ、翌2018（平成30）年には啓友会に入会している同窓生約1万人を対象とした調査が行われた。2020（令和2）年にJ-Fit+ Studyを題目にした論文が初めて公表され、それ以降多くの論文が国際誌に発表されている。



令和の累加測定

昭和、平成、令和と三つの元号をまたぎ、途絶えることなく続く累加測定は、2019（令和元）年に50周年を迎え、学部案内2020でもその歴史を取りあげた。2017（平成29）年と2021（令和3）年の入学定員増を見据え、累加測定の大幅な見直しを議論している最中、2020年の新型コロナウイルス感染拡大となった。2020（令和2）年と2021（令和3）年は感染対策を施したうえで、対象学年と測定項目を限定した実施となった。そして、教育的意義を強調するため、必修科目のスポーツ健康科学総論や担任会と関連付けて累加測定を実施したり、累加測定を学ぶオンデマンド動画を作成したのもこの時期である。



学外実習

スキー実習

習志野キャンパスの時代より続いている山形蔵王温泉での「スキー実習」。ウィンタースポーツの代表であるスキーを通して、自然の中で運動する醍醐味を味わうとともに安全に配慮する学習（2月中旬4泊5日）を行う。宿泊は、ゲレンデの中にあるホテル「樹氷の家」であったが、2015（平成27）年火山活動活発化による影響で廃業となった。



スキー実習中の様子



「樹氷の家」で寛ぐ故笠原嘉介先生（左）と中村充先生（右）

海浜実習

海洋での水難救助技術、安全管理を学習する実技実習。スポーツ健康科学部の集中実技科目の中では歴史が古く、伝統の定番科目の一つである。実習の主要プログラムは遠泳で、当日の天候や潮流のコンディション等によって実施時間は前後するが、約2時間の遠泳を実施し、リスクを最小限にするシステムや困難を克服する術を学ぶ。近年は千葉県館山市北条海岸で7月下旬に実施している。



遠泳の様子



遠泳後の集合写真

語学教育

1990年代の英語教育は、伝統的な「訳読」式であったが、2002（平成14）年度より会話やスピーチなど実践的な英語教育へとシフトした。またTOEIC学内受験、海外研修コロラドプログラムも開始された。2013（平成25）年度にはグローバル人材の育成のさらなる促進を目指し、グローバルに使われているTOEFL（英語圏大学留学希望者用英語試験）が導入され、1年次に2回の受験で入学以降取り組んだ学修の成果を測っている。1年間で取得したスコアの上位5名に TOEFL High Score賞、1回目から2回目の試験でスコアの伸びが顕著な学生上位5名には TOEFL Highly Developed賞が授与され、TOEFL成績優秀者表彰式が行われる。



小川秀興理事長をお迎えして（2020（令和2）年度TOEFL成績優秀者）



成績優秀者へは賞状と副賞として図書カードが授与される。



2021（令和3）年度入学生から、1年生全員が年2回の受験が必須となった。2022（令和4）年1月に実施されたTOEFL団体試験を受験する学生の様子。



海外英語研修プログラムが行われたアメリカコロラド大学ボルダー校の写真。学生は1ヶ月ホームステイをしながら、英語授業やアクティビティに参加し、英語力の向上と異文化理解を深めている。



スポーツ健康科学部では英語以外に、フランス語、ドイツ語、中国語も開講され、2021（令和3）年度は約450人が受講した。左の写真は印西市で開催されたフランス発祥の球技ペタンクの大会で学生達が楽しんでいる様子。フランス語担当の竹内京子先生と希望する学生が毎年参加している。受講生はペタンクを通して、フランス語学習にさらに興味を持つことも多い。素晴らしい投球にはフランス語で「ビヤン！」の掛け声が飛ぶ。

第5章 学生活動と支援

学生部・自治会・順風祭

学生部の組織活動は学生部委員会からなり、交通安全小委員会、食堂運営小委員会、学生生活実態調査小委員会、定員増対策小委員会に分かれ活動を行なっている。また、安全衛生管理室、学生相談室、啓心寮、スポーツ推進支援センター運営委員会などの機関や委員会と連携し、情報共有しながら学生生活全般における相談・支援サポート体制を整えている。

自治会活動

自治会の主な活動内容は、自治会総会、順風祭（学園祭）、卒業記念パーティーの開催、運動部・同好会への助成である。その他にもユニバーシアード競技大会やオリンピック・パラリンピック競技大会の壮行会や報告会を開催している。



ユニバーシアード競技大会報告会 2019（令和1）年7月25日



東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会出場選手への
寄せ書き 2021（令和3）年6月

自治会主催の卒業記念パーティーは4年生の自治会役員が司会となり、ベストチューター賞、TOEFL High Score賞、スポーツ賞副賞の授与、定年退職教員への花束贈呈などを行う。特別企画として、4年生の自治会役員が制作した4年間の思い出の詰まった動画を鑑賞し、最後に校歌を全員で合唱して閉会となる。



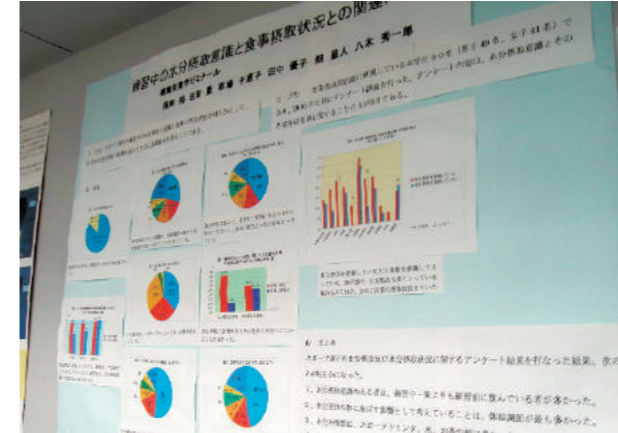
卒業記念パーティー 2008（平成20）年3月19日



卒業記念パーティー 2016（平成28）年3月18日

順風祭

順風祭（学園祭）の中では、ゼミナール活動で学んだことを口頭とポスターで発表をしている。また、何か月も前から準備し、質の高いダンスパフォーマンスを繰り広げるダンス部の公演は圧巻で、毎年楽しみにしている方々が大勢いる。オープンキャンパスと同時開催になった時は、多くの高校生がゼミナール発表会、ダンス部公演を参観している。



順風祭ゼミナールポスター発表 2003（平成15）年11月1日



順風祭ダンス部公演 2013（平成25）年11月3日

順風祭（学園祭）では、「泰然の庭」を会場にし、様々なイベントを実施した。フリーマーケット、SASUKE、スラックラインスペース、パラスポーツ体験会、フレンドパーク、ボルダリング、迷路など、地域住民も参加して行なわれた。その他にも武井 壮氏講演会、ソフトボール大会なども実施された。



SASUKE 2013（平成25）年11月2日



ボルダリング 2015（平成27）年11月1日



フレンドパーク 2016（平成28）年10月29日



スラックライン 2017（平成29）年11月3日

学生寮

本学、建学の趣旨には「寮生活は自治的生活を体得する好機であります。最高の社会人たらんには、社会に出る前に、自由に振る舞ってしかも他人に迷惑を及ぼさぬ社会的訓練を先ず充分に受けねばなりません。」（順天堂史下巻「平成5年より抜粋」とある。この精神は時代を越えて、啓心寮の精神的支柱として伝統をつむぎ、多くの卒業生の心に息づいている。



「啓心寮」(習志野キャンパス)



「啓心寮」(さくらキャンパス)

1991(平成3)年度体育学部の共学化にともない、体育学部・医学部の女子寮の整備が行われた。1997(平成9)年度には啓心寮開寮50周年式典が挙行され、記念植樹が石井昌三氏(当時理事長)によって行われた。2017(平成29)年度に1学年410名の定員増にともない新女子寮(西寮A棟竣工)、2021(令和3)年度には1学年600名の定員増にともない新女子寮(西寮B棟竣工)の整備が行われた。



啓心寮50周年植樹 石井昌三理事長(左) 1997(平成9)年6月7日



新女子寮(9階建て)
奥：西寮A棟 2017(平成29)年竣工
手前：西寮B棟 2021(令和3)年竣工



西寮A棟居室(二人部屋)



啓心寮(建設中) 1987(昭和62)年



寮務室当番 1988(昭和63)年



看護学生と合同ハイキング 1989(平成元年)年



寮祭の笑運動会 1993(平成5)年



寮祭「御神輿」 1994(平成6)年



大坪寮母と女子学生 1995(平成7)年



寮祭「裸祭り」 1998（平成10）年



「オリロー」を使用した避難訓練 2000（平成12）年



ゴミゼロ運動 2004（平成16）年



寮祭「部屋ダンス」 2007（平成19）年



入寮式 2014（平成26）年



退寮式 2016（平成28）年

運動部指導者会

運動部指導者総会は年2回開催され、運動部助成金、最優秀スポーツ賞、体育施設管理者などを決定している。2月には運動部指導者会慰労懇親会が開催され、1年間の運動部の結果を報告し、指導者の労をねぎらい、定年退職者の送別を行ってきた。

また、運動部運営委員会が毎月開催され、助成金配分、入試関連、施設管理、広報戦略、学修支援、入学前教育プログラム、リーダーシップ研修会などを検討してきた。そして、物心両面で運動部を支えてきた。その甲斐あって、陸上競技部、体操競技部、蹴球部、バレーボール部、スカッシュ部、フットサル部など、多くのクラブが全国大会等で優勝を果たした。

2018（平成30）年度には、スポーツ支援センターを開設、2019（平成31）年3月にUNIVAS（大学スポーツ協会）に加入、2021（令和3）年度よりスポーツ推進支援センターが本格稼働を開始した。



1969（昭和44）年全日本インカレ&関東インカレ「初優勝」を皮切りに多くの祝賀会が開催された陸上競技部
関東・日本インカレ総合優勝祝賀会 2006（平成18）年2月3日



運動部指導者会慰労懇親会 2010（平成22）年



運動部指導者会慰労懇親会 2015（平成27）年

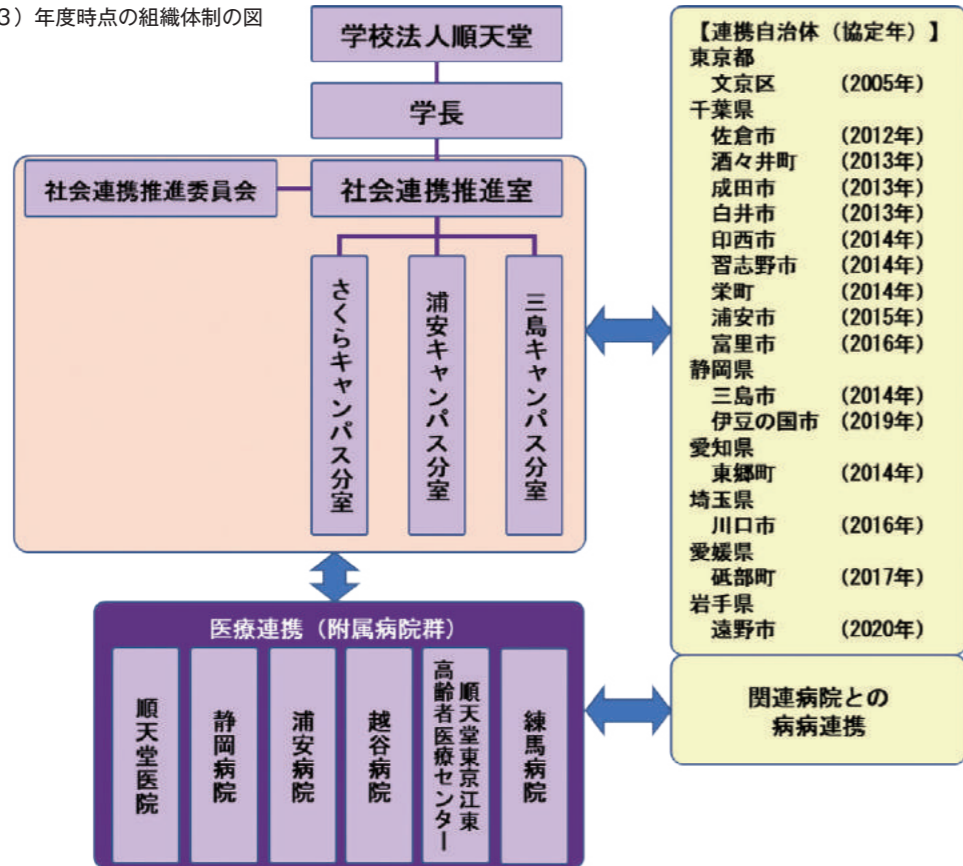


第46回世界体操競技選手権大会団体優勝&第69回全日本学生体操競技選手権大会団体優勝を祝う会 2016（平成28）年1月30日

社会連携

さくらキャンパスでは、印旛村（現印西市）および酒々井町と連携して、親子を対象に「スポーツへのいざない」をテーマとした「順天堂大学生涯学習公開講座」を2006（平成18）年から開始した（2020（令和2）年のみ中止）。2013（平成25）年に社会連携推進室と各キャンパスの分室が設置されてからは、全学的な取り組みの中で連携自治体が増加。さくらキャンパス分室では、スポーツと健康に関する研究成果を地域住民に提供する公開講座やスポーツ科学体験会のほか、教員と学生ボランティアによるスポーツ教室を開催するなど、地域のスポーツ振興と健康増進に向けた取組を推進している。

2021（令和3）年度時点の組織体制の図



生涯学習事業では生涯学習公開講座（酒々井町・印西市教育委員会）、なわとび教室（浦安市総合体育館）、介護・寝たきりを予防するための運動と栄養（白井市）を実施している。



地域貢献の取組は連携自治体に限らない。写真は、足立区の小学生を対象にしたスポーツ科学体験会 2019（令和元）年

国際交流

さくらキャンパスでは、2004（平成16）年から国際的なシンポジウムや研究交流会が組織的に行われるようになった。また、北京体育大学（中国）との交流協定の締結以来、諸外国の連携機関を増加させ、国際的な教員の交流、学生の研修・実習の受入などの学術交流を推進してきた。



スポーツ健康科学部は中国北京体育大学と国際交流協定を締結した。澤木啓祐学部長（左）と池建北京体育大学副学長（右） 2008（平成20）年



張世響先生を団長とする大学院生13名が本学で短期研修を行った。 2017（平成29）年



さくらキャンパスでは、日本や近隣諸国で行われる国際大会前などに、各国の代表選手にスポーツ施設を提供している。海外選手との交流や競技会のイベントは、学生教育の場にもなっている。2015（平成27）年に開催した陸上競技会「Junendo International 2015」は、スポーツ健康科学部と国際教養学部の学生が中心となって運営された。



2016（平成28）年、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた日本のスポーツ国際貢献事業「SPORT FOR TOMORROW」のコンソーシアムに加入。海外選手の受け入れなどを行った。ニュージーランドのTomas Walsh選手（左写真、後列右から3番目）、香港理工大学スカッシュチームとの交流（上）。 2017（平成29）年

第7章 就職支援

就職支援

希望進路の変遷

キャンパス移転時の1988（昭和63）年度卒業生145名の進路は42%が教員で、企業の43.4%と同等の割合であったが、マネジメント学科の第1期生卒業時の1996（平成8）年度には企業の比率が48.6%に高まり教員は14.3%まで低下。AO入試他入試制度の多様化に伴い幅広い人材が集まるようになり、2006年度以降教員希望者が再び増加に転じて2012（平成24）年度には33.8%と3分の1を占めるまでになった。しかしながら少子高齢化の進展に伴う教員採用試験の難度の高まり、堅調な企業の大卒求人倍率推移から2013（平成25）年度以降は企業就職志望者の増加傾向が顕著。2020（令和2）年度の進路の内訳は教員が20.3%に対し、企業は55.7%となった。

〈希望進路内訳の変遷〉

| | 1988(昭和63)年度 | | 1996(平成8)年度 | | 2012(平成24)年度 | | 2020(令和2)年度 | |
|-----|--------------|--------|-------------|--------|--------------|--------|-------------|--------|
| | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 | 人数 | 比率 |
| 教員 | 61 | 42.1% | 41 | 14.3% | 111 | 33.8% | 82 | 20.3% |
| 企業 | 63 | 43.4% | 139 | 48.6% | 134 | 40.9% | 225 | 55.7% |
| 公務員 | 7 | 4.8% | 15 | 5.2% | 31 | 9.5% | 31 | 7.7% |
| 進学 | 11 | 7.6% | 40 | 14.0% | 32 | 9.8% | 42 | 10.4% |
| その他 | 3 | 2.1% | 51 | 17.8% | 20 | 6.1% | 24 | 5.9% |
| 合計 | 145 | 100.0% | 286 | 100.0% | 328 | 100.0% | 404 | 100.0% |

就職支援の状況

女子学生初年度の1991（平成3）年には3年生、4年生併せて年6回であった就職支援講座・説明会は、定員が330人となった2005（平成17）年には37講座延べ75日、コロナ禍直前の2019（令和元）年には58講座のべ120日超にまで拡大。

企業との交流を活性化させるべく、1997（平成9）年より東京プリンスホテルにて企業との就職懇談会（2004（平成16）年まで続く）を開始。続いて2000年からは学内の体育館を開催場所とする学内業界セミナーの開催もスタートさせた。就職環境の変化から2010（平成22）年からは個社別の学内企業説明会に形を変え、更に2020（令和2）年度からは、コロナ禍を考慮し、その他の就職支援講座も含め一斉にリモートによるオンライン講座にシフトさせながら質の高い情報提供を続けている。



就職懇談会（懇親会） 2000（平成12）年11月



就職懇談会（記念講演） 2000（平成12）年11月



学内業界研究セミナー 2002（平成14）年1月



前期特別合同ゼミナール 2011（平成23）年5月

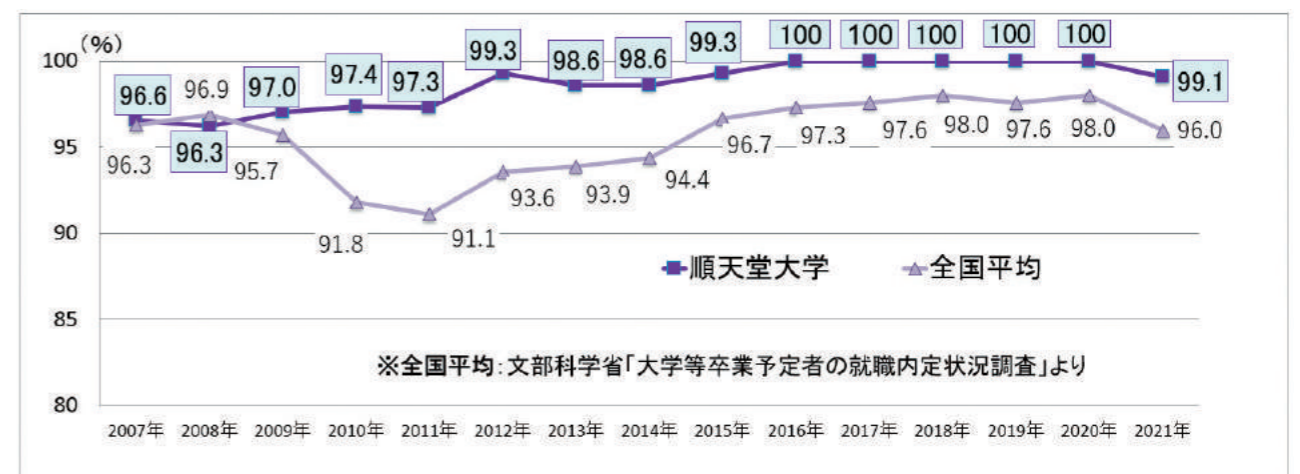


2021（令和3）年3月竣工の3号館就職課・進路相談室



コロナ禍での就職相談風景

企業就職志望者の内定獲得率は、2008年度以降文部科学省発表の全国平均を上回り、2015年度より5年の間100%を維持。内定企業先の業種についても、従来多く見られたサービス業やミズノ、デサント等のスポーツ関連企業に加え、いまでは電通（広告）、三井住友銀行（金融）、グラクソ・スミスクライン（外資系・製薬）など、業界を代表する企業にコンスタントに卒業生を輩出しており、幅広い職業分野で大勢の卒業生が活躍している。



企業就職内定者率の推移

教職支援

「教職の順天堂」・・・進路相談室でのグループ学習

学校現場で活躍できる人材として学習指導や生徒指導の基本的な指導力を身に付け、心豊かで自ら主体的に判断し、行動できる児童・生徒の育成に関わっていける教員養成を目的に、2014（平成26）年度よりJKB48（順天堂大学・教員採用試験・勉強会）を立ち上げ、学生が主体的に学習会に臨めるようにした結果、現役合格者の増加へとつながった。

しかし、2020（令和2）年度、2021（令和3）年度はコロナ禍により、グループ学習の取り組みを継続できない事態となり、急遽、リモート学習に切り替え対応した。



グループ学習会（1号館1階相談室）



コロナ禍によるリモート学習会

「教員採用試験への対策」・・・教員採用二次対策研修会（5日間）

本学では校種別のグループ学習会、進路相談室主催の教員採用試験対策講座、OB、OGを招いての二次対策研修会、教員志望学生を対象に1年時からの、フォローアップ（インセンティブプログラム）を継続するとともに、現役教員（卒業生）からの学校現場での仕事ぶりや教職の魅力について講演会などを実施し、さらなる教職への意識向上と魅力の発信に努めている。



令和元年度 二次対策研修会（啓友会館2階）



令和3年度 二次対策研修会（3号館6階）

進路相談室

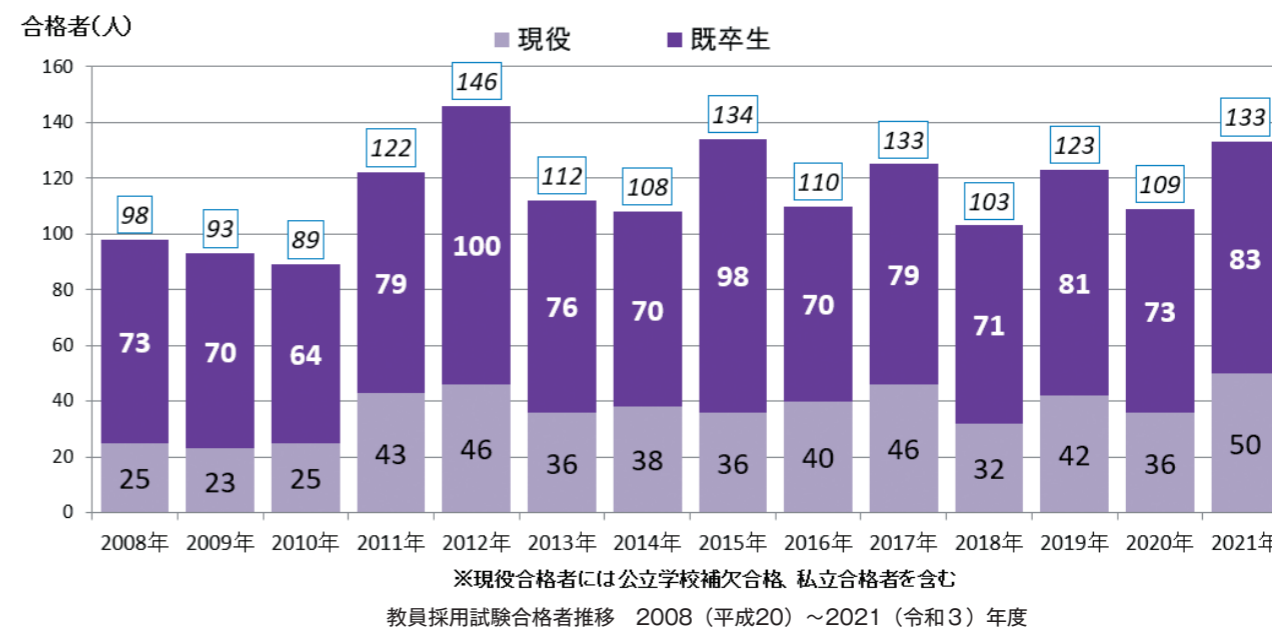
教員志望者を支援する組織として2004（平成16）年9月より就職課内に進路相談室を新たに設置。最初は1名からスタートしたが、2015（平成27）年4月より定員を3名に拡大し、中学・高校保健体育および養護教諭、特別支援学校、小学校それぞれ校種別に志望者を指導する体制を整えた。

進路相談室では、教員志望者に向けた各種の採用試験対策講座・セミナーの計画、立案から運営までを年間を通して休みなく行うと共に、個々の学生に対する進路相談、試験対策の個別指導まで、学生に寄り添った就職支援を、時間を惜しんで実施している。



教員採用二次試験対策集中講座を終えて、いざ出陣

2010（平成22）年にスタートした8月の教採2次試験対策集中講座（令和3年はコロナ禍で中止）は、現任教員であるたくさんのOB、OGにもお手伝いいただいている他大学では見られない試みであり、学生たちの大きな自信に繋がり、参加者の中から毎年延べ40～50名の大勢の合格者を輩出している。



第8章 広報・学生募集

学生募集

学部入試制度の変遷

さくらキャンパス移転時の入学試験は、スポーツ推薦、一般推薦および一般入試のシンプルな枠組みであった。この枠組みは2005（平成17）年度入試まで続いたが、2005（平成17）年度に学部定員を280名から330名に増員して以降、より多彩な人材を求めて様々な入試制度が導入された。

〈総受験者数推移（単位／年度、名）〉

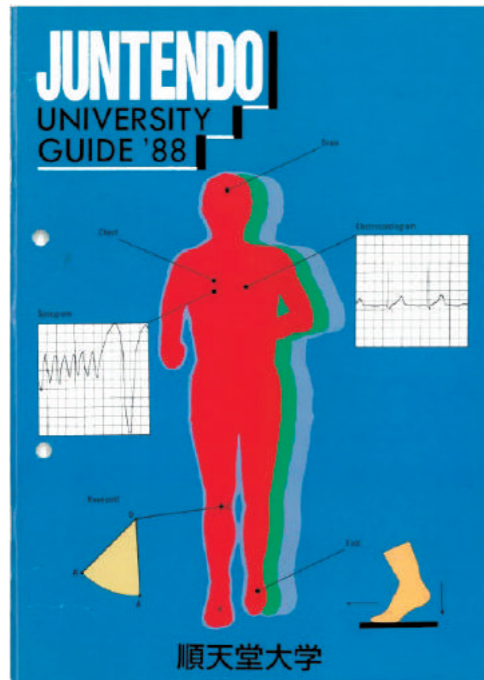
| 入試年度 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 | 2021 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 学部定員 | 280 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 330 | 410 | 410 | 410 | 410 | 600 |
| 総受験者数 | 3,274 | 3,225 | 2,885 | 2,855 | 2,448 | 2,142 | 2,147 | 3,058 | 3,242 | 4,226 | 3,553 | 3,594 | 3,936 | 4,148 | 4,851 | 4,623 | 4,077 | 3,410 |

学生募集活動

入試制度の改革と並行して、より多くの学生に順天堂大学を知ってもらうために、高等学校での模擬授業や学校説明会、様々な会場での進学相談会の他、学部案内の充実、オープンキャンパスの拡大、ホームページ・SNS等のデジタル媒体の活性化など様々な学生募集活動に取り組んだ。

学部案内（パンフレット）

学部案内（パンフレット）は、さくらキャンパスへ移転した1988（昭和63）年以降も暫くは大学共通の学部案内を使用しており、スポーツ健康科学部単体の学部案内が本格的にスタートしたのは2004（平成16）年版からであった。しかしながら、その間にも1990年には翌年4月からの女子学生の入学に先立ち女子学生募集チラシを、1993（平成5）年4月の学部名変更（体育学部からスポーツ健康科学部へ）に際しては12ページのリーフレットを用意するなどの工夫がなされている。なお、女子学生募集チラシは、学部に女子学生がいないことから、さくらキャンパスで寮生活をしていた医学部の女子学生の協力を得て作成されたものである。



1988（昭和63）年度版



1991（平成3）年度女子学生募集チラシ

2004（平成16）年に作成された初めての学部単体の学部案内は、学部・学科紹介やキャンパス・部活紹介などが掲載された44ページの冊子であったが、2016年にはスポーツ健康科学部を象徴する特設ページや活躍するOB、OG、寮生活の魅力等が盛り込まれた計68ページの冊子となった。

時代の変化とともに、デジタル化が進み、学部案内（パンフレット）は、学部のことを良く知ってもらうために欠かせぬ紙媒体であり、現在はホームページの充実と一体で運用している。

時代とともに変化するパンフレット表紙



2005（平成17）年版



2007（平成19）年度版



2010（平成22）年度版



2013（平成25）年度版



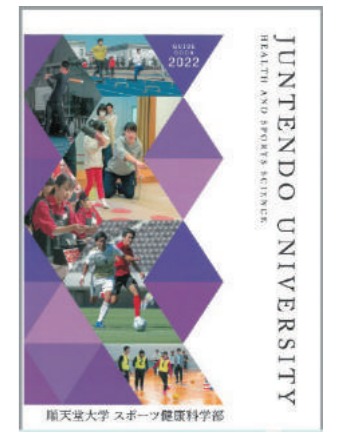
2014（平成26）年度版



2017（平成27）年度版



2020（令和2）年度版



2022（令和4）年度版

オープンキャンパス

進学相談会等の会場での「オープンキャンパスはやっていないんですか？」の多くの声をきっかけに学内での検討が始まり、1998（平成10）年9月26日に初の学内オープンキャンパスが開催された。プログラムは大学の概要、学部・学科紹介、入試説明、個別相談および施設見学とほぼ現在と変わらぬ内容でスタートした。初回の参加者は生徒数148人および保護者約50人であった。翌1999（平成11）年には6月と9月の年2回となり、以降は概ね年2回の頻度で継続して開催した。センター試験利用方式の導入と足並みを揃え、2011（平成23）年度よりオープンキャンパスを質、量とも充実させ、以降、大手予備校との共同開催や新潟や名古屋で開催の学外のスポーツイベント、保護者懇談会とのタイアップ、本学卒業生の先生方の協力を得て開催した宮城県でのスポーツクリニックなど趣向を凝らしたイベントを各地で開催した。ピーク時には、1回の開催で1,000人以上、年10回の開催で6,000人を超えるの高校生や保護者の方々、関係者の方々に順天堂大学をより深く知ってもらうことができ、出願者数の増加に繋がっている。



オープンキャンパスの様子 2008（平成20）年



学部・学科紹介／第2体育館 2008（平成20）年



2021年5月に初めてオンラインオープンキャンパスを開催



学生サポーターの皆さん 2021（令和3）年6月



キャンパスツアー 2015（平成27）年



個別相談会 2015（平成27）年

広報活動のデジタル化（ホームページ、SNS、Zoomの活用）

1999（平成11）年4月に、主に学生募集目的で学部ホームページを開設。その後、IT技術の進化とともにリニューアルとバージョンアップを重ねてきた。SNSの普及に伴い、さらにFaceBook、LINE、Twitter、Instagramとも連携を図りつつ、紙媒体をデジタル媒体と融合させながら幅広い世代に情報が届くよう常に新たな広報手段を取り入れてきた。

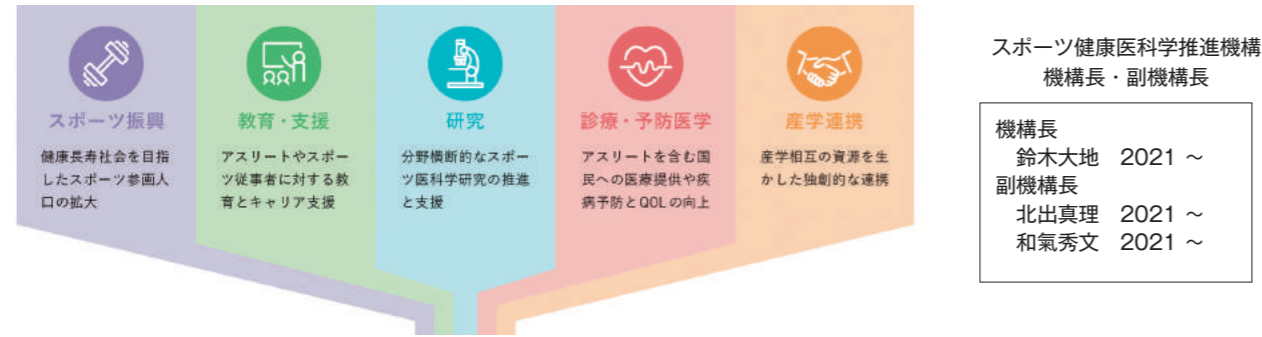
2020（令和2）年度に入ってから、コロナ禍の影響で、対面でのオープンキャンパスの自粛を余儀なくされたが、代わってホームページを通じての動画配信や、WEB上での新たなコミュニケーション手段であるZoomを活用したオンラインオープンキャンパスを素早く展開した。遠隔地からの参加が容易になったことに加え、新たに登用した多くの学生広報サポーターを通じ大学の雰囲気が良く知れたと参加者の好評を得ている。

学部入試制度の導入経過

- 2006（平成18）年度
 - ・AO入試（定員15名）を新規導入。
- 2009（平成21）年度
 - ・AO入試（アスリート選抜）（定員10名）および推薦入試（特定校群）（定員10名）新規導入。
- 2011（平成23）年度
 - ・センター試験（現在の大学共通テスト）の結果を利用するセンター利用方式（定員20名）を新規導入。それまで減少傾向にあった受験者数が以降3,000人の大台で推移。
- 2017（平成29）年度
 - ・一般入試（英語外部試験利用方式）（定員5名）を新規導入。
 - ・学部定員を410名に増員。受験者総数は4,148人となり初めて4,000人の大台に。
- 2018（平成30）年度
 - ・一般入試（高得点2科目方式）（定員30名）およびセンター利用方式（後期）（定員5名）を新規導入。
 - ・受験者総数4,851人は過去最高。
- 2020（令和2）年度
 - ・一般入試（競技型1科目方式）（定員5名）新規導入。
- 2021（令和3）年度
 - ・AO入試が総合型選抜入試へ、推薦入試が学校推薦型選抜入試へ、一般入試が一般選抜入試へと刷新なり、新たに学校推薦型（SSH（スーパーサイエンスハイスクール）特別推薦方式）（定員5名）を導入。
 - ・コロナ禍での受験のため、PCを利用したWEB面接を初めて実施。

スポーツ健康医科学推進機構

初代スポーツ庁長官を務めた鈴木大地を機構長として、2021（令和3）年4月にスポーツ健康医科学推進機構（JASMS:Juntendo Administration for Sports, Health and Medical Sciences）が発足した。Health Promotion、Next Generation、Community およびHigh Performanceという4つのテーマを掲げ、スポーツと医学の研究成果を社会課題の解決に結びつける組織として、産学連携や社会連携による取組を推進している。



5つのミッション「研究」「診療・予防医学」「教育・支援」「スポーツ振興」「産学連携」



スポーツ健康科学部では、千葉ロッテマリーンズの選手に対して体力測定などのサポートを行ってきた（上左写真、2020（令和2）年1月）。JASMSが取り組む様々なプロジェクトの一つであるプロスポーツ支援プロジェクトでは、スポーツ健康科学部をはじめ学内組織のネットワークを活用・強化し、プロスポーツ選手のトレーニングとコンディショニングのサポートを行っているが、千葉ロッテマリーンズとのプロジェクトにおいても現在、JASMSがチームとの渉外を主導している。



2021（令和3）年6月に行われた設立記者発表（左から北出真理副機構長、新井一学長・機構アドバイザー、鈴木大地機構長、和氣秀文副機構長）。



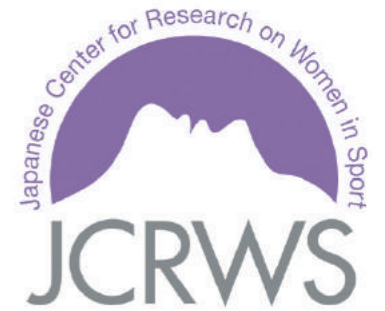
2021（令和3）年12月には株式会社読売巨人軍と選手のコンディショニングに関する学術指導契約を締結した（左から小林弘幸教授、鈴木大地機構長、読売巨人軍の会田有志トレーニング統括、大竹寛トレーニング統括補佐）。

女性スポーツ研究センター

2011（平成23）年に文部科学省委託事業「チーム『ニッポン』マルチサポート事業」の女性アスリート戦略的強化支援方策の調査研究を受託（代表：小笠原悦子）し、女性スポーツの研究が加速した。2014（平成26）年には、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受けて女性スポーツ研究センター（Japanese Center for Research on Women in Sport）が設立され、女性アスリートの支援方策など女性スポーツに関わる社会的課題の解決に向けた研究体制を整えた。



女性スポーツ研究センターの設立を発表する小笠原悦子センター長（右）、鯉川なつえ副センター長（中央）、北出真理副センター長（左） 2014（平成26）年9月1日



センターのロゴマーク。中央を走る曲線は基礎体温から着想を得たもの。アスリートとして高みを目指す女性の顔、また、ベストパフォーマンス後の女性アスリートの歓喜の瞬間を表している。



2015（平成27）年からは、女性コーチアカデミー（2018（平成30）年から女性リーダー・コーチアカデミーに改称）を開催し、スポーツ分野でのトップコーチやリーダーを目指す女性のために、女性スポーツ研究センターの研究成果に基づいた研修を行っている。これまでに7期、約210人の修了生を輩出した。写真は2015（平成27）年の修了生。



「チーム『ニッポン』マルチサポート事業（女性アスリート戦略的強化支援方策）の成果をまとめた「女性アスリート戦略的強化支援方策レポート」では、エビデンスを示し、「身体・生理的」、「心理・社会的」、「組織・環境的」な課題を解決しながら、包括的な女性アスリートへの支援体制を確立していくことが重要だと提言した。2013（平成25）年



2012（平成24）年からコンディショニングや健康管理のツールとして「女性アスリートダイアリー」を発行、10年目となる2021（令和3）年版からは、大修館書店より一般発売が開始された。また、2021（令和3）年4月から中学校、2022年4月から高等学校保健体育のデジタル教科書として採用されている学習サポートツール「女性アスリートのためのe-learning（2016（平成28）年制作、2021（令和3）年改訂）」のほか、「PPE for female athletes: 女性アスリートの運動参加前健康評価」（2021（令和3）年）」などを開発し、多くの女性に活用されるよう研究成果の発信に取組んでいる。

女性スポーツ研究センター
センター長・副センター長

| |
|--|
| センター長 小笠原悦子 2014～ |
| 副センター長 鯉川なつえ 2014～ 北出真理 2014～ 平澤恵理 2018～ |

学術メディアセンター

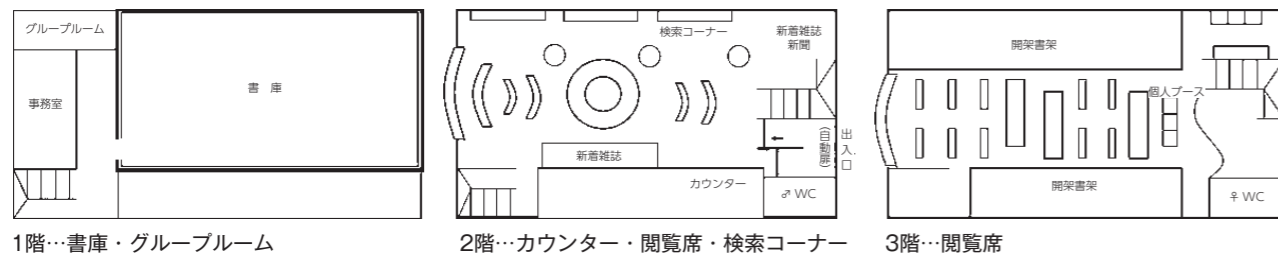
2016（平成28）年に「図書館分館」から「さくらキャンパス学術メディアセンター」に改称した。
 独立した3階建ての建物で、2階の入り口は1号館・2号館と渡り廊下でつながっている。体育・スポーツ・健康分野を中心に、教育学や医学一般など様々な分野の資料を所蔵している。



学術メディアセンター外観



2階カウンター



2014（平成26）年に2階・3階の一部を改装した。2階は書架をすべて変更し、小説などの読み物や雑誌・新聞を配架。ラーニング・commonsスペースを新たに設け、中央には円形の書架とベンチを設置した。



改装前の2階



改装後の2階



ラーニング・commonsスペース。可動式の机や椅子、ホワイトボードがあり自由に組み合わせて、個人学習や少人数でのディスカッションができる。



検索コーナー。文献検索のデータベースや電子資料を利用することができる。

所蔵資料について

習志野キャンパスからさくらキャンパスへ移転した当初の蔵書数は約8万冊、2020（令和2）年現在は約11万冊である。所蔵する資料の電子化が進み、紙媒体の雑誌の年間受入数は、2002（平成14）年に1017タイトル（洋雑誌229を含む）であったが、2020（令和2）年には565タイトル（洋雑誌31を含む）と半減した。電子ジャーナルは2000年頃から購読を始めた。タイトル別に購読契約する以外に専門分野のパッケージでの購読契約をしており、2020（令和2）年現在は約4万タイトルを利用することができる。殆どの電子資料や文献検索のデータベースは、来館しなくとも自宅等から閲覧・利用することが可能である。

野口記念文庫

1967（昭和42）年4月に、野口源三郎教授の所蔵資料をご遺族からご寄贈いただき、野口記念文庫として受入登録した。教育学・スポーツ・体育学・体育理論などを中心とした貴重な資料である。



野口源三郎（1888-1967）

東京高等師範学校（東京教育大学の前身・現筑波大学）卒業。日本体育界の有数の指導者。東京教育大学教授・体育学部長、埼玉大学教育学部長を歴任。体育学部開設に際し、有山登学長の相談相手となり、学部設立に尽力した。体育学部開設時は埼玉大学との兼任教授であり、1957年（昭和32）から専任教授となった。

- ・1920年（大正9）第7回国際オリンピック大会（アントワープ）に十種競技選手及び主将として参加。
- ・1924年（大正13）第8回国際オリンピック大会（パリ）に日本代表選手団監督として参加。
- ・1960年（昭和35）「紫綬褒章」を受章
- ・1964年（昭和39）「勲三等瑞宝章」を受章
- ・1967年（昭和42）「従三位」に叙される



書蔵資料

さくらキャンパス安全衛生管理室

1988（昭和63）年に体育学部が習志野キャンパスからさくらキャンパスに移転し、健康管理室は1号館1階（1102室）、休養室（1103室）に設置された。2017（平成29）年5月1日「学校法人順天堂安全衛生管理規程」制定に伴い「学校法人順天堂健康管理規程」は廃止され、安全衛生管理センター及び各地区安全衛生管理室が発足、さくらキャンパス健康管理室は「さくらキャンパス安全衛生管理室」と名称が変更された。

安全衛生管理室には看護師が常駐し、内科、精神科、整形外科の校医がさくらキャンパス学生教職員の健康管理を担当している。安全衛生管理室の利用者数は年間3,000件～4,000件である。

主に健康診断、病気や怪我の応急処置、心身の健康相談、ワクチン接種、感染症対策、安全衛生管理、学外実習や各種行事における救護活動など様々な業務を担っている。



安全衛生管理室入口

安全衛生管理室内

2018（平成30）年スポーツクリニック開設

定期健康診断（春・秋）は第1・2号館の教室を利用し健康学科の実習を兼ねて実施していたが、2015（平成27）年より会場を第1体育館に移し年1回春のみ実施となった。2015（平成27）年以降の受検率はほぼ100%である。2020（令和2）年法人統一の健診システム（HM-neo）導入に伴い、データ管理の一元化、WEB問診、UPI調査、ストレスチェック、健診結果の閲覧が可能になった。



春季健康診断（第2コスモホール）風景



健康診断受付の様子（第1体育館入口）



心臓超音波検査（循環器校医）

学部1年生の心電図検査を実施し、有所見者に対して心臓超音波検査やHolter心電図など継続したフォローアップを行っている。



AED講習会 2020（令和2）年2月

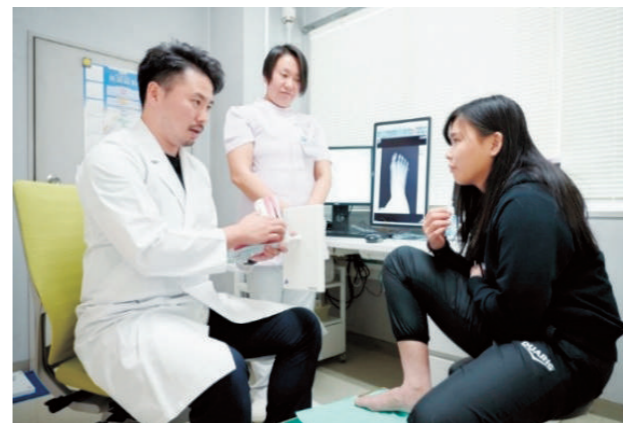
2005年AEDをキャンパス内8か所に配置、2022（令和4）年には16台まで増設。AED講習会を開催している。



メンタルヘルス相談（精神科校医）

UPI調査、精神保健調査、ストレスチェックを実施し、メンタルヘルス不調者に対して精神科校医によるサポートを行っている。

2018（平成30）年10月 順天堂医院との連携が強化され、受診・精査・術前術後相談など安全衛生管理室で専門医のクリニック（医事相談）を受けることができるようになった。スポーツクリニックでは校医および附属病院の専門医がスポーツ外傷後の診療を一貫して実施・管理することが可能となり、2019（平成31）年4月に運用を開始したAthletic Training Room（通称：ATR）と連携し、診断後または術後リハビリテーションなど早期の競技復帰に向けたサポートを行っている。



スポーツクリニック（整形外科校医）



UNIVAS AWARDS2019-20
安全確保に関する優秀取組賞
「優秀賞」受賞

アスレティックトレーニングルーム

アスレティックトレーニングルームは、2017（平成29）年に竣工したOGAWA GYMNASTICS ARENA内に開室された。アスレティックトレーナー、医師、理学療法士が連携して学生のリハビリテーションとコンディショニングを支援している。



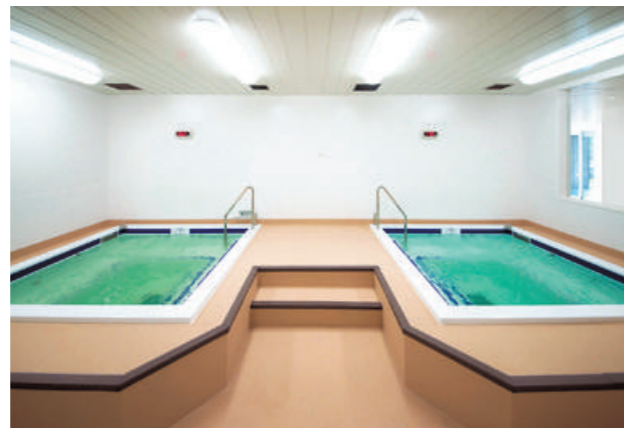
アスレティックトレーニングルーム外観



アスレティックトレーニングルームでの学生アスリートに対する支援の取組は、2020（令和2）年度の一般社団法人大学スポーツ協会「安全確保に関する優秀取組賞」を受賞した。



アスレティックトレーナーの教育の場としての実習スペース（左写真）や温冷交代浴が可能な渦流浴室（右写真）を備えている。



学生アスリートのサポートに取り組む宮森隆行講師（理学療法士、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、左写真）と門屋悠香助教（日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、右写真）。



第10章 同窓会

啓友会

1995（平成7）年、体育学部同窓会は「体育学部同窓会・スポーツ健康科学部同窓会」と呼称していたが「啓友会」へ改称した。このころの会員数は4,600名ほどであった。2021年3月現在の同窓会員数は13,457名となり、内さくらキャンパスの卒業生は9,918名となっている。



啓友会館



旧啓友会館売店（学生会館2階）

2013（平成25年）年8月に念願だった啓友会館（写真左）が建設された。2階（79.17㎡）はコモンスペース、資料室があり、各種会議、ゼミ発表、クラブのミーティング等々に幅広く活用されている。1階（194.07㎡）は同窓会事務室、売店、ホール、倉庫となっており、売店では啓友会が作成した順天堂大学オリジナル商品が販売され、人気商品となっている。啓友会館は卒業生、学生、教職員等が気軽に立ち寄り交流を深めることができる拠点となっている。



第33回卒業後研修会（高知大会）2010（平成22）年



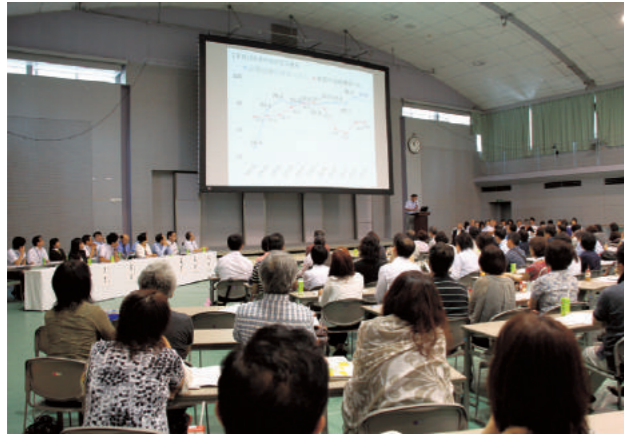
第37回卒業後研修会（山形大会）2018（平成30）年

啓友会主催の「卒業後研修会」は、1968年大学主催により体育学部卒業生研修会として始まった。そして毎年体育教師に向けての研修会として全国各地で開催してきた。2010（平成22）年、誰でも参加できる研修会として、第33回卒業後研修会が高知県支部で開催され、以降隔年で行うことになった。第37回山形大会からは、懇親会を順天堂大学同窓会懇親会として、3学部同窓会の会員が参加して開催された。

第11章 保護者会・後援会

さくら会・桜順会

保護者会は1978（昭和53）年に発足し、現在「さくら会」という名称で活動している。主な活動は、入学式後の総会・新入生保護者歓迎会、大学と共催の保護者懇談会、部活動に関する助成、朝食摂取の推進、会報の発行、修学援助制度の運営、オープンキャンパス等での説明などである。各学年5名の役員を選出し、20名での活動となっている。役員会は総会や保護者懇談会を含めると年6回集合し、会の運営に当たっている。



さくら会と大学共催の保護者懇談会 2013（平成25）年9月8日



オープンキャンパスで説明するさくら会役員 2017（平成29）年8月14日

卒業生の保護者の会、いわゆる後援会は1998（平成10）年に発足し、現在「桜順会」という名称で活動している。主な活動は総会の開催、スポーツ健康科学部の教員による特別講演の開催、会員に順大スポーツ新聞の発送、学生の活動助成としてベストサポート賞・ボランティア賞の表彰、ゴルフコンペなどの会員相互の親睦活動などである。有志からなる6名程度の役員で、年に数回集合し、会の運営に当たっている。



桜順会総会 2016（平成28）年7月4日



桜順会賞の表彰 2019（平成31）年3月7日

スポーツ健康科学部の教育課程の変遷

学部共通開講科目（一般教育科目・外国語科目）

| | 1993（平成5）年 | 2002（平成14）年 |
|-------------|---|---|
| | 総合講座[4] 生きる意志の倫理学[2] 国語表現法[2] | 総合講座[4]※1 生命の倫理学[2]※2 国語表現法[2] |
| 必修 | 英語Ⅰ[2]※4 英語Ⅱ[2]※4 英語Ⅲ[2]※4 英語Ⅳ[2]※4 | 必 Oral EnglishⅠ[2] 修 Oral EnglishⅡ[2] English Reading[1]※5 English Writing[1]※5 TOEIC Reading[1]※6 TOEIC Listening[1]※6 |
| 外国語科目 | 初級英会話[2] 中級英会話[2] ドイツ語入門[2] 初級フランス語会話[2] | 外国語科目 選 必 修 Basic English Conversation[1]※8 Advanced Oral English[2]※9 ドイツ語入門[2]※10 初級フランス語会話[2]※10 |
| Aグループ（選択必修） | 基礎の数学[2] 力学の基礎[2] 一般化学[2] 細胞の生物学[2] | 基礎の数学[2] 力学の基礎[2] 一般化学[2] 細胞の生物学[2] 統計学[2]※11 |
| Bグループ（選択必修） | 心とからだの哲学[2] 社会学[2] 心理学[2] 経済学[2] 法学[2] | 選 必 修 心とからだの哲学[2] 社会学[2] 心理学[2] 経済学[2] 法学[2] |
| 一般教育科目 | 初級ドイツ語会話[2] 上級英語[2]※13 有機化学と生命[2] 生命現象の科学[2] 現代物理学[2] 統計学[2] 解析学[2]※13 歴史学[2] 文学[2]※13 国際関係論[2] 日本国憲法[2] 音楽[2] 美術[2] 以下、2000-01年入学者まで開講 実践の医学[2] TOEFL[1] | 一般教育科目 選 必 修 初級ドイツ語会話[2] Advanced English Reading[2] 有機化学と生命[2] 生命現象の科学[2] 現代物理学[2] 総合数学[2] 歴史学[2] 日本文学[2] 国際関係論[2] 日本国憲法[2] 音楽[2] 美術[2] |

授業科目名 [単位数]

| | 2019（平成31）年 |
|--------|---|
| | スポーツ健康科学総論[4] キャリアデザイン[2] 文章表現法[2]※3 ゼミナール（含卒業論文） |
| 必修 | 必 Oral EnglishⅠ[2] 修 Oral EnglishⅡ[2] TOEFL・IELTSⅠ[1]※7 TOEFL・IELTSⅡ[1]※7 Introduction to TOEFLⅠ[1] Introduction to TOEFLⅡ[1] Basic English ConversationⅠ[1] Basic English ConversationⅡ[1] Advanced English for Global Oral Communication[2] Advanced English for Global Written Communication[2] ドイツ語Ⅰ[1] ドイツ語Ⅱ[1] フランス語Ⅰ[1] フランス語Ⅱ[1] |
| 外国語科目 | 選 必 修 基礎の数学[2] 力学の基礎[2] 一般化学[2] 細胞の生物学[2] 統計学[2] 心とからだの哲学[2] 社会学[2] 心理学[2] 経済学[2] 日本国憲法[2]※11 4学部共通講座： 新しい世界を拓いた人々[2]※12 初級ドイツ語会話[2] Advanced English Reading[2] 有機化学と生命[2] 生命現象の科学[2] 現代物理学[2] |
| 一般教育科目 | 選 必 修 総合数学[2] 歴史学[2] 日本文学[2] 国際関係論[2] 法学[2]※11 音楽[2] 美術[2] |

スポーツ健康科学部の開設時は、必修科目と外国語科目区分以外の科目について、一般教育科目をAグループ（自然科学系）、Bグループ（人文・社会科学系）およびCグループ（自由選択）に、運動実技理論・実習科目をA群（個人種目の基礎）、B群（球技の基礎）、C群（動きづくりと軽スポーツ等）およびD群（専門種目）に、各学科の科目をDグループ（学科の必修科目に準ずるもの）、Eグループ（専門性の理解を強化するもの）、Fグループ（他学科開講科目を含み、学部としての専門性を高めるもの）およびGグループ（教職科目のうち教科に関する一部の科目）に区分した。

※1 「総合講座」は、2006年から「総合講座（前期）」と「総合講座（後期）」の各2単位科目に分割、2015年から総合講座Ⅰと総合講座Ⅱに名称変更し、2018年入学者までで閉講

※2 2000年に「生きる意志の倫理学」を「生命の倫理学」に名称変更し、2018年入学者までで閉講

※3 2019年から「国語表現法」を「文章表現法」に名称変更

※4 1997年に「英語Ⅰ」を「総合英語Ⅰ」に、「英語Ⅱ」を「総合英語Ⅱ」に、「英語Ⅲ」を「English Reading」に、「英語Ⅳ」を「English Writing」に名称変更

※5 「English Reading」と「English Writing」は、2002年から1単位科目に、2003年から(X・Y)を付記した名称に変更、2015年からそれぞれⅠとⅡの1単位科目に分割するとともに選択科目へ変更、2018年入学者までで閉講

※6 2002年から「TOEIC Reading」と「TOEIC Listening」を開講、2003年から(L・H)を付記した名称に変更、2014年入学者までで閉講

※7 2015年から「TOEFL・IELTSⅠ」と「TOEFL・IELTSⅡ」を開講

※8 2000年に「初級英会話」から名称変更した「Basic English Conversation」は、2002年にⅠ単位科目に変更、2003年から(X・Y)を付記した名称に変更、2015年からⅠとⅡの各1単位科目に分割

※9 「中級英会話」は、2000年に「Advanced Oral English」に変更、2018年入学者までで閉講

※10 2019年から、「ドイツ語入門」を「ドイツ語Ⅰ」と「ドイツ語Ⅱ」に、「初級フランス語会話」を「フランス語Ⅰ」と「フランス語Ⅱ」に分割

※11 2002年から「統計学」を選択必修科目に、2019年から「日本国憲法」を選択必修科目に「法学」を選択科目に変更

※12 2010年から「4学部共通講座：新しい世界を拓いた人々」を開講

※13 1997年から「上級英語」を「Advanced English Reading」に、2000年から「解析学」を「総合数学」に「文学」を「日本文学」に名称変更

学部共通開講科目（運動実技実習科目）

| | 1993（平成5）年 | 2002（平成14）年 | 2019（平成31）年 |
|------|---|--|--|
| | 陸上運動[2] 水泳[1] 器械運動[2] 柔道[2] 剣道[2] ダンス[2] ⇒2002年から科目区分変更 体操[1] ⇒体づくり運動[1]・2000年～ ⇒2002年から科目区分変更 | 陸上運動[2] 水泳[2] 器械運動[2] 柔道[2] 剣道[2] | 陸上運動[1] 水泳[1] 器械運動[1] 柔道Ⅰ・剣道Ⅰ[1] 柔道Ⅱ[1] 剣道Ⅱ[1] |
| A群 | サッカー[2] バスケットボール[2] ハンドボール[2] バレーボール[2] テニス[2] ラグビー[2] | サッカー[2] バスケットボール[2] ハンドボール[2] ⇒2009-10年入学者は閉講 バレーボール[2] テニス[2] ラグビー[2] ⇒2009-10年入学者は閉講 | サッカー[1] バスケットボール[1] ハンドボール[1] バレーボール[1] テニス[1] ソフトボール[1] 体づくり運動[1] |
| B群 | ギムナスティック[1] 創作ダンス[2] エアロビックエクササイズ[1] フォークダンス[1] レクリエーションスポーツ[1] ゴルフ[1] キャンプ[1] スキー[1] | 運動実技実習科目 選 必 修 ギムナスティック[1] ⇒2009年入学者までで閉講 ダンス[2] 創作ダンス[1] ⇒2018年入学者までで閉講 エアロビックエクササイズ[1] フォークダンス[1] ⇒2018年入学者までで閉講 レクリエーションスポーツ[1] ゴルフ[1] ⇒2018年入学者までで閉講 キャンプ[1] スキー[1] 海浜実習[1] | 運動実技実習科目※2 ダンス[1] エアロビックエクササイズ[1] レクリエーションスポーツ[1] キャンプ[1] スキー[1] 海浜実習[1] |
| C群 | 上級陸上競技Ⅰ[1] ⇒上級陸上運動[1]・1997年～ 上級陸上競技Ⅱ[1] ⇒陸上競技[1]・1997年～ 上級体操競技Ⅰ[1] ⇒上級器械運動[1]・1997年～ | | |
| D群※1 | | | |

| |
|-------------------------------|
| 上級体操競技Ⅱ[1] ⇒体操競技[1]・1997年～ |
| 上級水泳Ⅰ[1] |
| 上級水泳Ⅱ[1] |
| 上級柔道Ⅰ[1] |
| 上級柔道Ⅱ[1] |
| 上級剣道Ⅰ[1] |
| 上級剣道Ⅱ[1] |
| 上級バレーボールⅠ[1] |
| 上級バレーボールⅡ[1] |
| 上級バスケットボールⅠ[1] |
| 上級バスケットボールⅡ[1] |
| 上級サッカーⅠ[1] |
| 上級サッカーⅡ[1] |
| 上級テニスⅠ[1] |
| 上級テニスⅡ[1] |
| 上級ラグビーⅠ[1] |
| 上級ラグビーⅡ[1] |
| 上級ハンドボールⅠ[1] |
| 上級ハンドボールⅡ[1] |

※1 2002年から上級の運動実技を廃止、スポーツ科学科の開講科目に、各種目のコーチング論と専門運動実技実習を開講
 ※2 スポーツ科学科と健康科学科では、2019年から学科開講科目一覧に運動実技実習科目を配置

| |
|---------------------------|
| スポーツ施設・用具論[2] |
| スポーツ指導論[2] |
| 運動教材演習[2] |
| 医学概論[2] リハビリテーション概論[2] |
| レクリエーション概論[2] |
| スポーツカウンセリング[2] |
| スポーツ運動学[2] |
| スポーツ動作分析論[2] |
| 体育原理[2] |
| 体育史[2] |

| |
|-----------------------|
| 剣道のコーチング論[2] |
| 専門運動実技実習(陸上競技)[2] |
| 専門運動実技実習(水泳競技)[2] |
| 専門運動実技実習(体操競技)[2] |
| 専門運動実技実習(柔道)[2] |
| 専門運動実技実習(剣道)[2] |
| 専門運動実技実習(サッカー)[2] |
| 専門運動実技実習(バレーボール)[2] |
| 専門運動実技実習(バスケットボール)[2] |
| 専門運動実技実習(ラグビー)[2] |
| 専門運動実技実習(ハンドボール)[2] |
| コーチングインターンシップ[2] |
| ダンス系の指導論[2] |
| 野外教育論[2] |
| スポーツ情報分析論[2] |
| 現代スポーツ史[2] |
| スポーツ医学(内科系)[2] |
| スポーツ医学(整形外科)[2] |
| 発育発達[2] |
| 老化と運動[2] |

| |
|---------------------|
| 生理学実験実習[2] |
| 栄養・生化学実験実習[2] |
| スポーツバイオメカニクス実験実習[2] |
| 測定と評価実習[2] |
| 機能解剖学実習[2] |
| スポーツコーチング総論[2] |
| スポーツ運動学[2] |
| スポーツ競技の生理学[2] |

| |
|-----------------------|
| トレーニング科学総合実習[2] |
| テーピング及びマッサージ実習[2] |
| 陸上競技「トラック」のコーチング論[2] |
| 陸上競技「フィールド」のコーチング論[2] |
| 水泳競技のコーチング論[2] |
| 体操競技のコーチング論[2] |
| バレーボールのコーチング論[2] |
| バスケットボールのコーチング論[2] |
| サッカーのコーチング論[2] |
| ラグビーのコーチング論[2] |
| ハンドボールのコーチング論[2] |
| 柔道のコーチング論[2] |
| 剣道のコーチング論[2] |
| 専門運動実技実習(陸上競技)[2] |
| 専門運動実技実習(水泳競技)[2] |
| 専門運動実技実習(体操競技)[2] |
| 専門運動実技実習(柔道)[2] |
| 専門運動実技実習(剣道)[2] |
| 専門運動実技実習(バレーボール)[2] |
| 専門運動実技実習(バスケットボール)[2] |
| 専門運動実技実習(ラグビー)[2] |
| 専門運動実技実習(ハンドボール)[2] |
| コーチングインターンシップ[2] |
| ダンス指導論[2] |
| 野外教育論[2] |
| スポーツ情報分析論[2] |
| 現代スポーツ史[2] |
| スポーツ医学(内科系)[2] |
| スポーツ医学(整形外科)[2] |
| 発育発達[2] |
| 生理学[2] |

| |
|---------------------|
| スポーツ医学(整形外科)[2] |
| 運動生理学実験実習[2] |
| スポーツと栄養[2] |
| 発育発達[2] |
| 老化と運動[2] |
| 運動処方演習[2] |
| 生理学実験実習[2] |
| 栄養・生化学実験実習[2] |
| スポーツバイオメカニクス実験実習[2] |
| 測定と評価実習[2] |
| 機能解剖学実習[2] |
| 救急法実習[2] |
| スポーツコーチング総論[2] |
| スポーツ運動学[2] |
| スポーツ競技の生理学[2] |

スポーツ科学科開講科目

| 1993(平成5)年 | 2002(平成14)年 | 2019(平成31)年 | 授業科目名[単位数] |
|--------------------------------|--------------------------|--------------------------|------------|
| スポーツ医学Ⅰ[2] | 機能解剖学[2] | 運動生理学Ⅰ[2] | 必修 |
| スポーツ医学Ⅱ[2] | 運動生理学Ⅱ[2] | スポーツ心理学[2] | |
| 運動生理学[4] | 必修 スポーツトレーニング総論[2] | 体力の測定と評価[2] | 必修 |
| スポーツ心理学[2] | スポーツ外傷・障害学[2] | スポーツ傷害の予防とリハビリテーション実習[2] | |
| 必修 バイオメカニクス[2] | 体カトレーニング論(含実習)[3] | ゼミナール(含卒業論文)[8] | 必修 |
| 体力の測定と評価(含実習)[3] | スポーツ社会学[2] | 生涯スポーツ論[2] | |
| 解剖学(含実習)[3] | マネジメント総論[2] | | 選択必修 |
| 生理学[2] | 健康科学概論[2] | 医学概論Ⅰ[2] | |
| スポーツ外傷の予防と救急法[2] | リハビリテーション概論[2] | | 選択必修 |
| 体カトレーニング論(含実習)[3] | 体育科教育法[2] | 道徳教育の研究[2] | |
| ゼミナール[8] | 選 特別活動[2] | 総合演習[2] | 選択必修 |
| 発育発達と老化[4] | 択 体育原理[2] | 学校体育経営管理学[2] | |
| バイオメカニクス実習[2] | コンピュータ実習[2] | | 必修 |
| 運動生理学実習[2] | | | |
| 生理学実習[2] | 必修 スポーツコーチング総論[2] | 生理学[2] | 必修 |
| 運動生化学[2] | 必修 スポーツ運動学[2] | 運動生化学[2] | |
| D グループ コーチ学Ⅰ[2] | 必修 スポーツ競技の生理学[2] | 必修 スポーツバイオメカニクス[2] | 必修 |
| 必修 コーチ学Ⅱ[2] | 必修 スポーツ心理学実験実習[2] | 必修 スポーツ医学(内科系)[2] | |
| | 必修 トレーニング科学総合実習[2] | 必修 スポーツ医学(整形外科)[2] | 必修 |
| | 必修 テーピングおよびマッサージ実習[2] | 必修 運動生理学実験実習[2] | |
| 必修 スポーツトレーニング論[2] | 必修 陸上競技「トラック」のコーチング論[2] | 必修 スポーツと栄養[2] | 必修 |
| | 必修 陸上競技「フィールド」のコーチング論[2] | 必修 発育発達[2] | |
| 必修 スポーツ生理学[2] | 必修 水泳競技のコーチング論[2] | 必修 老化と運動[2] | 必修 |
| | 必修 体操競技のコーチング論[2] | 必修 運動と環境[2] | |
| 必修 スポーツと栄養[2] | 必修 バレーボールのコーチング論[2] | 必修 運動処方演習[2] | 必修 |
| | 必修 バスケットボールのコーチング論[2] | 必修 動作分析法演習[2] | |
| 必修 スポーツ傷害の予防とリハビリテーション(含実習)[3] | 必修 サッカーのコーチング論[2] | | 必修 |
| 必修 スポーツ選手のメンタルトレーニング[2] | 必修 ラグビーのコーチング論[2] | | |
| 必修 スポーツ科学総合実習[2] | 必修 ハンドボールのコーチング論[2] | | 必修 |
| | 必修 柔道のコーチング論[2] | | |
| 必修 近代スポーツ史[2] | | | 必修 |
| 必修 情報科学論・コンピュータ実習[2] | | | |
| 必修 E グループ スポーツ社会学[2] | | | 必修 |
| 必修 スポーツの事故と判例[2] | | | |

スポーツ科学科では、2002年に「コーチング科学コース」と「スポーツ医科学コース」を設け、学生は2年次からコース選択を行うこととなった。また、法改正による教職課程の再課程認定に合わせて、2019年からは運動実技科目などの教職関連科目の大幅な見直しを行った。

スポーツマネジメント学科開講科目

| 1993 (平成5) 年 |
|---|
| 体育・スポーツ経営学[4] コミュニケーション論Ⅰ[2] コミュニケーション論Ⅱ[2] スポーツマーケティング[4] スポーツチームのグループダイナミクス[2] 余暇社会論[2] 社会心理学[2] 体育・スポーツの調査研究[2] レクリエーション概論[2] 情報科学論・コンピューター実習[2] 卒業研究[8] |
| スポーツマーケティング実習[2] マスコミュニケーション論[2] メディア論[2] スポーツジャーナリズム論[2] スポーツ社会学[2] スポーツチームのグループダイナミクス実習[1] 体育・スポーツ政策論[2] 体育・スポーツ行財政論[2] スポーツの事故と判例[2] |
| スポーツ施設・用具論[2] スポーツ心理学[2] |
| スポーツイベントの企画運営(含実習)[3] E グループ 財務管理演習[2] 簿記・会計演習[2] スポーツ放送論[2] スポーツビジネス論[2] 地域メディア論[2] 視聴覚教育[2] |
| 近代スポーツ史[2] |
| コーチ学Ⅰ[2] |
| F グループ スポーツ運動学[2] スポーツトレーニング論[2] スポーツ医学Ⅰ[2] 発育発達と老化[4] 運動処方(含実習)[3] 解剖学(含実習)[3] 生理学[2] |

| 2002 (平成14) 年 |
|--|
| マネジメント総論[2] スポーツマネジメント論[2] スポーツマーケティングの基礎[2] スポーツマーケティング論[2] 経営組織論[2] 社会心理学[2] メディア概論[2] スポーツ社会学[2] 生涯スポーツ論[2] 卒業研究[8] |
| スポーツマネジメント特別講義[2] 経営学[2] 組織開発論[2] スポーツビジネス論[2] イベント概論[2] スポーツビジネスコントラクト[2] スポーツ用品論[2] 財務管理論[2] スポーツイベントの企画運営[2] メディアコミュニケーション論[2] メディア経営論[2] マスコミュニケーション論[2] 広告論[2] 情報ネットワーク社会論[2] スポーツジャーナリズム論[2] スポーツコンテンツ制作演習[2] |
| 余暇社会論[2] スポーツ施設マネジメント[2] スポーツ行財政論[2] スポーツ政策論[2] スポーツと法[2] |
| コンピュータ実習[2] スポーツマーケティング実習[2] スポーツイベントの企画運営実習[1] スポーツマネジメント・インターンシップ[2] 組織開発実習[2] スポーツの調査研究演習[2] スポーツ外傷・障害学[2] スポーツと栄養[2] スポーツトレーニング総論[2] |
| 健康科学概論[2] 医学概論Ⅰ[2] リハビリテーション概論[2] |
| スポーツ心理学[2] スポーツ運動学[2] 生理学[2] 衛生・公衆衛生学総論[2] |

| 2019 (平成31) 年 |
|--|
| マネジメント総論[2] スポーツマネジメント論[2] マーケティングの基礎[2] スポーツマーケティング論[2] 経営組織論[2] 社会心理学[2] メディア概論[2] スポーツ社会学[2] 生涯スポーツ論[2] |
| スポーツマネジメント特別講義[2] 経営学[2] 組織開発論[2] スポーツビジネス論[2] イベント概論[2] スポーツビジネスコントラクト[2] |
| 財務管理論[2] スポーツイベントの企画運営[2] メディア経営論[2] マスコミュニケーション論[2] 広告論[2] 情報ネットワーク社会論[2] スポーツジャーナリズム論[2] スポーツコンテンツ制作演習[2] |
| 余暇社会論[2] スポーツ施設マネジメント[2] スポーツ行財政論[2] スポーツ政策論[2] スポーツと法[2] スポーツボランティア[2] |
| コンピュータ実習[2] スポーツマーケティング実習[2] スポーツイベントの企画運営実習[1] スポーツマネジメント・インターンシップ[2] 組織開発実習[2] スポーツの調査研究演習[2] |
| スポーツ心理学[2] スポーツ運動学[2] 生理学[2] 衛生・公衆衛生学総論[2] 運動生理学Ⅰ[2] 学校体育経営管理学[2] |

スポーツマネジメント学科では、2002年に開講科目と履修区分の大幅な見直しを行った。同学科は教職課程ではないため、2019年のカリキュラムの変更は開講科目の精選に止まっている。

健康学科開講科目

| 1993 (平成5) 年 |
|---|
| 衛生・公衆衛生学[4] 生涯健康論[2] 精神保健論[2] 健康社会学[2] 人間生態学[2] 環境保健学[2] 健康教育学[2] 心身障害者教育[2] 健康運動指導法・実習[2] 保健科学総合実習[5] 情報科学論・コンピューター実習[2] ゼミナール[8] |
| 心身障害の医学[2] 心身障害者心理[2] リハビリテーション概論[2] カウンセリング[2] |
| D グループ 健康管理学[2] 老年学[2] 心身障害者指導法[4] 保健行政[2] 免疫学概論[2] 医学概論[2] 機器分析[2] 心身障害教育実習[3] |
| E グループ 地域保健学(含実習)[3] 労働衛生学(含実習)[3] 学校保健学(含実習)[3] |
| 生理学[2] 解剖学(含実習)[3] |
| F グループ 運動生理学[4] 運動生理学実習[2] 運動生化学[2] スポーツ医学Ⅰ[2] 発育発達と老化[4] コミュニケーション論Ⅰ[2] |

| 2002 (平成14) 年 |
|---|
| 衛生・公衆衛生学総論[2] 医学概論Ⅰ[2] 健康科学概論[2] 社会福祉原論Ⅰ[2] 精神保健学Ⅰ[2] 人間生態学[2] 健康社会学[2] 心身障害者教育[2] 環境保健学[2] 健康教育学[2] ゼミナール(含卒業論文)[8] |
| 衛生・公衆衛生学各論[2] 地域保健学[2] 健康統計学[2] 地域福祉論[2] 免疫学概論[2] 健康運動指導法[2] 医学概論Ⅱ[2] 社会福祉原論Ⅱ[2] 精神医学[4] 学校保健学[2] 精神保健学Ⅱ[2] 産業保健学[2] 精神保健福祉論[6] 労働基準法[2] 精神保健福祉援助技術総論[4] 国際保健[2] 精神保健福祉援助演習[4] 運動生理学Ⅰ[2] 精神科リハビリテーション学[4] 機能解剖学[2] リハビリテーション概論[2] 発育発達[2] |
| 臨床心理学[2] スポーツ医学(内科系)[2] カウンセリング[2] スポーツ医学(整形外科)[2] 心身障害者の医学[2] 学校保健学実習[2] 心身障害者の心理[2] 地域保健学実習[2] 心身障害者指導法[4] 産業保健学実習[2] 老年学[2] 環境保健学実習[2] 生涯健康論[2] 健康教育学実習[2] 健康管理学[2] 心身障害者教育実習[3] 健康栄養論[2] 精神保健福祉援助実習[6] 保健行政[2] 健康運動指導法実習[2] |
| スポーツ外傷・障害学[2] スポーツと栄養[2] スポーツトレーニング総論[2] |
| スポーツ社会学[2] 生涯スポーツ論[2] マネジメント総論[2] |
| 体育科指導法[2] 体育原理[2] 道徳教育の研究[2] 学校体育経営管理学[2] 特別活動[2] コンピュータ実習[2] 総合演習[2] |

| 2019 (平成31) 年 |
|---|
| 衛生・公衆衛生学総論[2] 医学概論[2] 健康科学概論[2] 社会福祉原論Ⅰ[2] 精神保健学Ⅰ[2] 障害者教育総論[2] 健康教育学[2] 健康運動指導論[2] 臨床心理学[2] |
| 陸上運動[1] 水泳[1] 器械運動[1] ダンス[1] |
| 柔道Ⅰ・剣道Ⅰ[1] 柔道Ⅱ[1] 剣道Ⅱ[1] |
| サッカー[1] バスケットボール[1] ハンドボール[1] バレーボール[1] テニス[1] ソフトボール[1] |
| 体づくり運動[1] エアロビックエクササイズ[1] レクリエーションスポーツ[1] キャンプ[1] スキー[1] 海浜実習[1] |
| 健康統計学[2] 看護学概説[2] 免疫学概論[2] 看護学基礎演習[2] 精神医学Ⅰ[2] 健康栄養論[2] 精神保健学Ⅱ[2] 地域福祉論Ⅰ[2] 精神保健福祉論[6] 地域福祉論Ⅱ[2] 精神保健福祉制度論[4] 社会保障論Ⅰ[2] 精神保健福祉援助技術総論[4] 社会保障論Ⅱ[2] ソーシャルワーク論[2] 公的扶助論[2] |
| 精神保健福祉援助技術各論[4] 保健医療サービス[2] 精神保健福祉援助演習[4] 権利擁護と成年後見制度[2] ソーシャルワーク演習[1] 福祉行政と福祉計画[2] 精神科リハビリテーション学[4] 社会福祉原論Ⅱ[2] リハビリテーション概論[2] 学校保健学[2] |
| 知的障害者の心理[2] 労働基準法[2] 肢体不自由者の心理[2] 生理学[2] 病弱者の看護[2] 運動生理学Ⅰ[2] 障害者の病理と整理[2] 機能解剖学[2] 障害者の進路支援[2] 発育発達[2] |
| 知的障害者指導法[2] スポーツ医学(内科系)[2] 肢体不自由者指導法[2] スポーツ医学(整形外科)[2] 病弱者指導法[2] 精神保健福祉援助実習[6] 視覚障害者の教育[2] 精神保健福祉援助実習指導Ⅰ[1] 聴覚障害者の教育[2] 精神保健福祉援助実習指導Ⅱ[1] 発達障害と重度・重複 精神保健福祉援助実習 障害者の教育[2] 指導Ⅲ[1] 養護概説[2] 健康運動指導法実習[2] 看護の基礎[2] 看護学実習[2] |
| スポーツ外傷・障害学[2] 保健体育科教育法Ⅲ[2] スポーツ社会学[2] 保健体育科教育法Ⅳ[2] 体育原理[2] 特別支援教育論[2] |
| 学校体育経営管理学[2] 健康相談[2] コンピュータ実習[2] 道徳の理論及び指導法[2] 保健体育科教育法Ⅰ[2] 特別活動の指導法[2] 保健体育科教育法Ⅱ[2] |

健康学科では、2002年に開講科目と履修区分の大幅な見直しを行って以降、2004年には精神保健福祉士(受験資格)、2008年には養護教諭の課程認定を受けるなど様々な科目を開設してきた。また、2007年(養護学校から特別支援学校への変更)と2019年(教職課程の再課程認定)には、教職課程に関する法改正に伴ってカリキュラムの変更が行われた。

体育学研究科・スポーツ健康科学研究科

在籍者数

本資料は事業報告書に掲載されている内容を纏めたものである。

(単位：人)

| 区分 | 年度 | | 昭和63 | 平成元 | 平成2 | 平成3 | 平成4 | 平成5 | 平成6 | 平成7 | 平成8 | 平成9 | 平成10 | 平成11 | 平成12 | 平成13 | 平成14 | | 平成15 | 平成16 | 平成17 | 平成18 | 平成19 | 平成20 | 平成21 | 平成22 | 平成23 | 平成24 | 平成25 | 平成26 | 平成27 | 平成28 | 平成29 | 平成30 | 令和元 | 令和2 | 令和3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---------------------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|--|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----|----|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 内 | 外 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | 内 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 女子 | 男子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | 女子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 5.1現在 | 4.1現在 | 4.1現在 | 4.1現在 | 4.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.30現在 | 5.30現在 | 5.30現在 | 5.30現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | | 5.1現在 | 5.1現在 | 6.1現在 | 6.1現在 | 6.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | 5.1現在 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大学院 | 体育学研究科(修士課程) | 1年生 | 17 | 0 | 7 | 13 | 12 | 16 | 11 | 2 | 17 | 3 | 25 | 6 | 18 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2年生 | 12 | 3 | 19 | 11 | 15 | 16 | 2 | 14 | 2 | 14 | 2 | 20 | 3 | 28 | 7 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 計 | 29 | 3 | 26 | 24 | 27 | 32 | 3 | 25 | 4 | 31 | 5 | 45 | 9 | 46 | 11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | スポーツ健康科学研究科(博士前期課程) | 1年生 | | | | | | | | | | | | | | | | | 20 | 5 | 17 | 0 | 20 | 4 | 18 | 5 | 26 | 5 | 24 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2年生 | | | | | | | | | | | | | | | | | 21 | 5 | 23 | 5 | 21 | 0 | 20 | 4 | 20 | 4 | 31 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 計 | | | | | | | | | | | | | | | | | 41 | 10 | 40 | 5 | 41 | 4 | 38 | 9 | 46 | 9 | 55 | 11 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | スポーツ健康科学研究科(博士後期課程) | 1年生 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 2年生 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 3年生 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 計 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 0 | 9 | 3 | 13 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 5 | 1 | 4 | 1 | 6 | 2 | 7 | 3 | 3 | 0 | 7 | 0 | 6 | 2 | 10 | 3 | 7 | 3 | 9 | 3 | 8 | 1 | 13 | 5 | 12 | 5 | 16 | 9 | 10 | 2 | 11 | 4 | 21 | 6 | 18 | 7 | 14 | 4 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 2 | 5 | 1 | 4 | 1 | 6 | 2 | 7 | 3 | 3 | 0 | 7 | 0 | 6 | 2 | 9 | 3 | 7 | 3 | 10 | 4 | 8 | 1 | 13 | 5 | 12 | 5 | 16 | 9 | 9 | 2 | 10 | 4 | 19 | 6 | 18 | 7 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 4 | 2 | 6 | 1 | 6 | 1 | 5 | 1 | 7 | 2 | 7 | 3 | 3 | 0 | 7 | 0 | 7 | 2 | 10 | 4 | 6 | 2 | 11 | 5 | 9 | 2 | 13 | 5 | 15 | 6 | 20 | 9 | 9 | 2 | 15 | 4 | 24 | 8 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 | 5 | 15 | 3 | 16 | 4 | 18 | 6 | 17 | 5 | 17 | 3 | 16 | 2 | 23 | 5 | 23 | 8 | 26 | 10 | 24 | 7 | 32 | 11 | 34 | 12 | 41 | 19 | 41 | 17 | 40 | 15 | 40 | 12 | 52 | 17 | 56 | 19 |

※研究科定員増 平成18年度 スポーツ健康科学研究科(博士前期課程) 21名→61名
 ※研究科定員増 平成22年度 スポーツ健康科学研究科(博士後期課程) 4名→10名
 ※平成12年度から博士前期課程、平成11年度以前は修士課程

体育学部・スポーツ健康科学部

体育学研究科・スポーツ健康科学研究科

入学者数 (単位：人)

Table with columns for year (昭和3年度 to 令和3年度) and rows for departments (体育学部, スポーツ健康科学部) and research institutes (体育学研究科, etc.).

※学部定員増 平成元年度 体育学部140名(体育学科100名・健康学科40名)→体育学部280名(体育学科200名・健康学科80名)
※学部改組・改称 平成5年度 スポーツ健康科学部280名(スポーツ科学科120名・スポーツマネージメント学科80名・健康学科80名)
※学部定員変更 平成13年度 スポーツ健康科学部280名(スポーツ科学科140名・スポーツマネージメント学科70名・健康学科70名)
※学部定員増 平成17年度 スポーツ健康科学部330名(スポーツ科学科190名・スポーツマネージメント学科70名・健康学科70名)
※学部定員増 平成29年度 スポーツ健康科学部410名(スポーツ科学科250名・スポーツマネージメント学科80名・健康学科80名)
※学部改組 令和3年度 スポーツ健康科学部600名(スポーツ健康科学科600名)
※研究科定員増 平成18年度 スポーツ健康科学研究科(博士前期課程)21名→61名
※研究科定員増 平成22年度 スポーツ健康科学研究科(博士後期課程)4名→10名

【再掲】体育学部

以下は「順天堂大学体育学部三十年のあゆみ」に掲載されている資料(昭和26年度から昭和56年度)に
さくらキャンパス移転(昭和63年度)以前のデータを学生名簿及び事業報告書から追記したのもである。

志願・入学者数の推移 (単位：人)

Table showing application and enrollment numbers for the department from昭和27 to昭和62.

学生数の推移

Table showing the number of students from昭和26 to昭和62, categorized by faculty (体育, 医進).

教職員数

本資料は事業報告書に掲載されている内容を纏めたものである。

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 助教授 | 講師 | 助手 | 研究助手 | — | 講師無給 | — | 助手無給 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 |
|---------|------|-----------|------------------------|---------|----------|--------|--------|---|------|---|---------|---------|----------------|--------|------|
| 昭和63年3月 | 1988 | 体育学部(含医進) | 専任 25 兼任 名2、客1 | 27 0 | 28 24 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 1 | 0 14 | 0 0 | 黒田善雄 | 黒田善雄 |
| 平成元年3月 | 1989 | 体育学部(含医進) | 専任 24 兼任 名3、客1 | 26 0 | 28 28 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 15 | 0 0 | | |
| 平成2年3月 | 1990 | 体育学部(含医進) | 専任 23 兼任 名5、客1 | 26 0 | 26 31 | 6 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 15 | 0 0 | | |
| 平成3年3月 | 1991 | 体育学部(含医進) | 専任 23 兼任 名6、客1 | 30 0 | 23 28 | 8 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 11 | 0 0 | | |
| 平成4年3月 | 1992 | 体育学部(含医進) | 専任 21 兼任 名8、客2 | 29 0 | 23 32 | 7 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 15 | 0 0 | | |
| 平成5年3月 | 1993 | 体育学部(含医進) | 専任 27 兼任 名10、客1 | 33 0 | 13 30 | 7 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 14 | 0 0 | | |
| 平成6年3月 | 1994 | 体育学部(含医進) | 専任 14 兼任 名12、客1 | 21 0 | 10 19 | 2 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 17 | 0 0 | | |
| | | スポーツ健康科学部 | 専任 14 兼任 0 | 11 0 | 5 15 | 6 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 0 | 0 0 | | |
| | | 合計 | 専任合計 28 兼任合計 名12、客1 | 32 0 | 15 34 | 8 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 17 | 0 0 | | |
| 平成7年3月 | 1995 | 体育学部 | 専任 3 兼任 名10、客1 | 7 0 | 1 14 | 0 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 9 | 0 0 | | |
| | | スポーツ健康科学部 | 専任 21 兼任 0 | 17 0 | 9 22 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 9 | 0 0 | | |
| | | 合計 | 専任合計 24 兼任合計 名10、客1 | 24 0 | 10 36 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 18 | 0 0 | | |
| 平成8年3月 | 1996 | 体育学部 | 専任 0 兼任 名10、客1 | 1 0 | 1 13 | 0 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 8 | 0 0 | | |
| | | スポーツ健康科学部 | 専任 24 兼任 0 | 23 0 | 9 26 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 8 | 0 0 | | |
| | | 合計 | 専任合計 24 兼任合計 名10、客1 | 24 0 | 10 39 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 16 | 0 0 | | |
| 平成9年3月 | 1997 | スポーツ健康科学部 | 専任 24 兼任 名12 | 23 0 | 9 41 | 6 0 | 0 0 | | 0 | 1 | 0 18 | 0 0 | 義北 純青 明森 一郎 | 青木 純一郎 | |

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 助教授 | 講師 | 助手 | 研究助手 | — | 講師無給 | — | 助手無給 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 |
|---------|------|-----------|--------------------|---------|----------|--------|--------|---|------|---|---------|---------|---------|-------------|--------|
| 平成10年3月 | 1998 | スポーツ健康科学部 | 専任 22 兼任 名14 | 24 0 | 11 36 | 6 0 | 0 0 | | 0 | | 0 0 | 0 16 | 0 0 | 北森 義明 | 青木 純一郎 |
| 平成11年3月 | 1999 | スポーツ健康科学部 | 専任 22 兼任 名14 | 24 0 | 11 46 | 4 0 | 0 0 | | 0 | | 0 1 | 0 0 | 8 0 | | |
| 平成12年3月 | 2000 | スポーツ健康科学部 | 専任 23 兼任 名16 | 27 0 | 7 47 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 8 | 0 0 | 0 8 | | |
| 平成13年3月 | 2001 | スポーツ健康科学部 | 専任 23 兼任 名19 | 27 0 | 5 47 | 6 0 | 0 0 | | 0 | | 0 10 | 0 0 | 0 10 | | |
| 平成14年3月 | 2002 | スポーツ健康科学部 | 専任 22 兼任 名19、客3 | 29 0 | 4 51 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 12 | 0 0 | 0 18 | 青木 純一郎 | 青木 純一郎 |
| 平成15年3月 | 2003 | スポーツ健康科学部 | 専任 23 兼任 名21、客3 | 26 0 | 6 51 | 5 0 | 0 0 | | 0 | | 0 17 | 0 0 | 0 25 | | |
| 平成16年3月 | 2004 | スポーツ健康科学部 | 専任 25 兼任 名22、客4 | 25 0 | 9 54 | 3 0 | 0 0 | | 0 | | 0 14 | 0 0 | 0 34 | | |
| 平成17年3月 | 2005 | スポーツ健康科学部 | 専任 22 兼任 名21、客5 | 23 0 | 10 54 | 4 0 | 0 0 | | 0 | | 0 21 | 0 0 | 0 29 | 啓澤 木 祐 柁 | 継武 米田 |

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 助教授 | 講師 | 助手 | — | — | 非常勤講師 | — | 非常勤助手 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 |
|---------|------|-----------|--------------------|----------|--------|--------|---|---|---------|---|---------|---------|---------|-------|-------|
| 平成18年3月 | 2006 | スポーツ健康科学部 | 専任 22 兼任 名21、客4 | 25 客1 | 9 0 | 3 0 | | | 0 51 | | 0 19 | 0 0 | 0 23 | 澤木 啓祐 | 米田 継武 |
| 平成19年3月 | 2007 | スポーツ健康科学部 | 専任 20 兼任 名21、客7 | 27 客3 | 9 0 | 6 0 | | | 0 47 | | 0 21 | 0 0 | 0 27 | | |

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 先任准教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 | 非常勤講師 | 非常勤助教 | 非常勤助手 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 |
|---------|------|-------------|---------------------|---------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|---------|---------|---------|-------|-------|
| 平成20年3月 | 2008 | スポーツ健康科学部 | 専任 23 兼任 名21、客7 | 26 4 | 3 0 | 3 0 | 5 0 | 2 0 | 0 55 | 0 2 | 0 19 | 0 0 | 0 30 | 澤木 啓祐 | 米田 継武 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 客3 | | | | | | 6 | 0 | 2 | 0 | 0 | | |
| | | 合計 | 専任 23 兼任 名21、客10 | 26 4 | 3 0 | 3 0 | 5 0 | 2 0 | 0 61 | 0 2 | 0 21 | 0 0 | 0 30 | | |
| 平成21年3月 | 2009 | スポーツ健康科学部 | 専任 26 兼任 名19、客13 | 22 5 | 8 0 | 0 0 | 4 0 | 4 0 | 0 56 | 0 4 | 0 13 | 0 0 | 0 0 | 澤木 啓祐 | 米田 継武 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 客4 | | | | | | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | |
| | | 合計 | 専任 26 兼任 名19、客17 | 22 5 | 8 0 | 0 0 | 4 0 | 4 0 | 0 60 | 0 4 | 0 13 | 0 0 | 0 0 | | |

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 先任准教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 | 非常勤講師 | 非常勤助教 | 非常勤助手 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 | | | |
|-------------|------|-------------|----|--------|-----|-----|----|----|-------|-------|-------|---------|-----|------|------|------|------|---|
| 平成22年 3月 | 2010 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 25 | 25 | 5 | 0 | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 野川春夫 | 形本静夫 | | | |
| | | | 兼任 | 名18客14 | 0 | 客6 | 0 | 0 | 0 | 62 | 6 | 12 | 0 | | | 0 | | |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 兼任 | 客3 | 0 | 客1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 25 | 25 | 5 | 0 | 3 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名18客17 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 65 | 6 | 12 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成23年 3月 | 2011 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 24 | 21 | 5 | 0 | 6 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 野川春夫 | 形本静夫 | |
| | | | 兼任 | 名21客15 | 0 | 客8 | 0 | 0 | 0 | 65 | 6 | 12 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | 兼任 | 客6 | 0 | 客2 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 24 | 21 | 5 | 0 | 6 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名21客21 | 0 | 客10 | 0 | 0 | 0 | 69 | 6 | 12 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成24年 3月 | 2012 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 4 | 20 | 5 | 1 | 7 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 野川春夫 | 野川春夫 | | | |
| | | | 兼任 | 名22客17 | 0 | 客6 | 0 | 0 | 0 | 60 | 6 | 16 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 18 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 客6 | 0 | 客2 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 22 | 25 | 5 | 1 | 7 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名22客23 | 0 | 客8 | 0 | 0 | 0 | 63 | 6 | 16 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成25年 3月 | 2013 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 3 | 20 | 6 | 0 | 9 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 野川春夫 | 野川春夫 | |
| | | | 兼任 | 名22客26 | 0 | 客5 | 0 | 0 | 0 | 63 | 8 | 23 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 17 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| | | | 兼任 | 客7 | 0 | 客2 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 20 | 25 | 6 | 0 | 9 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名22客33 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 67 | 8 | 23 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成26年 3月 | 2014 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 5 | 19 | 4 | 0 | 9 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 野川春夫 | 北村薫 | | | |
| | | | 兼任 | 名20客27 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 73 | 12 | 22 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 16 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 名1客9 | 0 | 客2 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 21 | 25 | 4 | 0 | 9 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名21客36 | 0 | 客9 | 0 | 0 | 0 | 78 | 12 | 22 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成27年 3月 | 2015 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 4 | 18 | 5 | 1 | 14 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 野川春夫 | 島内憲夫 | |
| | | | 兼任 | 名18客25 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 76 | 11 | 19 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 17 | 6 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| | | | 兼任 | 名1客7 | 0 | 客2 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 21 | 24 | 6 | 1 | 14 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名19客32 | 0 | 客9 | 0 | 0 | 0 | 80 | 11 | 19 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成28年 3月 | 2016 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 5 | 17 | 9 | 1 | 18 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 野川春夫 | 加納實 | | | |
| | | | 兼任 | 名16客27 | 0 | 客10 | 0 | 0 | 0 | 77 | 8 | 17 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 14 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 名2客6 | 0 | 客1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 19 | 22 | 10 | 1 | 18 | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名18客33 | 0 | 客11 | 0 | 0 | 0 | 80 | 8 | 17 | 0 | 0 | | | | | | |

| 和暦 | 西暦 | 区分 | 教授 | 先任准教授 | 准教授 | 講師 | 助教 | 助手 | 非常勤講師 | 非常勤助教 | 非常勤助手 | 嘱託(非常勤) | その他 | 学部長 | 研究科長 | | | |
|-------------|------|-------------|----|--------|-----|----|----|----|-------|-------|-------|---------|-----|------|------|------|------|---|
| 平成29年 3月 | 2017 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 7 | 15 | 12 | 1 | 17 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 内藤久士 | 内藤久士 | | | |
| | | | 兼任 | 名15客26 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 80 | 7 | 13 | 0 | | | 0 | | |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 14 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 名2客5 | 0 | 客1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 21 | 19 | 13 | 1 | 17 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名17客31 | 0 | 客8 | 0 | 0 | 0 | 82 | 7 | 14 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成30年 3月 | 2018 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 5 | 16 | 12 | 1 | 19 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 内藤久士 | 内藤久士 | |
| | | | 兼任 | 名15客22 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 76 | 12 | 11 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 15 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| | | | 兼任 | 名2客7 | 0 | 客0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 20 | 21 | 12 | 1 | 19 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名17客29 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 77 | 12 | 11 | 0 | 0 | | | | | | |
| 平成31年 3月 | 2019 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 5 | 16 | 12 | 1 | 18 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 内藤久士 | 内藤久士 | | | |
| | | | 兼任 | 名15客19 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 72 | 13 | 9 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 18 | 3 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 名2客7 | 0 | 客0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 23 | 19 | 12 | 1 | 19 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名17客26 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 73 | 13 | 9 | 0 | 0 | | | | | | |
| 令和2年 3月 | 2020 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 6 | 15 | 17 | 4 | 13 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 吉村雅文 | 吉村雅文 | |
| | | | 兼任 | 名12客20 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 76 | 14 | 10 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 17 | 3 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| | | | 兼任 | 名3客8 | 0 | 客0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 23 | 18 | 17 | 4 | 15 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名15客28 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 77 | 14 | 10 | 0 | 0 | | | | | | |
| 令和3年 3月 | 2021 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 5 | 13 | 18 | 2 | 13 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 吉村雅文 | 吉村雅文 | | | |
| | | | 兼任 | 名12客20 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 72 | 8 | 10 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 17 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| | | | 兼任 | 名3客17 | 0 | 客0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | | | 0 | | |
| 合計 | 専任 | 22 | 15 | 18 | 2 | 13 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名15客37 | 0 | 客7 | 0 | 0 | 0 | 73 | 8 | 10 | 0 | 0 | | | | | | |
| 令和4年 3月 | 2022 | スポーツ健康科学部 | 専任 | 4 | 13 | 18 | 0 | 15 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | 吉村雅文 | 吉村雅文 | |
| | | | 兼任 | 名11客18 | 0 | 客4 | 0 | 0 | 0 | 79 | 10 | 10 | 0 | | | | | 0 |
| | | スポーツ健康科学研究科 | 専任 | 18 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| | | | 兼任 | 名3客5 | 0 | 客0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | |
| 合計 | 専任 | 22 | 15 | 18 | 0 | 15 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | | | | |
| | 兼任 | 名14客23 | 0 | 客4 | 0 | 0 | 0 | 80 | 10 | 10 | 0 | 0 | | | | | | |

※名：名誉教授
※客：客員教授

名誉教授・教授

名誉教授 さくらキャンパス開設以前

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|------|-----------------|---------|----------|
| 東 俊郎 | 名誉教授（病理学） | 昭和49年4月 | 昭和62年1月 |
| 久内 武 | 名誉教授（体育学部） | 昭和50年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成9年4月 |
| 南 右内 | 名誉教授（医学部進学課程） | 昭和51年4月 | 平成6年3月 |
| | 名誉教授（一般教育） | 平成6年4月 | 平成20年10月 |
| 太田鐵男 | 名誉教授（体育学部） | 昭和63年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成16年11月 |

教授一覧 さくらキャンパス開設以降（併任発令除く）

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|-------|-----------------|---------|----------|
| 鈴木 弘 | 教授（医学部進学課程） | | 昭和63年度 |
| 黒田善雄 | 教授（体育学部） | | 平成元年度 |
| 渋谷 修 | 教授（体育学部） | | 平成2年度 |
| 大竹敏雄 | 教授（医学部進学課程） | 昭和39年3月 | 平成2年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成2年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成16年8月 |
| 山本武彦 | 教授（体育学部） | 昭和43年4月 | 平成5年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成5年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成21年9月 |
| 石河利寛 | 教授（体育学部） | 昭和45年4月 | 昭和60年3月 |
| | 客員教授（体育学部） | 昭和60年4月 | 平成元年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成元年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成25年5月 |
| 内村治子 | 教授（医学部進学課程） | 昭和46年4月 | 平成元年3月 |
| | 名誉教授（医学部進進課程） | 平成元年4月 | 平成6年3月 |
| | 名誉教授（一般教育） | 平成6年4月 | 平成15年11月 |
| 千葉裕典 | 教授（体育学部） | 昭和47年4月 | 平成3年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成3年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成28年6月 |
| 清野武治 | 教授（体育学部） | 昭和48年7月 | 平成4年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成20年3月 |
| 帖佐寛章 | 教授（体育学部） | 昭和48年7月 | 平成元年5月 |
| | 客員教授（体育学部） | 平成元年6月 | 平成8年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成8年4月 | 現在 |
| 齊藤定雄 | 教授（体育学部） | 昭和48年7月 | 平成5年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成5年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 現在 |
| 高垣東一郎 | 教授（体育学部） | 昭和54年1月 | 平成4年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成26年9月 |

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|-------|--------------------|----------|----------|
| 石田絢子 | 教授（体育学部） | 昭和56年4月 | 平成3年3月 |
| | 名誉教授（体育学部） | 平成3年4月 | 平成8年6月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年7月 | 平成16年12月 |
| 小宮嘉久 | 教授（体育学部） | 昭和58年11月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成11年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成11年4月 | 平成20年8月 |
| 山内 隆 | 教授（医学部進学課程） | 昭和59年10月 | 平成6年3月 |
| | 教授（医学部一般教育） | 平成6年4月 | 平成13年3月 |
| | 名誉教授（一般教育） | 平成13年4月 | 現在 |
| 古賀苦住 | 教授（体育学部） | 昭和61年1月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成9年3月 |
| | 名誉教授（一般教育） | 平成9年4月 | 令和元年5月 |
| 浪越信夫 | 教授（体育学部） | 昭和61年4月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成9年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成9年4月 | 現在 |
| 山口正弘 | 教授（体育学部） | 昭和61年4月 | 平成6年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成9年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成9年4月 | 平成25年3月 |
| 南谷和利 | 教授（体育学部） | 昭和61年4月 | 平成6年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成12年3月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成12年4月 | 平成15年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年4月 | 平成26年11月 |
| 岡田光太郎 | 教授（医学部進学課程） | 昭和62年2月 | 平成6年3月 |
| | 教授（医学部一般教育） | 平成6年4月 | 平成8年3月 |
| 吉村 章 | 教授（体育学部） | 昭和62年2月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成11年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成11年4月 | 平成26年8月 |
| 狐崎直樹 | 教授（体育学部） | 昭和62年2月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成6年3月 |
| 笠原嘉介 | 教授（体育学部） | 昭和62年2月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成12年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成12年4月 | 平成15年7月 |
| 高橋俊哉 | 教授（体育学部） | 昭和62年2月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成8年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年4月 | 令和3年7月 |
| 星野公夫 | 教授（体育学部） | 昭和63年4月 | 平成6年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成14年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 現在 |
| 稲本直樹 | 教授（医学部進学課程） | 平成元年4月 | 平成6年3月 |
| 青木純一郎 | 教授（体育学部） | 平成元年4月 | 平成7年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成7年4月 | 平成16年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成16年4月 | 平成21年3月 |
| | 特任教授（スポーツ健康科学部） | 平成20年4月 | 平成21年3月 |
| 鈴木克明 | 教授（体育学部） | 平成2年4月 | 平成7年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成7年4月 | 平成10年3月 |

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|-------|-----------------------|----------|----------|
| 池田黎太郎 | 教授（医学部進学課程） | 平成2年5月 | 平成6年3月 |
| | 教授（医学部一般教育） | 平成6年4月 | 平成17年3月 |
| | 名誉教授（一般教育） | 平成17年3月 | 現在 |
| 朴 哲浩 | 客員教授（体育学部） | 平成3年9月 | 平成4年9月 |
| 野原三洋子 | 教授（体育学部） | 平成3年5月 | 平成7年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成7年4月 | 平成12年3月 |
| 北森義明 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成12年4月 | 平成27年2月 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成14年3月 |
| | 教授（嘱託）大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成14年4月 | 平成15年3月 |
| 田村 端 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 令和元年6月 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成6年3月 |
| 大西暁志 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成8年5月 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成15年3月 |
| 澤木啓祐 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年4月 | 現在 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成21年3月 |
| 伊藤政男 | 特任教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年4月 | 現在 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年4月 | 現在 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成6年3月 |
| 川合武司 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成20年3月 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成6年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成16年3月 |
| 宮下桂治 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成16年4月 | 現在 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成6年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成13年3月 |
| 武井正子 | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年8月 | 平成20年3月 |
| | 教授（体育学部） | 平成4年4月 | 平成5年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成15年3月 |
| 秋山登代子 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年4月 | 現在 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成14年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年4月 | 平成18年3月 |
| 篠原俊行 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成5年10月 | 平成13年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成13年4月 | 平成15年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成18年4月 | 平成19年3月 |
| | 客員教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成19年4月 | 平成19年12月 |
| 佐藤良男 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成6年4月 | 平成10年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年9月 | 平成23年3月 |
| 大津一義 | 客員教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年10月 | 平成27年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成8年9月 | 平成22年3月 |
| 岩井秀明 | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成24年4月 | 現在 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成9年4月 | 平成23年3月 |

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|----------|----------------------|----------|----------|
| 野川春夫 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成10年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年10月 | 平成26年3月 |
| | 特任教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成26年4月 | 現在 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成26年4月 | 現在 |
| | 客員教授（国際教養学部） | 令和3年4月 | 現在 |
| 中村勝二 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成10年4月 | 平成23年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年1月 | 現在 |
| 浦井孝夫 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成11年4月 | 平成19年3月 |
| 米田継武 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成11年4月 | 平成22年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成22年4月 | 現在 |
| 三野大來 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成11年10月 | 平成18年3月 |
| 吉儀 宏 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成12年4月 | 平成22年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 平成22年4月 | 現在 |
| 須藤（望月）路子 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成12年12月 | 令和3年3月 |
| | 名誉教授（スポーツ健康科学部） | 令和3年4月 | 現在 |
| | 特任教授（保健医療学部） | 令和3年4月 | 現在 |
| | 特任教授（国際教養学部） | 令和3年4月 | 現在 |
| 北村 薫 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成12年12月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成27年3月 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年4月 | 現在 |
| | 特任教授（国際教養学部） | 平成27年4月 | 平成31年3月 |
| 水野忠和 | 特任教授（医療看護学部） | 平成27年4月 | 平成31年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年1月 | 平成14年3月 |
| 久保田洋一 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 平成22年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年6月 | 令和3年3月 |
| 形本静夫 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成25年3月 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成25年4月 | 現在 |
| 河合祥雄 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成27年3月 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年4月 | 現在 |
| 櫻庭景植 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成30年3月 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成30年4月 | 現在 |
| | 客員准教授（医学部） | 平成30年4月 | 現在 |
| 阿部 裕 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成14年4月 | 平成15年3月 |
| 小林淑一 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年4月 | 平成23年3月 |
| 金子今朝秋 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年11月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年1月 | 平成24年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成24年6月 | 令和3年3月 |
| 加納 實 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年11月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年1月 | 平成28年3月 |
| | 名誉教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成28年4月 | 現在 |
| 廣澤正孝 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成15年11月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成29年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成29年4月 | 現在 |

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|-------|----------------------|----------|----------|
| 須田柳治 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成16年2月 | 平成16年3月 |
| 青木 眞 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成19年4月 | 平成20年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成20年4月 | 平成25年3月 |
| 中島宣行 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成19年4月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年1月 | 平成25年3月 |
| 島内憲夫 | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成25年5月 | 平成29年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成19年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成27年3月 |
| | 特任教授（国際教養学部） | 平成27年4月 | 令和3年3月 |
| 土屋 基 | 名誉教授（国際教養学部） | 平成29年4月 | 現在 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成19年7月 | 平成21年12月 |
| 濱野光之 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成20年3月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年4月 | 平成27年3月 |
| | 特任教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年4月 | 現在 |
| 佐久間和彦 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成20年5月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年1月 | 平成29年3月 |
| 細見 修 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成20年12月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年1月 | 平成27年3月 |
| | 客員教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年4月 | 令和3年3月 |
| 松元秀雄 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年1月 | 平成21年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年4月 | 平成22年3月 |
| 鹿倉二郎 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年4月 | 平成28年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成28年4月 | 現在 |
| 内藤久士 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成21年7月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 現在 |
| 山岸明子 | 教授（医療短大） | 平成9年7月 | 平成16年3月 |
| | 教授（医療看護学部） | 平成16年4月 | 平成22年3月 |
| | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成22年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成26年3月 |
| 菅波盛雄 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成22年10月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成31年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成31年4月 | 現在 |
| 竹内敏康 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年2月 | 平成23年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年6月 | 平成24年3月 |
| 小笠原悦子 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年4月 | 平成23年12月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成24年4月 | 現在 |
| 下村義夫 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成23年4月 | 平成23年10月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成23年11月 | 平成27年3月 |
| 長登 健 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成25年4月 | 現在 |
| 鈴木大地 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成25年6月 | 平成27年9月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 平成27年10月 | 令和2年10月 |
| | 特任教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年11月 | 令和3年3月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和3年4月 | 現在 |
| 吉村雅文 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成25年10月 | 現在 |
| 黒須 充 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成26年4月 | 令和4年3月 |
| 久保原禪 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年4月 | 現在 |

| 氏名 | 所属 | 就任 | 退任 |
|-----------|----------------------|----------|---------|
| 四方田清 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成27年4月 | 令和2年3月 |
| | 客員教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年4月 | 現在 |
| 采女智津江 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成27年4月 | 令和2年3月 |
| | 客員教授（スポーツ健康科学部） | 令和2年4月 | 現在 |
| 廣津信義 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成27年10月 | 現在 |
| 廣瀬伸良 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成28年4月 | 現在 |
| 青木和浩 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成28年4月 | 平成29年3月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成29年4月 | 現在 |
| 山崎一彦 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成28年4月 | 現在 |
| 和氣秀文 | 教授（スポーツ健康科学部） | 平成28年4月 | 平成29年3月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成29年4月 | 現在 |
| 柴田展人 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成29年4月 | 令和2年6月 |
| | 教授（大学院医学研究科） | 令和2年7月 | 現在 |
| 吉田和人 | 客員教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成29年4月 | 令和2年3月 |
| | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年4月 | 現在 |
| 高澤祐治 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成30年4月 | 現在 |
| 町田修一 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成30年4月 | 現在 |
| 中村 充 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成30年6月 | 現在 |
| 原田睦巳 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 平成30年6月 | 現在 |
| 井上（鯉川）なつえ | 教授（スポーツ健康科学部） | 令和元年10月 | 現在 |
| 黄田常嘉 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年7月 | 現在 |
| 鈴木良雄 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年4月 | 現在 |
| 水野基樹 | 教授（大学院スポーツ健康科学研究科） | 令和2年4月 | 現在 |
| 大野早苗 | 教授（スポーツ健康科学部） | 令和2年4月 | 現在 |

委員会活動

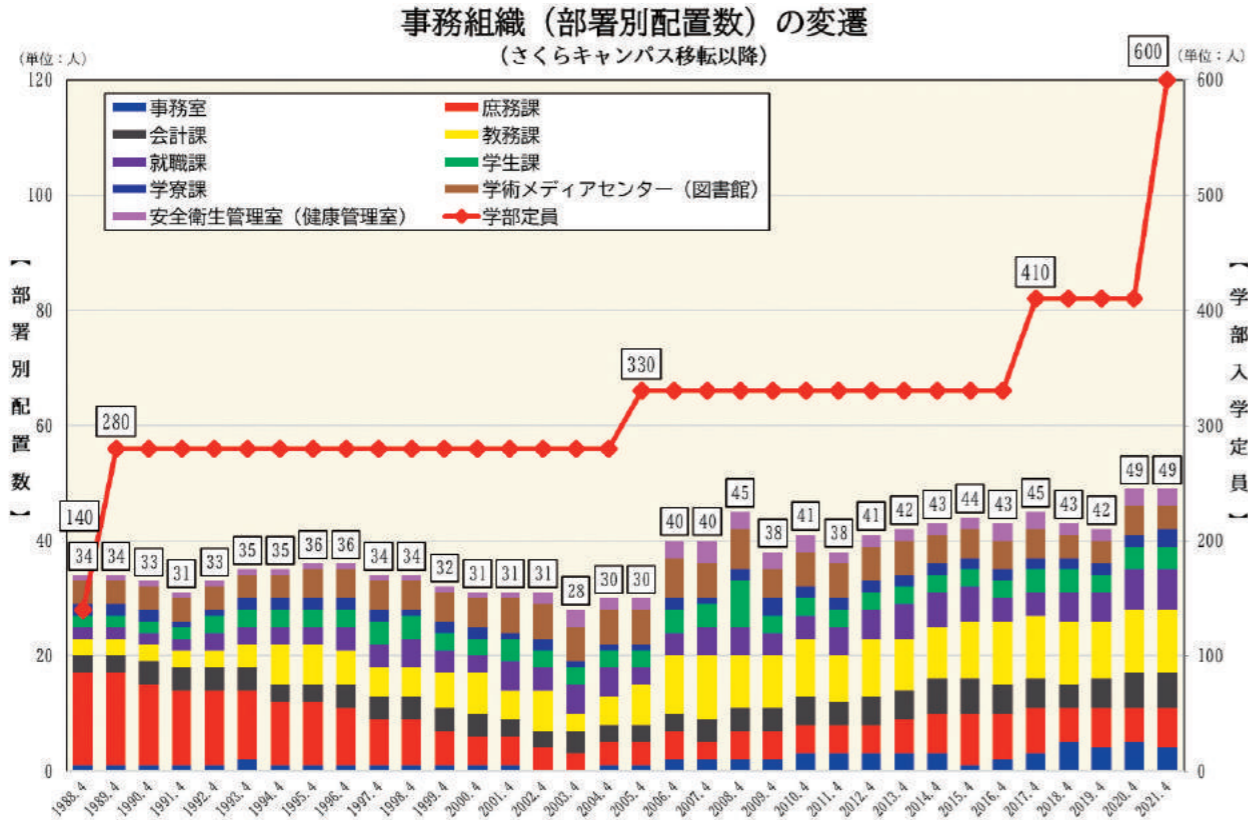
委員会一覧

本資料は事業報告書に掲載されている内容を纏めたものである。

| 委員会名称 | 発足年度など |
|------------------|--|
| 教務委員会 | 常設委員会 |
| 研究委員会 | 常設委員会 2018（平成30）年度に順天堂スポーツ科学研究編集委員会、累加測定委員会と統合 紀要編集委員会（2010（平成22）年度から順天堂スポーツ健康科学研究編集委員会に委員会名変更）は2002（平成14）年度～ 累加測定プロジェクト委員会（2001（平成13）年度から累加測定委員会に委員会名称変更）は1995（平成7）年度～ |
| 就職委員会 | 常設委員会 |
| 教職委員会 | 常設委員会 |
| 広報委員会 | 常設委員会 2005（平成17）年度に学生募集委員会から広報学生募集委員会に名称変更 2018（平成30）年度に広報学生募集委員会から広報委員会に委員会名称変更 |
| 学生部委員会 | 常設委員会 |
| 環境委員会 | 常設委員会 2005（平成17）年度に公害防止委員会・毒物劇物安全管理委員会・実験動物委員会・生物環境調節管理委員会が統合し環境委員会となる 実験動物委員会・生物環境調節装置管理委員会は1997（平成9）年度～ |
| 自己点検評価委員会 | 常設委員会 |
| FD推進室 | 常設委員会 1999（平成11）年度に学部教育開発室から教育技法開発室に変更 2003（平成15）年度に教育技法開発室からFD推進室に変更 2005（平成17）年度に公開講座プロジェクト委員会、授業の点検評価委員会と統合 公開講座プロジェクト委員会・授業の点検評価委員会は2002（平成14）年度～ |
| 学術メディアセンター運営委員会 | 常設委員会 2016（平成28）年度に図書館運営委員会（さくらキャンパス分科会）から学術メディアセンター運営委員会に名称変更 |
| スポーツ医科学教育研究交流推進室 | ～2001（平成13）年度 |
| 入試戦略協議会 | 1989（平成元）年度～ 2011（平成23）年度に入試改善委員会から入試戦略協議会に名称変更 |
| 入試委員会 | 1989（平成元）年度～ |

| 委員会名称 | 発足年度など |
|------------------------|---|
| 幹部会 | 2021（令和3）年度に学科長会から幹部会に名称変更 （学科長会は平成5年度～） 2017（平成29）年度から学科長会がカリキュラム評価委員会を兼ねる |
| 研究等倫理委員会 | 1995（平成7）年度～ |
| 教育職員人事委員会 | 2002（平成14）年度～ |
| 情報委員会 | 2002（平成14）年度～ 2005（平成17）年度 情報ネットワーク管理委員会とマルチメディア教育システム運営委員会が統合し情報委員会となる 2007（平成19）年度にホームページ委員会と統合 |
| ハラスメント防止人権委員会 | 2002（平成14）年度～ 2018（平成30）年度にセクシュアル・ハラスメント防止人権委員会からハラスメント防止人権委員会に変更 |
| 保健福祉委員会 | 2006（平成18）年度～ |
| カリキュラム委員会 | 2008（平成20）年度～ |
| 学修支援委員会 | 2008（平成20）年度～ 2017（平成29）年度に教務委員会と統合 |
| キャリア・アップ支援委員会 | 2008（平成20）年度～2015（平成27）年度 |
| 社会連携推進室 | 2016（平成28）年度～ |
| 安全衛生委員会 | 2018（平成30）年度～ |
| 国際委員会 | 2018（平成30）年度～ |
| SAKURA未来プロジェクト | 2018（平成30）年度～2020（令和2）年度 |
| オリンピック・パラリンピック準備委員会 | 2020（令和2）年度 |
| 学生相談室運営委員会 | 2021（令和3）年度～ 学生部委員会から独立する |
| 寮監会 | 2021（令和3）年度～ |
| スポーツ推進支援センター運営委員会（さくら） | 2021（令和3）年度～ |
| 動物実験等部門委員会 | 2021（令和3）年度～ |

事務組織の変遷



■昭和63（1988）年4月1日（事務責任者 事務長 上西 守夫）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 16名 | 3名 | 3名 | 2名 | 2名 | 2名 | 4名 | 1名 | 34名 |

■平成元（1989）年4月1日（事務責任者 事務長 上西 守夫）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 16名 | 3名 | 3名 | 2名 | 2名 | 2名 | 4名 | 1名 | 34名 |

■平成2（1990）年4月1日（事務責任者 事務長 上西 守夫）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 14名 | 4名 | 3名 | 2名 | 2名 | 2名 | 4名 | 1名 | 33名 |

■平成3（1991）年4月1日（事務責任者 次長 石澤 正夫）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 13名 | 4名 | 3名 | 2名 | 2名 | 1名 | 4名 | 1名 | 31名 |

■平成4（1992）年4月1日（事務責任者 次長 石澤 正夫）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 13名 | 4名 | 3名 | 3名 | 3名 | 1名 | 4名 | 1名 | 33名 |

■平成5（1993）年4月1日（事務責任者 事務長 平木 敬二）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 2名 | 12名 | 4名 | 4名 | 3名 | 3名 | 2名 | 4名 | 1名 | 35名 |

■平成6（1994）年4月1日（事務責任者 事務長 平木 敬二）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 11名 | 3名 | 7名 | 3名 | 3名 | 2名 | 4名 | 1名 | 35名 |

■平成7（1995）年4月1日（事務責任者 事務長 鈴木 勉）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 11名 | 3名 | 7名 | 3名 | 3名 | 2名 | 5名 | 1名 | 36名 |

■平成8（1996）年4月1日（事務責任者 事務長 鈴木 勉）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 10名 | 4名 | 6名 | 4名 | 3名 | 2名 | 5名 | 1名 | 36名 |

■平成9（1997）年4月1日（事務責任者 事務長 鈴木 勉）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 8名 | 4名 | 5名 | 4名 | 4名 | 2名 | 5名 | 1名 | 34名 |

■平成10（1998）年4月1日（事務責任者 事務長 鈴木 勉）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 8名 | 4名 | 5名 | 5名 | 4名 | 1名 | 5名 | 1名 | 34名 |

■平成11（1999）年4月1日（事務責任者 次長 事務長 中嶋 盛雄）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 6名 | 4名 | 6名 | 4名 | 3名 | 2名 | 5名 | 1名 | 32名 |

■平成12（2000）年4月1日（事務責任者 次長 事務長 中嶋 盛雄）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 5名 | 4名 | 7名 | 3名 | 3名 | 2名 | 5名 | 1名 | 31名 |

■平成13（2001）年4月1日（事務責任者 次長 事務長 中嶋 盛雄）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 5名 | 3名 | 5名 | 5名 | 4名 | 1名 | 6名 | 1名 | 31名 |

■平成14（2002）年4月1日（事務責任者 部長 東 文昭）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 0名 | 4名 | 3名 | 7名 | 4名 | 3名 | 2名 | 6名 | 2名 | 31名 |

■平成15（2003）年4月1日（事務責任者 部長 東 文昭）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 0名 | 3名 | 4名 | 3名 | 5名 | 3名 | 1名 | 6名 | 3名 | 28名 |

■平成16（2004）年4月1日（事務責任者 部長 東 文昭）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 4名 | 3名 | 5名 | 5名 | 3名 | 1名 | 6名 | 2名 | 30名 |

■平成17（2005）年4月1日（事務責任者 次長 川鍋 謙一）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 4名 | 3名 | 7名 | 3名 | 3名 | 1名 | 6名 | 2名 | 30名 |

■平成18（2006）年4月1日（事務責任者 次長 川鍋 謙一）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 2名 | 5名 | 3名 | 10名 | 4名 | 4名 | 2名 | 7名 | 3名 | 40名 |

■平成19（2007）年4月1日（事務責任者 次長 川鍋 謙一）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 2名 | 3名 | 4名 | 11名 | 5名 | 4名 | 1名 | 6名 | 4名 | 40名 |

■平成20（2008）年4月1日（事務責任者 次長 川鍋 謙一）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 2名 | 5名 | 4名 | 9名 | 5名 | 8名 | 2名 | 7名 | 3名 | 45名 |

■平成21（2009）年4月1日（事務責任者 部長 川鍋 謙一）

| 事務室 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 2名 | 5名 | 4名 | 9名 | 4名 | 3名 | 3名 | 5名 | 3名 | 38名 |

企業就職内定先内訳の変遷

* 卒業時に内定報告のあった主な企業（抜粋）～法人格省略

* 企業名は内定取得当時の社名をそのまま使用

■平成22（2010）年4月1日（事務責任者 次長 阿部 雄吉）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 3名 | 5名 | 5名 | 10名 | 4名 | 3名 | 2名 | 6名 | 3名 | 41名 |

■平成23（2011）年4月1日（事務責任者 部長 阿部 雄吉）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 3名 | 5名 | 4名 | 8名 | 5名 | 3名 | 2名 | 6名 | 2名 | 38名 |

■平成24（2012）年4月1日（事務責任者 部長 阿部 雄吉）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 3名 | 5名 | 5名 | 10名 | 5名 | 3名 | 2名 | 6名 | 2名 | 41名 |

■平成25（2013）年4月1日（事務責任者 部長 阿部 雄吉）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 3名 | 6名 | 5名 | 9名 | 6名 | 3名 | 2名 | 6名 | 2名 | 42名 |

■平成26（2014）年4月1日（事務責任者 部長 阿部 雄吉）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 3名 | 7名 | 6名 | 9名 | 6名 | 3名 | 2名 | 5名 | 2名 | 43名 |

■平成27（2015）年4月1日（事務責任者 部長事務取扱者 久保 昌也）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 図書館 | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|
| 1名 | 9名 | 6名 | 10名 | 6名 | 3名 | 2名 | 5名 | 2名 | 44名 |

■平成28（2016）年4月1日（事務責任者 部長 久保 昌也）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|-------|-----|
| 2名 | 8名 | 5名 | 11名 | 4名 | 3名 | 2名 | 5名 | 3名 | 43名 |

■平成29（2017）年4月1日（事務責任者 部長 久保 昌也）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 健康管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|-------|-----|
| 3名 | 8名 | 5名 | 11名 | 4名 | 4名 | 2名 | 5名 | 3名 | 45名 |

■平成30（2018）年4月1日（事務責任者 部長事務取扱者 大竹 淳雅）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 安全衛生管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|---------|-----|
| 5名 | 6名 | 4名 | 11名 | 5名 | 4名 | 2名 | 4名 | 2名 | 43名 |

■平成31（2019）年4月1日（事務責任者 部長事務取扱者 大竹 淳雅）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 安全衛生管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|---------|-----|
| 4名 | 7名 | 5名 | 10名 | 5名 | 3名 | 2名 | 4名 | 2名 | 42名 |

■令和2（2020）年4月1日（事務責任者 部長事務取扱者 大竹 淳雅）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 安全衛生管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|---------|-----|
| 5名 | 6名 | 6名 | 11名 | 7名 | 4名 | 2名 | 5名 | 3名 | 49名 |

■令和3（2021）年4月1日（事務責任者 部長事務取扱者 大竹 淳雅）

| 事務部 | 庶務課 | 会計課 | 教務課 | 就職課 | 学生課 | 学寮課 | 学術メディアセンター | 安全衛生管理室 | 合計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|---------|-----|
| 4名 | 7名 | 6名 | 11名 | 7名 | 4名 | 3名 | 4名 | 3名 | 49名 |

| 昭和63（1988）年度 （スポーツ関連） | 平成14（2002）年度 （スポーツ関連） | 平成30（2018）年度 （スポーツ関連） |
|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 愛知県スポーツ振興事業団 | アシックス | エスエスケイ |
| アシックス | アディダスジャパン | JR東日本スポーツ |
| NASスポーツクラブ | エスエスケイ | セントラルスポーツ |
| 日産スポーツプラザ | セントラルスポーツ | ティップネス |
| （医療・福祉関連） | （医療・福祉関連） | （医療・福祉関連） |
| 大塚製薬 | デサント | アストラゼネカ |
| | 東急スポーツオアシス | グラクソ・スミスクライン |
| | ニューバランスジャパン | 佐藤製薬 |
| （金融関連） | （医療・福祉関連） | （金融関連） |
| 朝日生命保険 | 鐘紡 | 筑波銀行 |
| オリエントファイナンス | 資生堂 | 三井住友銀行 |
| 大和銀行 | 筑波記念病院 | 三菱UFJモルガンスタンレー証券 |
| 日本生命保険 | （情報・IT関連） | （情報・IT関連） |
| （情報・IT関連） | NTT関東 | IBM |
| NTT東海 | NTT | NTT |
| 富士通 | 日本電気 | インテック |
| 富士通山梨 | 富士通 | 富士通 |
| （サービス・流通関連） | （サービス・流通関連） | （サービス・流通関連） |
| 金沢名鉄丸越百貨店 | イトーヨーカ堂 | ANAエアポートサービス |
| 全日空エンタープライズ | エイチ・アイ・エス | コカ・コーラボトラーズジャパン |
| 千都日産モーター | オリエンタルランド | JTB |
| 東京YMCA | 近畿日本ツーリスト | セブン・イレブン・ジャパン |
| ホテルメトロポリタン | 新東京国際空港公団 | 東京急行電鉄 |
| （製造業その他） | セブン-イレブン・ジャパン | 日本ホテル |
| 大阪電業社 | 三越 | 星野リゾート |
| 川崎製鉄 | （マスコミ・広告関連） | リゾートトラスト |
| クリヤマ | 読売広告社 | （マスコミ・広告関連） |
| 航空自衛隊 | （製造業その他） | 電通 |
| コスモスライフ | 積水化学工業 | 博報堂アイスタジオ |
| 三陽商会 | 総合警備保障 | フジテレビジョン |
| 住友金属工業 | トヨタ自動車 | マイナビ |
| セコム | 日本食研 | （製造業その他） |
| 豊田工機 | 日本マクドナルド | 大成建設 |
| 日本電気ホームエレクトロニクス | 東日本旅客鉄道 | 日本ペイント |
| 日本たばこ産業 | 富士写真フイルム | 三井不動産リアルティ |
| 日新製糖 | 本田技研 | ユーグレナ |
| 日本光器製作所 | 三菱化学 | |
| | 明治乳業 | |
| | 明治製菓 | |
| | リクルート | |

卒業後の進路状況

*～1991（平成3）年度：就職委員会資料より抜粋。1992（平成4）年度～：学校法人順天堂事業報告による。

| 進路 | 年度 | 1988 | 1989 | 1990 | 1991 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 | 1998 | 1999 | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 |
|---------|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | | S63 | H1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 大学 | | | 5 | 1 | | 2 | | | 2 | | | 1 | 2 | 3 | | | |
| 高等学校 | | 32 | 33 | 22 | 43 | 46 | 66 | 57 | 16 | 16 | 9 | 25 | 26 | 18 | 28 | 19 | 25 |
| 中学校 | | 15 | 13 | 10 | 6 | 24 | 23 | 18 | 8 | 7 | 7 | 3 | 6 | 5 | 6 | 6 | 13 |
| 小学校 | | 5 | 4 | 2 | 4 | 4 | 10 | 5 | | 1 | 1 | 2 | | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 養護学校 | | 8 | 4 | 6 | 12 | 14 | 7 | 10 | 4 | 15 | 6 | 9 | 7 | 15 | 13 | 15 | 18 |
| 専門学校 | | | | | | | 3 | | | 2 | | | 2 | 3 | | | |
| 幼稚園 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| その他 | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| 教員計 | | 61 | 59 | 41 | 66 | 90 | 110 | 90 | 30 | 41 | 23 | 40 | 43 | 47 | 50 | 43 | 59 |
| 企業 | | 48 | 52 | 66 | 83 | 106 | 107 | 99 | 130 | 139 | 168 | 131 | 166 | 150 | 164 | 144 | 163 |
| スポーツクラブ | | 5 | 4 | 3 | 5 | 2 | | | | | | | | | | | |
| 公務員 | | 7 | 7 | 15 | 9 | 15 | 19 | 7 | 15 | 15 | 13 | 13 | 8 | 11 | 9 | 12 | 16 |
| 法人関係*1 | | | | | | | | 26 | | | | | . | | | | |
| 社会体育 | | 10 | 6 | 2 | 5 | 6 | | 3 | | | | | | | | | |
| 自営 | | 1 | 2 | 1 | 1 | | 2 | | 2 | 5 | | 4 | 7 | | | 1 | |
| その他*2 | | | 1 | 1 | | 19 | 1 | 1 | 1 | 19 | | 1 | 1 | 1 | | | |
| 就職者計 | | 132 | 131 | 129 | 169 | 238 | 239 | 226 | 178 | 219 | 204 | 189 | 225 | 209 | 223 | 200 | 238 |
| 進学 | | 11 | 14 | 21 | 23 | 29 | 33 | 39 | 40 | 40 | 48 | 40 | 38 | 49 | 55 | 55 | 52 |
| 就業未定 | | | | | | | | | 57 | 21 | 38 | 25 | 27 | 30 | 40 | 64 | 22 |
| その他*3 | | 2 | | | 3 | 1 | | | 10 | 6 | 10 | 30 | 23 | 3 | 11 | 10 | 7 |
| 合計 | | 145 | 145 | 150 | 195 | 268 | 272 | 265 | 285 | 286 | 300 | 284 | 313 | 291 | 329 | 329 | 319 |

*1: 財団法人、社団法人、社会福祉、医療法人・病院 *2: 青年海外協力隊他 *3: 自宅研修・非就職

| 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2020 | 2021 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--------|------|------|
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | H31・R1 | 2 | 3 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 8 | 8 | 15 | 19 | 24 | 23 | 22 | 22 | 19 | 22 | 20 | 17 | 9 | 8 | 15 | 11 | 12 | |
| 16 | 10 | 19 | 20 | 13 | 16 | 22 | 25 | 38 | 27 | 25 | 18 | 24 | 14 | 18 | 18 | 31 | |
| 2 | 5 | 2 | 16 | 2 | 12 | 17 | 18 | 22 | 18 | 17 | 14 | 19 | 23 | 26 | 13 | 13 | |
| 20 | 12 | 12 | 18 | 25 | 31 | 31 | 31 | 32 | 32 | 33 | 36 | 28 | 22 | 17 | 18 | 25 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 1 | 3 | 1 | | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 46 | 35 | 48 | 73 | 64 | 82 | 92 | 96 | 111 | 100 | 98 | 86 | 80 | 68 | 77 | 61 | 82 | 0 |
| 154 | 167 | 167 | 150 | 162 | 149 | 132 | 129 | 134 | 143 | 149 | 161 | 173 | 188 | 178 | 190 | 225 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 16 | 12 | 13 | 23 | 30 | 21 | 18 | 21 | 31 | 23 | 20 | 22 | 25 | 22 | 21 | 22 | 31 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 2 | 1 | | | | | 8 | 4 | 2 | 2 | | | | 1 | 3 | 2 | 4 | 4 |
| 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 219 | 215 | 228 | 246 | 256 | 252 | 250 | 250 | 278 | 268 | 267 | 269 | 279 | 281 | 278 | 277 | 342 | 0 |
| 50 | 56 | 40 | 39 | 50 | 51 | 44 | 64 | 32 | 44 | 36 | 47 | 40 | 28 | 33 | 30 | 42 | |
| 45 | 40 | 21 | 19 | 11 | 18 | 19 | 11 | 8 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | |
| 9 | 1 | 5 | 4 | 6 | 6 | 8 | 5 | 10 | 8 | 18 | 6 | 12 | 9 | 16 | 11 | 18 | |
| 323 | 312 | 294 | 308 | 323 | 327 | 321 | 330 | 328 | 322 | 323 | 323 | 332 | 320 | 328 | 319 | 404 | 0 |

教員免許取得者数

保健体育／特別支援学校教員免許取得者/養護教諭教員免許取得者/専修免許取得者

| 年度 | (西暦) | 中学校一級/高等学校二級 | | | | 養護学校二級 | | | | | | |
|--------|------|------------------|-----|----|-----|-------------------|-----|----|----|----|-----|-----|
| | | 合計 | 体育 | | 科目生 | 合計 | 種別 | 体育 | | | | |
| 昭和63年度 | 1988 | 136 | 135 | | 1 | 40 | — | 40 | | | | |
| | | 中学校教諭一種/高等学校教諭一種 | | | | 養護学校教諭二種 | | | | | | |
| | | 合計 | 体育 | | 科目生 | 合計 | 種別 | 体育 | | | | |
| 平成元年度 | 1989 | 132 | 132 | | 0 | 50 | — | 50 | | | | |
| 平成2年度 | 1990 | 122 | 122 | | 0 | 37 | — | 37 | | | | |
| 平成3年度 | 1991 | 166 | 166 | | 0 | 51 | — | 51 | | | | |
| | | 中学校教諭一種/高等学校教諭一種 | | | | 養護学校教諭二種 | | | | | | |
| | | 合計 | 体育 | | 科目生 | 合計 | 種別 | 体育 | | 健 | 科目生 | |
| 平成4年度 | 1992 | 202 | 202 | | 0 | 60 | — | 60 | | | | |
| 平成5年度 | 1993 | 192 | 133 | | 59 | 49 | — | 20 | | 29 | | |
| 平成6年度 | 1994 | 201 | 139 | | 62 | 66 | — | 22 | | 44 | | |
| 平成7年度 | 1995 | 219 | 147 | | 69 | 85 | — | 26 | | 58 | 1 | |
| | | 中・高保健体育一種 | | | | 養護学校教諭一種/養護学校教諭二種 | | | | | | |
| | | 合計 | ス | マ | 健 | 科目生 | 特支 | 種別 | ス | マ | 健 | 科目生 |
| 平成8年度 | 1996 | 146 | 82 | 4 | 58 | 2 | 66 | I | 10 | 0 | 41 | 1 |
| | | | | | | | | II | 12 | 0 | 1 | 1 |
| 平成9年度 | 1997 | 147 | 90 | 0 | 55 | 2 | 66 | I | 16 | 0 | 37 | 4 |
| | | | | | | | | II | 6 | 0 | 2 | 1 |
| 平成10年度 | 1998 | 162 | 87 | 2 | 67 | 6 | 88 | I | 20 | 0 | 57 | 3 |
| | | | | | | | | II | 7 | 0 | 0 | 1 |
| 平成11年度 | 1999 | 200 | 117 | 6 | 73 | 4 | 87 | I | 22 | 0 | 53 | 1 |
| | | | | | | | | II | 11 | 0 | 0 | 0 |
| 平成12年度 | 2000 | 176 | 98 | 7 | 67 | 4 | 79 | I | 17 | 0 | 52 | 3 |
| | | | | | | | | II | 5 | 0 | 1 | 1 |
| 平成13年度 | 2001 | 170 | 110 | 3 | 56 | 1 | 89 | I | 29 | 0 | 55 | 3 |
| | | | | | | | | II | 1 | 0 | 0 | 1 |
| 平成14年度 | 2002 | 217 | 136 | 11 | 65 | 5 | 120 | I | 52 | 3 | 62 | 0 |
| | | | | | | | | II | 2 | 0 | 0 | 1 |
| 平成15年度 | 2003 | 214 | 127 | 11 | 73 | 3 | 95 | I | 23 | 3 | 60 | 2 |
| | | | | | | | | II | 5 | 1 | 0 | 1 |
| 平成16年度 | 2004 | 204 | 133 | 10 | 60 | 1 | 105 | I | 46 | 0 | 51 | 1 |
| | | | | | | | | II | 6 | 0 | 0 | 1 |

| 高等学校一級 | |
|----------|----|
| 合計 | 院 |
| 7 | 7 |
| 高等学校教諭専修 | |
| 合計 | 院 |
| 11 | 11 |
| 5 | 5 |
| 11 | 11 |
| 中・高専修 | |
| 合計 | 院 |
| 12 | 12 |
| 10 | 10 |
| 4 | 4 |
| 10 | 10 |
| 中・高専修 | |
| 合計 | 院 |
| 17 | 17 |
| 15 | 15 |
| 12 | 12 |
| 12 | 12 |
| 11 | 11 |
| 16 | 16 |
| 13 | 13 |
| 27 | 27 |
| 12 | 12 |

| 平成17年度 | 2005 | 226 | 148 | 15 | 62 | 1 | 96 | I | 37 | 2 | 52 | 1 | | | | | | | 7 | 7 |
|--------|------|-----------|------|-----|------|-----|----------|----|-----|----|-----|--------|-----|---|---|-----|-------|----|-----|-----|
| | | | | | | | | II | 3 | 0 | 0 | 1 | | | | | | | | |
| 平成18年度 | 2006 | 195 | 117 | 15 | 60 | 3 | 79 | I | 23 | 6 | 49 | 0 | | | | | | | 7 | 7 |
| | | | | | | | | II | 1 | 0 | 0 | 0 | | | | | | | | |
| | | 中・高保健体育一種 | | | | | 特別支援学校一種 | | | | | | | | | | 中・高専修 | | | |
| | | 合計 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | 種別 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | 院 | |
| 平成19年度 | 2007 | 219 | 135 | 17 | 67 | 0 | 58 | — | 20 | 3 | 34 | 1 | | | | | | | 23 | 23 |
| 平成20年度 | 2008 | 218 | 142 | 17 | 58 | 1 | 65 | — | 26 | 4 | 35 | 0 | | | | | | | 23 | 23 |
| | | 中・高保健体育一種 | | | | | 特別支援学校一種 | | | | | 養護教諭一種 | | | | | 中・高専修 | | | |
| | | 合計 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | 種別 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | ス | マ | 健 | 科目生 | 合計 | 院 | |
| 平成21年度 | 2009 | 205 | 126 | 25 | 53 | 1 | 73 | — | 31 | 7 | 35 | 0 | 9 | 0 | 0 | 9 | 0 | | 12 | 12 |
| 平成22年度 | 2010 | 217 | 134 | 29 | 53 | 1 | 52 | — | 14 | 2 | 35 | 1 | 6 | 0 | 0 | 6 | 0 | | 12 | 12 |
| 平成23年度 | 2011 | 226 | 142 | 26 | 58 | 0 | 57 | — | 18 | 5 | 34 | 0 | 5 | 0 | 0 | 5 | 0 | | 22 | 22 |
| 平成24年度 | 2012 | 232 | 151 | 31 | 50 | 0 | 48 | — | 18 | 1 | 29 | 0 | 13 | 0 | 0 | 13 | 0 | | 16 | 16 |
| 平成25年度 | 2013 | 249 | 167 | 23 | 59 | 0 | 59 | — | 19 | 2 | 38 | 0 | 12 | 0 | 0 | 12 | 0 | | 24 | 24 |
| 平成26年度 | 2014 | 220 | 148 | 18 | 54 | 0 | 64 | — | 33 | 0 | 31 | 0 | 11 | 0 | 0 | 11 | 0 | | 14 | 14 |
| 平成27年度 | 2015 | 215 | 145 | 15 | 55 | 0 | 73 | — | 32 | 0 | 41 | 0 | 11 | 0 | 0 | 11 | 0 | | 16 | 16 |
| 平成28年度 | 2016 | 225 | 144 | 26 | 55 | 0 | 67 | — | 29 | 1 | 37 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | | 16 | 16 |
| 平成29年度 | 2017 | 197 | 127 | 18 | 52 | 0 | 66 | — | 31 | 0 | 35 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | | 27 | 27 |
| 平成30年度 | 2018 | 194 | 130 | 14 | 50 | 0 | 76 | — | 41 | 2 | 33 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | | 20 | 20 |
| 令和元年度 | 2019 | 194 | 128 | 15 | 51 | 0 | 75 | — | 39 | 0 | 36 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | | 16 | 16 |
| 令和2年度 | 2020 | 239 | 176 | 8 | 55 | 0 | 74 | — | 42 | 1 | 31 | 0 | 7 | 0 | 0 | 7 | 0 | | 19 | 19 |
| 合計 | | 6477 | 2981 | 360 | 1286 | 25 | 2315 | — | 676 | 43 | 919 | 19 | 102 | 0 | 0 | 102 | 0 | | 479 | 479 |

学部・研究科の沿革（年表）

| 西暦 (和暦) | 理事長 | 学長 | 副学長 | さくらキャンパス | 学部長 | スポーツ健康科学部 | 研究科長 | スポーツ健康科学研究科 | 社会 | |
|------------------|------|------|-----|---|---|----------------------------------|--|---|--|---|
| 1986年 (昭和61年) | 東健彦 | 宮崎寛明 | | 順天堂創立150周年記念事業組織委員会設置 体育学部の新キャンパスを千葉県印旛郡 印旛村に決定 建設着工 | 千葉久三 | | 千葉久三 | | | |
| 1987年 (昭和62年) | | | | | | | | | | |
| 1988年 (昭和63年) | 懸田克躬 | 石井昌三 | | さくらキャンパス竣工式（2月28日） 東俊郎胸像建立（8月17日） | 黒田善雄 | | 黒田善雄 | 第24回オリンピック競技大会（1988/ソウル） 鈴木大地（100m背泳ぎ金メダル） SEOUL PARALYMPICS 第15回オリンピック冬季競技大会（1988/カルガリー） 第4回国際身体障害者冬季競技大会（インスブルック） | | |
| 1989年 (平成元年) | | | | | 入学定員を体育学科200名、 健康学科80名に変更 | | | | 元号が平成に（1月8日） | |
| 1990年 (平成2年) | | | | | | | | | | 東西ドイツ統一 |
| 1991年 (平成3年) | 石井昌三 | 山下辰久 | | 体育学部父兄会から体育学部さくら会に 改称 | | 体育学部女子1期生入学（体育学科36名、 健康学科20名） | | | バブル経済崩壊 | |
| 1992年 (平成4年) | | | | | 第2体育館竣工 | | | | 第25回オリンピック競技大会（1992/バルセロナ） バルセロナ1992パラリンピック競技大会 第16回オリンピック冬季競技大会（1992/アルベールビル） アルベールビル1992パラリンピック冬季競技大会 | |
| 1993年 (平成5年) | | | | | 体育学部さくら会から順天堂大学さくら会 に改称 | 高橋俊哉 | 体育学部をスポーツ健康科学部に 改組・改称し、スポーツ科学科、 スポーツマネジメント学科、健康学科の 3学科を設置 収容定員1120名（入学定員：スポ120名、 マネ80名、健康80名） | 高橋俊哉 | | Jリーグ開幕 |
| 1994年 (平成6年) | | | | | | | | | | 第17回オリンピック冬季競技大会（1994/リレハンメル） リレハンメル 1994パラリンピック冬季競技大会 |
| 1995年 (平成7年) | 石井昌三 | 片山仁 | | | | | | 阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件 | | |
| 1996年 (平成8年) | | | | | 最後の体育学部卒業式（3月） | | | | 第26回オリンピック競技大会（1996/アトランタ） アトランタ 1996パラリンピック競技大会 | |
| 1997年 (平成9年) | | | | | 啓心寮創設50周年記念式典 | | 編入学制度導入 | | 体育学研究科をスポーツ健康科学研究科 に改称 | |
| 1998年 (平成10年) | | | | | 学部卒業生の保護者の会として桜順会設 立（8月） | 北森義明 | | | | 第18回オリンピック冬季競技大会（1998/長野） 長野1998パラリンピック冬季競技大会 |
| 1999年 (平成11年) | | | | | | | | | | |
| 2000年 (平成12年) | 小川秀興 | | | | | | 博士後期課程設置（入学定員4名） | 第27回オリンピック競技大会（2000/シドニー） シドニー2000パラリンピック競技大会 | | |
| 2001年 (平成13年) | | | | 青木純一郎 | 入学定員をスポーツ科学科140名、 スポーツマネジメント学科70名、 健康学科70名に変更 科目等履修生制度創設 カリキュラム変更 | 青木純一郎 | 博士前期課程入試において社会人入試を 導入 | アメリカ同時多発テロ | | |

| | | | | | | | |
|------------------|------|-------|--|------|-------------------------|---|--|
| 2002年 (平成14年) | | | カリキュラム変更 スポーツ科学科にコース制（スポーツ 医科学、コーチング科学）を導入 精神保健福祉士養成課程開始 | | | 第19回オリンピック冬季競技大会(2002/ソルトレークシティー) ソルトレーク2002パラリンピック冬季競技大会 日韓サッカーワールドカップ | |
| 2003年 (平成15年) | | | カリキュラム変更 | | 日本初の博士（スポーツ健康科学）が 誕生 | | |
| 2004年 (平成16年) | 小川秀興 | 青木純一郎 | 医療看護学部がさくらキャンパスで 月曜日の授業を開始 3キャンパス統一の図書館業務システムを 導入。 第1回順天堂大学スポーツ健康科学部国 際シンポジウム開催 | 澤木啓祐 | 米田継武 | 第28回オリンピック競技大会（2004/アテネ） 米田功、富田洋之、鹿島丈博（体操男子団体総合金メダル） アテネ2004パラリンピック競技大会 | |
| 2005年 (平成17年) | | | スポーツ健康医科学研究所の設置 （ハイテクリサーチセンター整備事業） サッカー場人工芝化（文部科学省教育装 置補助金助成事業） 文京区（東京都）との連携協定を 締結（4月22日） | | | スポーツ科学科の入学定員を 190名に変更 AO入試の導入 | |
| 2006年 (平成18年) | 小川秀興 | | スポーツ健康医科学研究所竣工 | 澤木啓祐 | 米田継武 | 博士前期課程の入学定員を61名に変更 博士前期課程において本郷・お茶の水 クラス創設 | 第20回オリンピック冬季競技大会（2006/トリノ） トリノ 2006 パラリンピック冬季競技大会 |
| 2007年 (平成19年) | | | カリキュラム変更 | | | | |
| 2008年 (平成20年) | 小川秀興 | | 北京体育大学と国際交流協定を締結 | 澤木啓祐 | 米田継武 | リーマンショック 第29回オリンピック競技大会（2008/北京） 北京2008パラリンピック競技大会 | |
| 2009年 (平成21年) | | | カリキュラム変更 正課教育内でのキャリア教育開始 養護教諭免許課程開始 玉川大学特別協定プログラム（小学校 教諭2種免許課程）開始 | | | | |
| 2010年 (平成22年) | 木南英紀 | | カリキュラム変更 学科を越えたゼミナール選択の 一部自由化 センター試験を利用した入試の導入 一般入試における実技試験の廃止 | 野川春夫 | 形本静夫 | 所在地の印旛村が本埜村、印西市と合併して 印西市に（3月23日） 第21回オリンピック冬季競技大会（2010/バンクーバー） バンクーバー2010パラリンピック冬季競技大会 | |
| 2011年 (平成23年) | | | カリキュラム変更 | | | 博士前期課程において早期履修制度 （学部4年生対象）を導入 | 東日本大震災発生 |
| 2012年 (平成24年) | 木南英紀 | | 佐倉市（千葉県）との連携協定を 締結（10月23日） | 野川春夫 | 形本静夫 | 博士前期課程において専攻領域を専攻系 に変更 博士前期・後期課程において早期修了 制度導入 | 第30回オリンピック競技大会（2012/ロンドン） ロンドン2012パラリンピック競技大会 |
| 2013年 (平成25年) | | | 順天堂創立175周年 啓友会館竣工 成田市（千葉県）との連携協定を 締結（12月10日） 酒々井町（千葉県）との連携協定を 締結（12月26日） 白井市（千葉県）との連携協定を 締結（12月26日） | | | 学納金減額154万円→135万円（入学金含） | 北村薫 |

| | | | | | | | |
|------------------|--------------|---|------|--|------|--|--|
| 2014年 (平成26年) | 小川秀興 木南英紀 | 印西市（千葉県）との連携協定を締結（1月24日） 三島市（静岡県）との連携協定を締結（1月30日） 習志野市（千葉県）との連携協定を締結（2月12日） 栄町（千葉県）との連携協定を締結（3月26日） 東郷町（愛知県）との連携協定を締結（4月2日） 女性スポーツ研究センター設立（8月1日） サッカー場人工芝張替 ラグビー場人工芝化 図書館分館2階にラーニング・コモンズスペースを設置 | 島内憲夫 | CAP制導入 | | | 第22回オリンピック冬季競技大会（2014/ソチ） ソチ 2014 パラリンピック冬季競技大会 |
| 2015年 (平成27年) | | 国際教養学部一般体育科目授業開始 浦安市（千葉県）との連携協定を締結（11月17日） 陸上競技場改修（ウレタン舗装） | 加納實 | カリキュラム変更 推薦入試における実技試験の廃止 | 内藤久士 | | スポーツ庁設置（初代長官に鈴木大地） |
| 2016年 (平成28年) | 新井一 | 富里市（千葉県）との連携協定を締結（11月24日） 図書館分館からさくらキャンパス学術メディアセンターに改称 | 内藤久士 | 教員志望に特化した入試を導入 英語資格・検定試験を利用した入試を導入 | | | 熊本地震発生 第31回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ） 田中佑典、加藤凌平（体操男子団体総合金メダル） リオ2016パラリンピック競技大会 |
| 2017年 (平成29年) | | OGAWA GYMNASTICS ARENA（新体操競技場）竣工 女子寮（啓心寮 西寮A）竣工 健康管理室から安全衛生管理室に改称 | | 収容定員を1640名に変更 (入学定員:スポ250名、マネ80名、健康80名) 一般入試（高得点2科目方式）の導入 センター利用入試（後期）の導入 | | | |
| 2018年 (平成30年) | | クロスカントリーコース整備 スポーツクリニック開設 | | | | 第23回オリンピック冬季競技大会（2018/平昌） 平昌2018パラリンピック冬季競技大会 | |
| 2019年 (令和元年) | | 保健医療学部一般体育科目授業開始 スポーツクリニック（婦人科相談）開始 | 吉村雅文 | カリキュラム変更 | | 元号が令和に（5月1日） 令和元年房総半島台風が上陸、激甚災害に指定 | |
| 2020年 (令和2年) | | Web会議システムを用いた遠隔授業を導入 健診システム（HM-neo）導入 | | 同窓会（啓友会）創立60周年 大学入学者選抜改革に伴う大幅な入試変更（総合型選抜・学校推薦型選抜・一般選抜） | | 新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により 非常事態宣言発令 東京オリンピック・パラリンピック競技大会の延期 | |
| 2021年 (令和3年) | | スポーツ健康医科学推進機構を設置(4月) 女子寮（啓心寮 西寮B）・講義棟（3号館）竣工 | 吉村雅文 | 体育学部の開設から70周年 スポーツ健康科学部を改組して3学科制から1学科6コース制 スポーツ健康科学部を設置 (収容定員2400名) | 吉村雅文 | 体育学研究科の開設から50周年 | 第32回オリンピック競技大会（2020/東京） 橋本大輝（体操男子団体銀メダル、体操男子個人総合金メダル、体操男子種目別鉄棒金メダル） 萱和磨（体操男子団体銀メダル、体操男子種目別あん馬銅メダル） 谷川航（体操男子団体銀メダル） 三浦龍司（陸上男子3000m障害7位入賞） 東京2020パラリンピック競技大会 宇城元（パワーリフティング72kg級6位入賞） 山崎晃裕（陸上男子やり投げ7位入賞） |

順天堂大学さくらキャンパス構内図



編集後記

スポーツ健康科学部とスポーツ健康科学研究科は、70周年と50周年の節目を迎え、歴史の転換点に立っています。

スポーツ健康科学部では、体育指導者の養成という体育学部設置以来の伝統を大切にしながらも、学生の多様なニーズやスポーツと健康を取り巻く社会環境の変化に応えるべく、本年度から入学定員を600人に増員するとともに、1学部3学科（スポーツ科学科、スポーツマネジメント学科、健康学科）から1学部1学科（スポーツ健康科学科）へと改組しました。スポーツ健康科学研究科では、博士課程を設置し、また、社会人や留学生も学びやすい環境の充実に取り組んでまいりましたが、学部改組に連携した改革が必要になるでしょう。

さくらキャンパスに移転してから34年が経ちました。スポーツ健康科学部とスポーツ健康科学研究科がこれから大きな進化を遂げるための海図や羅針盤は、この記念誌「さくらキャンパスの歩み」の中にも見つけることができます。ページをめくり、当時を振り返りながら、学部、研究科、そして順天堂大学の発展に夢を膨らませていただきましたら幸甚でございます。

本誌編集にあたり、ご多忙の中、ご支援ご協力いただきました小川秀興理事長、新井一学長をはじめ法人内外の関係者の皆様、記念誌発刊に際しまして多大なご支援を賜りました「啓友会」同窓会員の皆様、原稿執筆、写真提供を快くお受けいただきました教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

2022年3月吉日

順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・
大学院スポーツ健康科学研究科50周年記念誌編集委員会

- 委員長 吉村 雅文
- 委員 内藤 久士
- 委員 大竹 淳雅
- 委員 大久保 菜穂子
- 委員 木藤 友規
- 委員 刃刀 みさ
- 委員 玉木 誠
- 委員 中嶽 誠
- 委員 長岡 知
- 委員 吉川 毅



- ① 東俊郎先生の胸像 1988（昭和63）年建立
- ② 3号館 2021（令和3）年竣工
- ③ OGAWA GYMNASTICS ARENA 2017（平成29）年竣工
- ④ 1号館 1988（昭和63）年竣工
- ⑤ 新緑の季節（キャンパス中央の通路）
- ⑥ さくらキャンパス全景

順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・ 大学院スポーツ健康科学研究科50周年記念誌

～さくらキャンパスの歩み～

発行日……………2022年3月31日

編纂……………順天堂大学スポーツ健康科学部70周年・
大学院スポーツ健康科学研究科50周年記念誌
編集委員会

発行所……………順天堂大学スポーツ健康科学部
〒270-1695千葉県印西市平賀学園台1-1
電話（0476）98-1001（代表）

印刷・製本……………株式会社東京印書館



Juntendo University
Faculty of Health and Sports Science
Graduate School of Health and Sports Science